

一、後日の證として其地日本役所並東京横濱各國コンシユル役所ニ、其地日本長官ニ調印せる繪圖面壹枚ツ、茲差置るし。

二條

競直段高直ニ方ニ必賣渡せし。若競高貳人又ハ其餘ニ人數ニ間ニ異論起る事あらハ、改てせらしむるし。

三條

買手ハ高聲よて直段附へし、競上ケ金高ニ儀ハ、壹坪ニ付金壹分の五分より少さあらざるを賣手自己の爲メ或ハ他人の爲メに直附買入る事有へからせ、落槌ニ節、賣人買手ニ姓名を高聲ニ唱へ、早速帳面に留るし。且追る地券茲認渡せ時ハ、右買手の外他の名前ニ認むへあらは。

四條

落槌ニ節、未タ次の地所茲競賣ヨ出さる内買手より追る競落し代金可相拂證として内金百兩其場よて可相納、是を追る地券相渡せ時ニ差引勘定致せへし。若右内金早速不相納ものハ破談ニ取極メ、次ニ一區茲競賣ニ出さる内、改る是茲競賣ヨ出せへし。



五條

地券を別紙に通相認へし。右日附ハ千八百七十年第七月一日と書入、同日相渡を様用意可致。右地券ニ書入る名面の當人に可渡ハ勿論ニハ得共請取ニ罷出ハ其の買取或ハ請取權を授りし代人に證書を持參り、或ハ其外證據たるへき事被らざらば、其者へ渡を事不苦。尤右に者其證書或ハ其筋よて印形据へ有之寫を日本長官へ可相納。若同年第七月一日迄ニ買請る事被らずせざるものハ、破談ニ相極め、次に競賣に節改めて別人ニせらしめ、既ニ納めし内金ハ日本政府に取上ケヘシ。

六條

地券相渡を時ハ、手数料として金五兩日本役所に納むるし。

七條

日本政府と外國公使と千八百七十年第五月四日ニ取結たる別紙約書三ヶ條に隨ひ、沽券金と外に夫々地所に借主或ハ引受人相續人ハ永久に地代ハ壹坪ニ付金壹分貳朱可相納、且右約書第六ヶ條ニ隨ひ、居留地取締入費等として、借主より年々一坪ニ付金貳朱ニ越さる高を納むへし。

八條

條約濟外國人民たる證據無之ものへハ、地券等相渡ざるるし。

地券案文

金 兩受取申し。右ニ付予日本政府の代として、何某或ハ引受人相續人ハ、東京外國人居留地公事に繪圖面通り幾百坪有之第幾番に地所、永久貸渡を事實正也。右貸渡せしヶ條左之通り。

第一、千八百七十年第五月四日日本政府と外國公使と取替せしヶ條書第三ヶ條ニ隨ひ、何某或ハ引請人相續人壹坪金壹分貳朱に割合よて地代總高金 圓、毎年 月 日無相違前金よて可相納。

第二、何某或ハ引受人相續人ハ右約書第六條ニ隨ひ、取極し居留地取締入費を無相違年々コンシユルニ可相納。但壹坪ニ付金貳朱を過へらば、

第三、右第何番或ハ其内一部に地を、日本と條約濟外國人民を除く外、他人に讓るるらば、且讓る時は必き双方コンシユルの前ニ譲り渡しを爲し。且其地の日本長官其事を帳面ニ書加ふへし。右ヶ條に内違背有之時ハ、日本政府より其コンシユルに訴ふへし。若地租を不納時ハ、右地租並過料として一



ケ月ニ付右地租高ニ貳分と訴訟裁判入費とを差出さしむる様ニ其コンシ  
ユルよて裁斷を爲し。右を不納間と其過料として右裁斷の日より右可納高  
ニ右同様貳分と利息を取立爲し。依る地券貳葉相認壹枚ハ借主へ渡し置壹  
枚ハ日本長官の控とせへし。

其地之日本長官  
姓 名 調 印 ○以上府  
治類纂同。

地所證文

金七百九十五圓五拾六錢貳厘五毛請取申し。右ニ付予日本政府の代として、  
ジオージダブポリユウ 或ハ引受人相續人ハ東京外國人居留地公けの繪圖面通  
アンホーベンボルフ 或ハ引受人相續人ハ一坪金三十七錢五厘の  
五百貳拾六坪有之第十八番の地所永久貸渡を事實正也。右貸渡せしケ條左  
之通。

第一、千八百七十年五月四日日本政府と外國公使と取替せしケ條書第三  
ケ條ニ隨ヒ、ジオージダブポリユウ 或ハ引受人相續人ハ一坪金三十七錢五厘の  
割合ニる地代惣高金百九十七圓貳十五錢每年七月一日無相違前金ニお相  
納むへし。

第二、ジオージダブポリユウ 或ハ引受人相續人より、右約書第六條ニ隨ヒ取極

し居留地取締入費を無相違年々領事ニ納むへし。但一坪ニ付十二錢五厘ニ  
過へからば。

第三、右第十八番或ハ其内一部の地を日本と條約濟外國人民を除の外人  
ニ讓るへからば。且讓る時ハ、必以双方領事の前ニる讓り渡をへし。且其地の  
日本長官其事を帳面ニ書加ふへし。右ケ條の内違背有之時ハ、日本政府より  
其領事に訴ふへし。若し地租を納めざる時ハ、右地租並過料として一ケ月ニ  
付右地租高の二分と訴訟裁斷入費とを差出さしむる様ニ、其領事よて裁斷  
を爲し。右を不納間ハ、其過料として裁斷の日より右納むへき高に前同様二  
分の利息を取立へし。依て地券二枚相認め、壹枚ハ借主に渡し置き、壹枚ハ日  
本長官の控とせへし。

明治 年 月

千八百七十 年 月 一日

東京府權知事 楠 本 正 隆

東京 府 印



切押 Foreign Settlement, Tokai.

Lot No.....

In Consideration of the sum of..... Bus, the payment whereof is hereby acknowledged, the undersigned....., acting on behalf of the Japanese Government, hereby leases in perpetuity to....., his heirs and assigns, the Lot of land numbered and described in the official plan of the foreign settlement of Tokai, as No..... and containing.....tsubos more or less, on the following conditions.

First.—That the said....., his heirs or assigns, shall pay in advance on the..... day of....., in each year the sum of..... Bus as rent, being at the rate of one Bu and a half per tsubo, as provided by Article III of the Arrangement and the Foreign Representatives on the Fourth day of May, one thousand eight hundred and seventy.

Second.—That the said....., his heirs or assigns, shall pay annually to his Consular authority such charge for the maintenance of a Police Force in the said settle-

ment, not exceeding half of a Bu per tsubo, as shall be determined in the manner provided by Article VI. of the aforesaid Arrangement.

Third.—That every transfer of the said Lot No....., or any portion thereof, shall be made to no other person than a subject or citizen of a Power having a treaty with Japan, and shall be executed before the Consular authorities of the parties concerned, and shall be registered by the local Japanese authorities.

For non—performance of any of the aforesaid conditions, proceedings may be instituted against the said....., his heirs or assigns, before his or their Consular authorities; and in case of non-payment of rent, the Japanese authorities shall be entitled to a judgement for the amount found due, and also to a penalty of two per cent, per month of the said amount, and to the costs of suit, and the said judgement shall bear the same rate of interest by way of penalty until paid.

Done in duplicate, one copy being given to the Lessee and the other being filed by the Japanese authorities, this.....day of.....in the year one thousand eight hundred and seventy.



競落金納之節受取書  
 競落金請取  
 東京開市場地所第  
 競落金  
 地券の入費金  
 合金  
 預金差引  
 殘金  
 右之國臣民  
 より今日  
 請取もの也  
 明治 年 月 日  
 千八百七十 年 月 日  
 東京 府

Purchase money Receipt

Lot No. Tokiofu. 187. in the Foreign concession Tokei.

Purchase money  
Cost of Title Deed  
Less deposit

yens

Received this day from the above payment, Seal of Tokiofu.

Subject

競落ノ手附金差出候節受取書

預金請取  
 東京開市場地所第  
 競落高金  
 内  
 金百圓の高を 國臣民  
 より預金として今日  
 請取たり  
 右之競落高皆濟の時差引  
 勘定せべきもの也  
 明治 年 月 日  
 千八百七十 年 月 日  
 東京 府

Deposit Receipt

Lot No. Tokiofu. 187. in the Foreign concession Tokei.

Received this day from the sum of one hundred yens being

Subject Deposit of the purchase money in the Foreign concession Tokei.

This amount to be deducted from the full amount of purchase money when tendored

帝都時代ノ建築



地料納之前受取書  
慶應三丁卯年中於舊幕各國公使  
ト取極タル規則  
洋曆千八百六〇年也

地租請取	東京開市場	地所第	地坪	一千八百七十	一千八百七十	金	右者 國臣民	請取もの也	明治 年月 日	一千八百七十 月 日	東京 府
				月日 ヨリ	月日 ヲテ		より今日				

Ground rent Receipt

Lot No.  
Tsubo

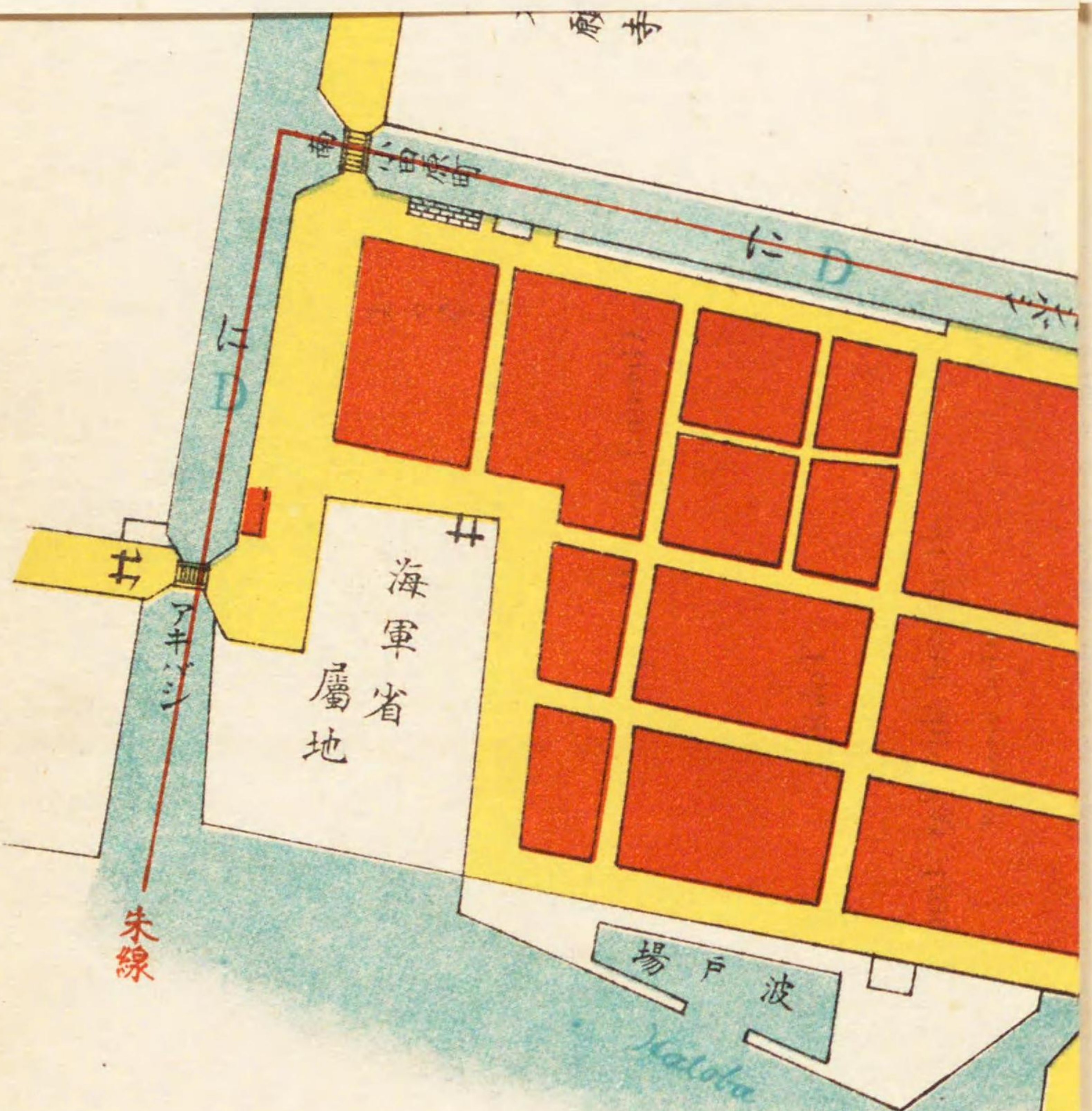
Tokiofu.

187.

Subject

Received this day from  
the sum of

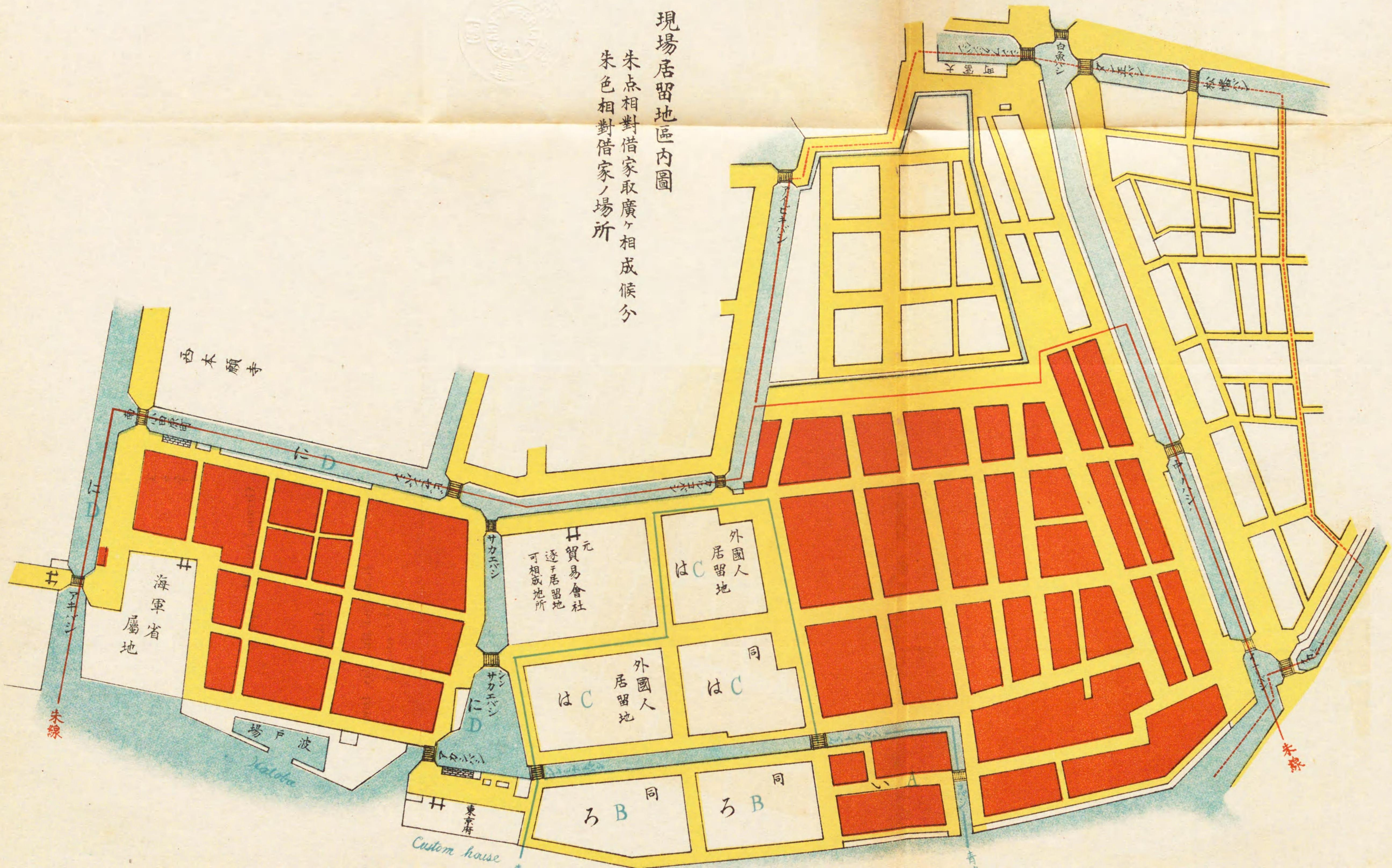
amount of ground Rent on Lot  
in Foreign concession at Tsukiji Tokai for the one current year ending.  
Seal of Tokiofu,





現場居留地区内圖

朱点相對借家取廣々相成候分  
朱色相對借家ノ場所



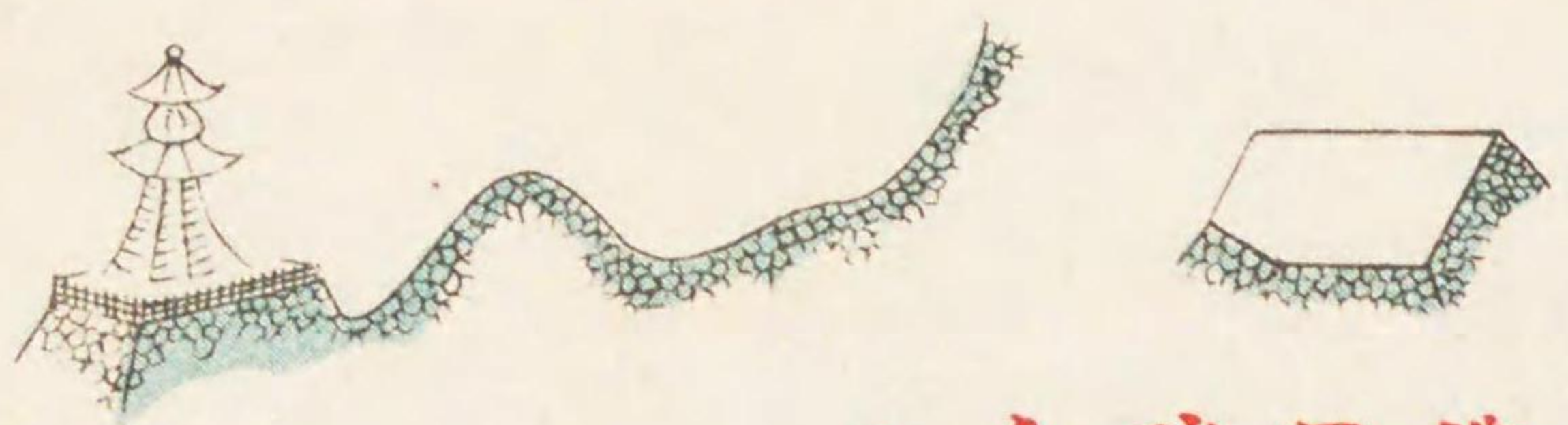












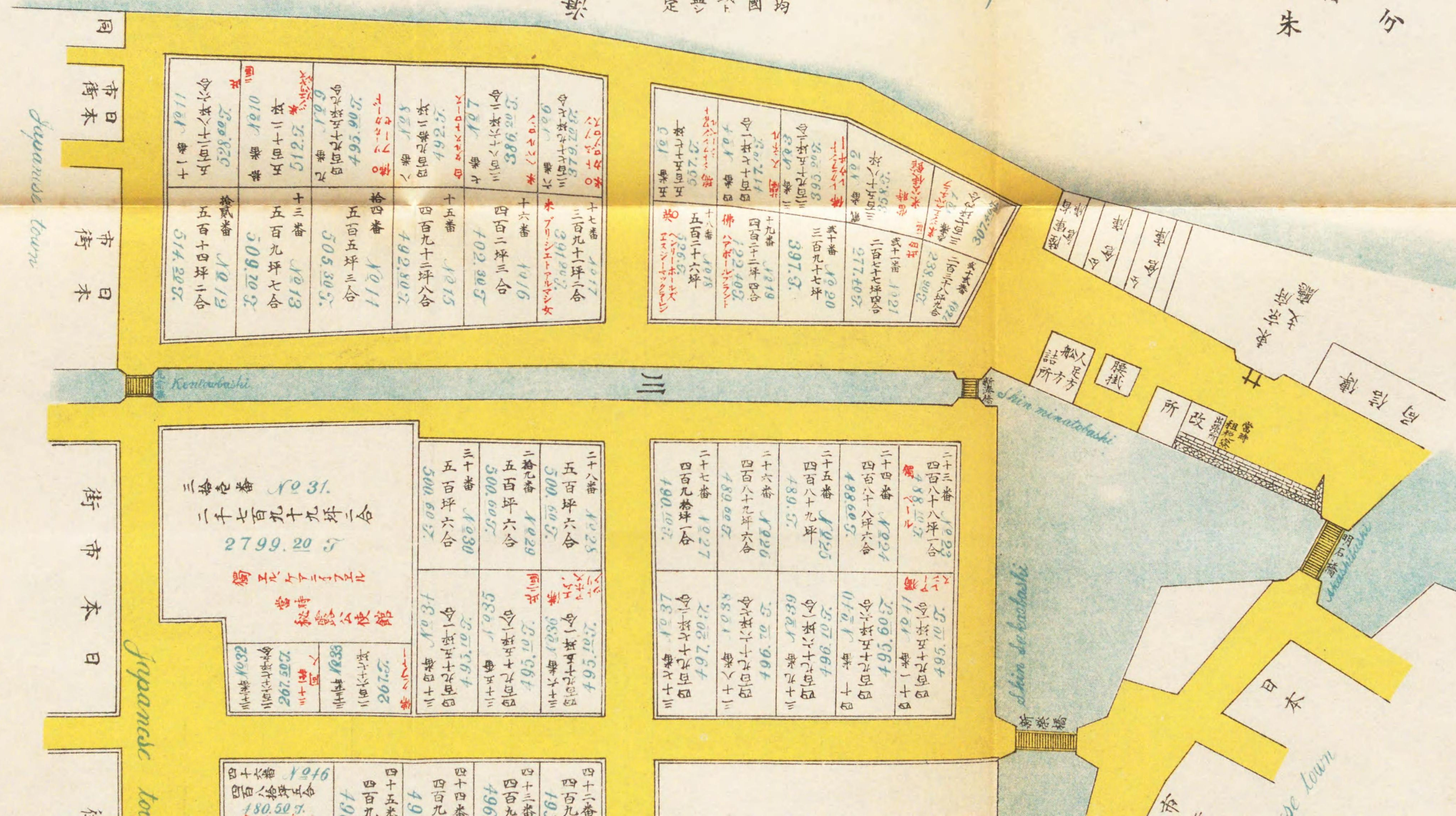
米 米利堅合眾國人  
 英 大英列強國人  
 佛 佛蘭西國人  
 獨 獨逸聯邦人  
 瑞 瑞西聯邦人  
 白 白耳義國人  
 兩名

居留地競元代之義、人家引料并地平均  
 其外下水等之入用平均右見積り以各國  
 公使協議之上壹坪ニ付金壹圓五拾錢ト  
 相定メ且又地租之義ト同様討儀ヲ盡シ  
 一々年壹坪ニ付金三拾七匁五厘ト決定  
 相成候儀ニ有之候

The Rent is fixed 1½ boos  
 one Tsuboo at one year.

The upset price is fixed  
 on 6 boos per one Tsuboo.

羅元代一坪ニ付  
 金一兩二分  
 地代一々年一坪ニ付  
 金一分二朱









府治類纂同シ。法規分類大全載スル所ハ、行文ニ若干ノ相違有リ。附録シテ參考ニ資スト云フ。

東京に外國人居留する規則附録明治三年四月三日(千八百七十一年五月三日)等島外務大臣各國公使と協定

第一條 別紙繪圖面に朱線を以て示せし場所内は、條約濟外國人、日本人より家屋を借り、商賣を營む爲め、住居する事を得べき旨を約諾せり。且又日本人右區内にて家屋を外國人に貸渡す事、五箇年を過ぐべからず。尤雙方にて示談の上、期限を延す事もあるべし。右區内にて日本人より家屋を借受る外國人は、道路下水溝或は堀割修復の爲、日本人より納むべき町入用を同様に納むべし。

第二條 千八百六十七年十一月十六日取結ひし東京外國人居留地規則第一箇條及び第二箇條に基き、別紙繪圖面青線内の地所ハ、日本政府より外國人に貸渡すべし。其旨を約諾せり。右場所ハ其地と接近せる日本人の地所と幅一百尺の道を以て北の方を境界にせし。且(ろ)と印せる二區及び(は)と印せる三區の地所を外國人に貸渡せし上ハ、速に(い)と號せる正面の地所ニある日本人家を取拂ふべし。右青線内の地面、悉く外國人にて所有せし時ハ、居留地を別紙繪圖面(に)と印せる堀割迄廣むべし。

第三條 別紙繪圖面に(ろ)と印せる正面二區の地所、並(は)と印せる後手三區の地所、殘らば來る第六月二日に競賣に出すべし。右五區の地所競元代一坪ニ付金一兩二分、一箇年の地租一坪ニ付金一分二朱たるべし。

(い)とせる一區内の地所並(に)と印せる堀割を以て境界にせし地所内ハ、競元代  
帝都時代ノ港灣



一坪ニ付金二兩、一箇年の地租一坪ニ付金一分二朱たるへし。  
 第四條 競賣ハ、此規則ニ添る競賣箇條書ニ隨ふへし。居留地内にて其他の地所を外國人にて要する旨を、各國コンシユルより日本政府に申立る歟、又ハ政府にて競賣せんと欲する時は、都て此後の地所競賣ニ出候へき旨を、一箇月以前ニ日本政府より布告すへし。

第五條 外國人より前文の地租を拂ふに付、日本政府にて海又は掘割の石垣及び居留地の道路を堅固に築造し、且之を修理候る事、又居留地ニ下水溝を附け道路に夜燈を照候事も約諾せり。

第六條 居留地取締として外國人を雇入る事を、日本政府と外國公使雙方にて取極し時ハ、右出費を補ふ爲め、外國地借人より貸渡せし地所一坪ニ付年々金二朱に越さる高を納むへし。但右年々可納金高及び右拂方の日限ハ、其地の日本長官及コンシユルにて取極へし。

第七條 方今兵庫大坂にて施行すると等しき外國人居留取締の規則を此後設けんと欲候る時ハ、日本政府にて其事ニ付外國公使等より申立る廉を勘考候へし。

東京外國人居留地面競賣箇條

第一條 競賣候へき地所残らば賣れ終る迄、日本政府にて望める順序ニ其地面を一區宛ニ區分候へし。後日の證として其地の日本役所并東京横濱各國コンシユル役所に其地日本長官の調印せる繪圖面一枚宛を差置候へし。

第二條 競直段高直の方へ必は賣渡すへし。若し競高二人又ハ二人以上の人々の

間ニ異論起る事あらば、改めて更に競賣ニ出候へし。

第三條 買手ハ高聲にて直附候へし。競上げ金高の儀ハ一坪に付金一分の五分より少ふるらざるへし。競賣人ハ自己の爲或ハ他人の爲に直附する事あるへからば、落槌の節、競賣人ハ買手の姓名を高聲に唱へ、早速帳面ニ留むへし。尤追て地券を渡候時、買手の外決して他の名前ニ記候へらば。

第四條 最も高價を入る者ハ落槌の節未だ次の地所を競賣ニ出さざる内、追て競落代金可相拂證として、内金百兩、其場にて相納むへし。是ハ追て地券相渡候時ハ、差引勘定致候へし。若し右内金早速不相納者ハ、破談ニ相極め、次の一區を競賣ニ出さざる内、改めて更に競賣ニ出候へし。

第五條 地券ハ別紙の通相認へし。右日附ハ一千八百七十年第七月一日と書入、同日相渡候様用意可致、右地券ニ書入るゝ名面の當人へ可渡ハ勿論ニ候得共、請取候罷出候者、代人とる委任状或ハ其地所を買取又ハ地券を請取るへき權を授りし旨の確證を持參するに於てハ、其者へ渡候事不苦、尤右證書或ハ其筋にて認めざる寫を日本地方長官の方へ留置候へし。若し同年七月一日迄ニ買請の手續を全了せざる者ハ、破談ニ相極め、次の競賣の節改めて別人ニせらしめ、既に納めし内金ハ日本政府へ取上候へし。

第六條 地券相渡候時ハ、手数料として金五兩日本地方官へ納むへし。

第七條 日本政府と外國公使と千八百七十年第五月四日ニ取結たる別紙約書第三箇條ニ隨ひ、沽券金の外、夫々地所の借主或ハ引受人相續人より、永久の地代ハ一



坪ニ付金一分二朱可相納、且右約書第六箇條ニ隨ひ、居留地取締入費として、借主より年々一坪ニ付金二朱ニ越さる高を納むへし。  
第八條 條約濟外國人民ニる證據無レ之者へハ、地券相渡不レ申事。

東京外國人居留地々券案

第何番地所

金何圓正ニ落手せり依て拙者日本政府の代として、何某或ハ引受人或ハ相續人へ、東京外國人居留地公けの繪圖面通何坪有レ之第何番の地所を、左の方法を以永久貸渡せり。

第一、千八百七十年五月四日日本政府と外國公使と取結ひし取極書第三箇條に隨ひ、何某或ハ引受人或ハ相續人、一坪金一分二朱の割合にて、地代總高金何圓を毎年何月何日迄に無相違前金にて相納可レ申事。

第二、何某或ハ引受人或ハ相續人より、右約書第六條に隨ひ、取極し居留地取締入費を無相違年々領事に納むへし。但一坪ニ付金二朱に過へらば。

第三、右第何番の地所或ハ其内一部より共、日本と條約濟外國人民の外他人ニ讓るへらば。若し之を讓る時ハ、必以双方領事の前にて讓り渡はへし。且其地の日本長官其趣を帳面に書加ふへし。

右箇條の内違背有レ之時ハ、其領事之を吟味すへし。若し地租を納めざる時ハ、其地租並過料として、一箇月に付右地租の二分と訴訟裁斷入費とを差出さしむる様、日本長官にて裁斷はへし、右を不納間ハ、其過料として、裁斷の日より右納むへき高に前

同様二分の利息を取立へし。依て此地券を二枚に書し、一枚ハ借主へ渡し、一枚ハ日本長官の控とすへし。

年月日

日本地方官 姓名 調印

羽根田洲浮標設置  
羽根田洲浮標設置事蹟

五日〇明治三年(紀元二五三〇年)四月。羽根田洲武藏國在原郡外側二箇所ニ浮標ヲ設ク。〇法令類纂

羽根田洲浮標設置 法令類纂〇太政類典同ニ據ル。

浮標布告

一、此度浮標ヲ羽根田洲ノ外側二ヶ所へ相備へ、其南方ノ者ハ鐵造赤色頭上ニ籠ヲ造ル。其高サ水面ヨリ十「フット」此所海ノ深サ六尋ナリ。

一、此浮標ヨリ、本牧ハ西南四十八度ノ方角ニ當リ、川崎ハ西北八度半「パンス」鼻ハ東南六十八度ニ當ル。但シ其方位正シキコト疑ナシ。

一、北方ノ浮標ハ、同ク鐵造黑色、頭上ニ籠アリ。高サ水面ヨリ十「フット」、海ノ深サ六尋ナリ。

一、此浮標ヨリ、川崎ハ西南八十九度、中川口ハ東北六度「パンス」鼻ハ東南五十五度、一方ノ浮標ハ、西南三十四度半ニ當ル。但シ其方位正シキコト疑ナシ。

一、右兩所浮標ノ傍ヲ東ニ向テ過ルルハ、又兩所ノ間ヲ直線ニ走ルルハ害ナシ。

帝都時代ノ港灣



右民部省ノ命令ニ依テ、諸方ノ航客へ告知スル者ナリ。

横濱辨天燈明臺取立所日本政府機械方  
アール・ヘンリー・プラントン

明治十四年二月工部省第六號ヲ以テ、八年同所燈臺設立セルヲ以テ、廢止スル  
モ航路ニ不便無キニ依リ、黒色浮標ヲ除去スル旨布達有リ。○府治類纂。

〔附記〕 蒸氣飛脚船取立願

附記  
蒸氣飛脚  
船取立願

庚午六月五日  
三河島村七郎兵衛義當所より勢州四日市港に之蒸氣船飛脚船運送に渡  
世仕度段、別紙に通願出に間、廻漕會社におゐて差支無之にハ、兼お規則  
に通申渡に積に間、至急御答承知致度、因る願書相添、此段爲念及御問合  
候也。

庚午○明治三年六月五日

東京府 常務 局

通商司御中

乍恐以書付蒸氣飛脚船開業に儀奉願上し。

一、商法上におゐて最第一に要務ふ仕に、各所品物に時價昂低に變化速  
に通達仕に義、荷物運輸便利なる時日を不移到着仕に義、此兩條に止り申

以。然に去十二月農商に不拘蒸氣船風帆船所持仕運送不苦趣、御布告拜聽  
難有奉感戴。夫尾濃江勢ハ生産に物貨饒多にして、紙生糸綿木綿茶葉水  
油磁器其他諸品東方に運輸に數、陸續絶間無之、雖然在來に帆船故、時々風  
波之たれに荷物を海中に放擲仕に義も年分不少、且着船延引に多、賣買  
に機を失ひも節々有之、是商估共積年深憂に御座に間、前御布告に基き、私  
共會社取建、勢州四日市港運送蒸氣飛脚船相開申度奉存し。就るに東海道  
咽喉に御坐しに付、幸冥加之爲東西上下之御用荷物船送仕度、陸路若同所  
より大津驛迄馬車仕立置附越可仕、賃銀之義ハ、現今御下ケに相成居に驛  
路人馬賃錢之百分一、抜頂戴仕、海陸共無御差支、次立可相勤、總る東西御用  
荷物、御上之御失費を些少にして、御用便ハ迅速自在に被爲に様仕度志  
願に御坐し、日數之義ハ蒸氣船今朝八字東京仕立仕に得老、翌朝六字に老  
無相違着船可仕、夫より馬車を以大津驛まで午後之五字に老爲行届可申、  
因是二日二夜に老西京之御用便相達可申奉存に間、行旅之士民諸荷物等  
も、賃銀廉價に運送仕にハ、諸藩御往復等も御辨利に可相成、隨る道中筋  
國々助郷も費も相省き、農民耕耘も一途に盡力仕、是亦御國益之一端にも



可有之哉。奉存也。則運賃銀收納之内、船上陸上諸雜費會社中財本利息等精算仕、全利益之十分一を於當御府窮民御救育貧院幼院御用途之中に上納仕度、然ル上ハ勢州港に飛脚船之義と、貳十五年之間私共會社事務ニ被仰付被下置也。様奉願上。猶追々御糺問之節、船中規則賃銀割合等、委細書取を以可申上。何卒出格之以御仁恤願之通り御差許被成下置也。様、偏ニ奉願上。以上。

午〇明治 四月五日

地方三番組三河島村百姓  
七郎 兵衛 印  
村年寄  
勘 右 衛 門 印

東京府 御役所

飛脚船運賃並乗船規則

一、我邦何處之港ニあるも、一時ニ荷物集聚不致舊習故、船も八百トンスより千トンス限、馬力も百より百三十位、船長とも凡貳拾七八間より三十二三間迄を用申也。

一、出帆之義、壹艘之船、月ニ東京より四度、勢州より四度、都合八度之往復ニ御座也。乗込之處追々相増積荷物等も盛大ニ相成也。上ハ、四艘ニも仕可申也。

先最初ハ試之たを壹貳艘を以開業可仕奉存也。

一、凡千トンス之船部屋其外場取且八分積と見込也。故四百トンス位ならてハ難積入、其内御用荷物ニ分爲手當常々五十トンス分ハ、出帆迄明置也。間、全積高三百五十トンス此石高貳千貳百石餘。

一、部屋數凡四十有之也。間、上等四十人、中等者二百人ニあるも乗組相成可申也。

一、商荷物瀨取方之義也、双方港内ハ藏船を置、右を着船即日相移し、夫に向瀨取船追々参り也。様可取計、尤五日以上引取不申ものハ、藏敷受取可申也。道中往復荷物也、波戸場迄持分ニ致瀨取置可申事。

一、乗組之處ハ、出帆定刻二時前までハ乗組切手買置待合セ可申、刻限切レ得也。何様之御方ニあるも其船ニ切手ハ賣不申定、假令乗組壹人も無之也。あるも、出帆爲致也事。

但、右延引仕得也、制度難立也。間、最初一兩度を空船ニあるも日限刻限無、相違往復いたし心得ニ御座也。

一、一晝夜石炭之入用千トンス船ニある貳萬貳三千斤位。



一、胡麻油

壹斗四五升

一、豚油

十斤

一、麻

貳貫目程

其外種々雜品入用有之。

一、船長

壹人

一、添役測量兼

壹人

一、器械方

貳人

一、水先

貳人

一、水夫火焚

貳十五人

一、船中取締

壹人

是之會社のもの乗組御用荷物護送ヲ専務ニ仕、荷物貫目改等ハ船長促々所置可致、都る乗組之人不辨無之様心附可申事。

一、俗事賄

壹人

一、炊方

五人

一、小遣いもの

七人

是ハ乗込し人給仕食料其外し世話ヲ司リし事。

一、大工

壹人

一、鍛冶

壹人

ベ四十七人乗。

運賃銀定

乗組

一、上等 壹人

金七兩貳分。

一、中等 壹人

金三兩三步。

但、食料とも。

一、米穀類百石目ニ付

金六十兩。

一、重目之品量拾貫目ニ付

銀貳十五匁。

一、道中往來荷物長持駄荷之類

壹尺立方ニ付

銀九匁五分。

但、右ニあ宿次賃錢之三分一四分一を以勢州迄荷物相届申し。

一、綿大入壹本ニ付

銀四十五匁。



- 一、木綿百廿反壹箇ニ付 銀六十匁
- 一、油四斗入壹樽ニ付 銀三十匁
- 一、酒四斗入壹樽ニ付 銀二十匁
- 一、紙六匁入壹箱ニ付 銀拾五匁
- 一、生糸九貫目壹箱ニ付 銀二十匁五分
- 一、藥 大櫃 銀貳拾貳匁五分
- 小櫃 銀十五匁
- 大壺 三十七匁五分
- 小壺 銀貳拾貳匁五分

右之外、輕目嵩荷物多、追々賃銀相立可申事。

右之通積入荷物十分有之、乘組人數貳百人以上ニ以得、運賃收納高之内、石炭油類其外諸色代諸道具類損料見込、船中給金同食料、乗込之客食料賄、波戸場まで解下賃差引申以、壹艘一度分金五百兩位利益可有之、是を一ケ月八度合金四千兩程ニ益分御坐以得共、東京勢州陸上取扱所諸雜費、且馬車ニ義、年分若干損分見込罷在、間、夫等清算仕、全壹艘分利益壹ケ月金

貳千五百兩位ニ可有之奉存以。夫も最初ハ荷物出方少ク、全多分ニ乗組申間敷間、凡半年位ハ損分ニ可相成、其後漸益分ニ趣可申奉存以。船中細鎖ニ規則ニ船長ニ委任仕、間、自分定兼申以。馬車ニ義ハ、彼地に罷越以、上、相定可申以。則概略書取奉申上以。以上。

午〇明治 五月十二日

東京府 御役所

地方三番組 三河島村百姓 七郎 兵衛 印

三河島村七郎兵衛義、當地ハ勢州四日市港蒸氣飛脚船運送之渡世いたし、度段別紙ニ通願出、間、廻漕會社おゐて差支無之、ハ、兼、規則之通御申渡可有之旨御申越之趣承知致し。右、同社おゐても、當時目論見中、殊ニ運賃之義、當分之内郵船規則ニ振、相定以、義御聞濟ニ廉も有之、旁區ニ相成以、お不都合ニ付、社中ニ加入、上運送爲致以、ハ、可然、お存、間、同人義當司に罷出、以、様御達有之度、此段御答旁申置以、也。

庚午六月十二日

東京府御中

通 商 司

三河島村百姓七郎兵衛、勢州四日市に蒸氣飛脚船運送渡世之義ニ付、及御



問合し所、廻漕會社ニおゐても當時目論見中、殊ニ運送之義當分之内郵船規則ニ振も相定し義、御届濟之廉も有之、旁區々相成しる者不都合ニ付、社中ニ加入之上運送爲致しハ、可然ニ付、當人義御司ニ差出し様御答之趣致、承知し、依之當人にも右之趣相達御司ニ差廻申し間、可然様御取計有之度、此段申入し也。

庚午六月十三日

東京府  
常務局

通商司御中

三河島村百姓七郎兵衛勢州四日市港に蒸氣飛脚船運送渡世之義、兼る御掛合有之、御答およびし趣も有之し處、當人當司に御廻ニ付則取調し處、廻漕會社に加入いたし度段申出し間、則聞届申し。此段御答旁申進し也。

庚午七月八日

通商司

東京府御中

庚午七月十二日小印濟  
三河島村百姓七郎兵衛義飛脚船渡世之義御聞濟ニ付、靈岸島新船松町拜借地内に出店家業相開度段願出しニ付、年寄を以相糺し處、差支無之旨申出し付る者外ニ故障も有之間敷ニ付、願之趣御聞届相成し方ニ可有之哉、

此段相伺申し。 庚午七月

東京三河島村百姓七郎兵衛義勢州四日市港に荷物取扱所取建等之義ニ付御縣に願出度別紙之通申出し間、當人並願書共御廻し申し條、可然様御取計有之度、此段申入し也。

庚午八月二日

東京府

渡會縣御中

乍恐以書付奉願上候

一、東京地方三番組三河島村百姓七郎兵衛奉申上し。私儀當今蒸氣飛脚船運送積入仕度存、勢州江州懇意之ものに相談仕し處、勢州四日市港之義迄至る宜敷諸荷物等も澤山有之し間、東京より右港に往來仕し得之隨分渡世可相成旨承、依之新船松町受負地に會社取建、彼地出帆仕、賣買荷物ハ勿論道中駄荷物等積入、運送仕度、依る旅行之人々届次第爲乗組、渡世仕度旨東京御府に奉願上し處、御調之上通商司に御差出ニ相成、猶御調之上廻漕會社に御問合之上、加入仕右渡世向願之通被仰付難有仕合奉存し。就るハ勢州四日市港に諸荷物取扱所取建渡世仕度しニ付、前書之通勢州渡會縣



御役所に御添翰被下置様偏ニ奉願上以上。

明治三十年八月二日

願人 三番組三河島村百姓 七郎兵衛印  
差添人 村年寄 勘左衛門印

東京府御役所

乍恐以書付奉申上以上

一、地方三番組三河島村百姓七郎兵衛奉申上以上。私儀當今東京ヨリ勢州四日市港まで蒸氣飛脚船渡世仕度、東京ヨリ新船松町に會社取建之義奉願上以上。御宥免相成就る勢州四日市港に諸荷物取扱所取建度、渡會縣御役所に御添翰頂戴之上、同所御役所に私代新兵衛を以願出以上。夫々御調之上、故障等無之義ニ付、四日市之内取扱所取建之義、八月廿七日願之通被仰付以上。付、勢州尾州濃州江州四ヶ國海岸附荷積問屋共に先觸出置以上。問屋共に可相廻、則渡會縣に差上置以上。願書に御附札御割印ニ御渡相成、廻り留より飛脚を以、右願濟御附札御割印書面ニ西京合仕之より手前方に可差返旨之示談ニ仕、代新兵衛儀ハ、今般歸國仕以上。付、先般御添翰頂戴願之趣御聞濟相成難有仕合奉存以上。依之末御届奉申上以上。以上。

午九月十五日

三河島村百姓 七郎兵衛印  
村年寄 勘左衛門印

東京府御役所

渡會縣役所附札 當所廻船問屋共並五十集問屋等々、其方ヨリ直ニ懇談可致以上事。

庚午八月廿七日

府治類纂

七月元○明治三年(紀) 元二五三〇年。太政官令シテ、港灣ヲ調査セシム。○府治類纂

港灣調査  
港灣調査事蹟

港灣調査 府治類纂ニ據ル。

庚午(○明治三年)七月

府藩縣管轄内廻船出入之港、別紙雛形之通、巨細取調、來ル九月中可差出以上事。

庚午七月

太政官

別紙

某港但、府縣共廳ヨリ幾里。

一方 向 一、廣 狹 一、深 淺

一、臺 場 一、燈 明 臺

右之通。

帝都時代ノ港灣



民部省

諸港取調之儀、別紙之通、府藩縣に御達相成ひ、ニ付、諸港ニ於テ、  
一、民家之數。

一、積荷取扱問屋之有無。

一、荷物、但、産物類、何品多ク積出候哉。

一、運上所等、取締之有無。

右四ヶ條於、其省委詳取調、外務省へ可申達し事。

庚午七月

民部省御中

太政官  
東京府

去月中、府藩縣管轄内廻船出入之港取調之儀、被仰出、處當府下之儀、廻船出入ハ有之、以得共、全諸港同様ふモ難申、若港ト見据、以歟、雛形中、民家之數云々、即闔都之戸數ニ相當リ可申、乍去諸港同様之心得を以、雛形通り取調指出可申哉、可然御示有之度、此段及御問合、也。庚午八月三日

(奉)  
庚午九月

民部省御中

東京府

先般被仰出、府藩縣管轄内廻船出入之港取調方之儀、當府下之儀、全ク諸港同様ふモ難申、以間、調方之儀、過日御問合申入、處、民家之戸數を除之外、雛形通取調可申旨御達ニ付、則別紙之通取調書差出、以間、可然御取計有之度、也。庚午九月

品川港

但、府廳ヨリ一里十一町餘、  
同所ヨリ開市場迄十二町餘。

一、方向 辰巳。

一、廣狹 品海臺場ヨリ佃島ヲ限リ差渡凡一里二十一町餘。佃島ヨリ武州葛

飾郡八郎右衛門新田脇矢竹濤迄凡一里一町餘。

一、深淺 海面遠淺ノ場所ニ付、一體ノ深淺測カタシ。本濤筋品海臺場ヨリ佃

島迄之間、深サ三尺ヨリ五尺迄、中濤筋前同斷佃島迄、深サ一尺五寸

ヨリ三尺迄。右尺ハ、大汐ノ節、干潮ノ水尺ヲ以テ記ス。但、大汐之節、干

満差五尺餘。尤出水ノ時ハ、變更アリ。

一、臺場 品海臺場七ヶ所。

佃島前同一ヶ所。



一、燈明臺 品川二番臺場上一ヶ所。

佃島徒場前一ヶ所。

右之通。

庚午九月

東京府

東京府下積荷問屋其外調書

一、積荷取扱以者

廻船問屋。本八丁堀二町目茂七地借  
廣島屋平右衛門  
外五拾三人

奧川船積宿。小舟町壹町目喜平次地借  
木屋外三十五人  
衛兵

横濱神奈川運送宿。本船町富藏地借  
大村屋外十五人  
傳次郎

一、荷物

○生絲 ○種紙 ○蠟 ○材木類 ○茶

○鯨ヒレ ○昆布 ○干鮑 ○海鼠 ○壘表

○瀬戸物 ○烟草 ○醬油 干鰯 南京米

鰯粕 砂糖 南京大豆 同水油

右○印有之分ハ、東京ヨリ横濱に多ク積出申し。印無之分ハ、東京に著荷之

上、諸國に相廻以分。

右之外廻船之諸荷物多しといへとも、荒物其外日用品ニ至ひる迄、逸々品名  
舉テ難算。因テ貿易ニ不關品悉略之。

運上所規則

一、局中朝第十字出勤夕四字退散ス。

一、節句朔望日曜日ヲ以休暇トス。

一、御國旗朝第八字ニ昇、夕四字ニ降ス。

一、運上所門朝第九字開扉、夕四字ニ閉扉。

聽訟掛

彼我人民之間ニ起ル爭議ハ、親疎之別ナク、其理非曲直ヲ聽斷シ、互ニ符合セ

サルハ、是ヲ其國コシユルニ告、双方立合之上、是ヲ推問シテ、其情ヲ明カニ

スヘシ。若其狀鞫問スヘキモノト著意スレハ、是ヲ東京府斷獄掛に達スヘシ。

但、總テ局中衆議ニ不決儀ハ、假令瑣細之事件ト雖モ、大小參事之決ヲ採ル

ヘシ。未同斷。

諸色掛



彼我往答スル處ノ文案ヲ勘署シ、諸記載スル書類ヲ編集シ、或ハ諸官省諸開港場等ヨリ傳達スル公用、彼我之應接、且毎日之事務ヲ專任ス。

居留地掛

外國人居留地規則ニ基、全地ヲ區分シ、彼我人民ノ貸與ヘ、地租家稅ヲ收メ、是ヲ出納掛ニ達シ、或ハ雜貸ヲ企、新ニ地所借受ルモノハ、檢査シテ地券ヲ取調、總テ道路營繕ニ關係スル處ノ一切之事務ヲ要ス。

出納掛

運上所別手組各屯所諸入用、並別手組遠國行人馬之用途、彼我人民地租家稅ヲ算計スルヲ要シ、東京府出納局ニ就テ、運上所出納ヲ掌ル。

翻譯掛

外國人應接、彼我應答書翰ヲ反譯シ、事理審密辨解シテ、以互ノ情狀徹底スルヲ旨趣トス。

輸出入品改掛

東京ヨリ神奈川ニ輸送スル物品ハ、外國人差出書付ト物品照應、監督之上、檢印ヲ調シ、同縣ニ之免狀相添、同縣ヨリ東京ヘ輸入スル物品ハ、運上所前波戶

場著之上、送り狀並改印ヲ檢シ、陸揚令免許、總テ貿易品取締ヲ緊要トス。

尋問掛

品川港ニ出入スル彼我軍艦、其外外國形之船ハ、其來意ヲ尋問シ、或ハ免許ヲ得入港スル外國商船ハ、不開港場規則ニ基商賣取締向專務トシ、碇泊中、運上所定番一名船中爲取締乗船シ、尋問所詰吏員モ又是ヲ監督ス。

別手組

東京居留各國公使并開市場居留各國コンシユル商人等ニ至迄、出行之節ハ、是ヲ護送ス。就中各國公使在館之節ハ、出入ニ不拘、常ニ館内ニ護衛ス。

〔附記〕 京濱往復船汽罐破裂

明治三庚午年七月六日

布告

東京橫濱往復シテ、イオフト船、昨五日出帆之砌、蒸氣釜破裂、乗組彼我人民生死、左之通。

乗組人數 百四十八人程

内、百八人怪我。十三人即死。廿七人生死不相分。



右之通、不取敢爲心得、張出し置もの也。

庚午<sup>○明治三年</sup>七月六日

運上所

庚午七月六日

東京横濱往復亞國川蒸氣、昨五日破裂致シ、彼我人民死傷も凡百五十人程之内即死之者有之、以處宿所等も不相分<sub>ハ</sub>間心當り有之者、以刻運上所<sub>ハ</sub>可申出、且在方體之者も有之、右<sub>ニ</sub>旅宿等も可有之間、其宿之者引取とし<sub>テ</sub>罷出<sub>ハ</sub>様可致事。

一、右之節、怪我人并死人等所持之品ハ、凡ひろひ上ケ置<sub>ハ</sub>間品書ヲ以運上<sub>所</sub>に早々可訴出事。

七月六日

運上所

右之通り、市中其外<sub>ニ</sub>至急可相達事。

府治類纂

八月十三日

○明治三年(紀元二五三〇年)

相模國城ヶ島

浦郡

ニ燈臺ヲ建設ス。

○法令類纂

城ヶ島燈臺建設  
城ヶ島燈臺建設事蹟

城ヶ島燈臺建設 法令類纂ニ

相州城ヶ島ニ於テ、廻船目當ノ爲メ、是迄篝火相用來<sub>ハ</sub>處、今般西洋形燈明臺建築、當八月十三日ヨリ點火、尤火光白色ニ<sub>ハ</sub>條、府藩縣ニ於テ、此旨相心得、管

内船持ノ者へ、可相達事。

庚午<sup>○明治三年</sup>十二月九日

航海家へ示ス布告

一、相州ノ内三崎側城ヶ島ニ於テ、是迄篝火ヲ設置タリシ處、本月第八日ヨリ之ヲ廢シ、燈火ヲ以テ代ラシメタリ。

一、火勢ハ白色ニ現ル。煉化石ヲ以テ築建タル臺上ニ設ケリ。高潮ノ時三十一

「メートル」五十サンチメートル我十七間八分七厘五毛ノ上ニ出ル。其光線ヲ導<sub>リ</sub>、海上九

「ミルマラン」我九千五百五十七間半

一、「デ」ヲブトリツク「返照」ノ燈火ニテ、器械第四番形ナリ。其光輝ハ、針盤測ニテ、

即北十八度西ヨリ、南十八度東迄ノ半圓向ヲ照射ス。

日本政府ノ命ニ依テ、

横須賀造船所首長  
エル・ウエルニ

一千八百七十年第九月十五日

〔參考〕太政類典ニ

民部省上申辨官宛

別紙、神奈川縣申上候相州城ヶ島燈明臺落成ノ處、右ハ佛人ウエルニ<sub>ハ</sub>築造ニ付、以來製鐵所管轄ニ致シ度、左モ無之<sub>ハ</sub>、此後關係不相成事ニ致度ノ

帝都時代ノ灣港



趣、勘辨致候處製鐵所ニテ取扱候テハ、一體職掌モ違ヒ、自然規則モ區々ニ相成、不都合可有之、元來燈明臺掛被立置候上ハ、右掛ニテ一手ニ取扱候方、諸事一纏ニ相成可然、燈明臺掛へ相尋候處引受差支無之趣ニ付、伺ノ趣ハ、燈明臺掛へ引渡候様被仰渡度、依之神奈川縣燈明臺掛へモ御達案相添、此段申進候也。三年十一月廿三日工部

御達案

相州城ケ島燈明臺ノ儀ハ、燈明臺掛へ引渡可申、此段相達候事。

燈明臺掛

相州城ケ島燈明臺製鐵所ニテ築建落成ニ付、其掛ニテ引受、諸事無差支様可取計、此段相達候事。

神奈川縣掛合民部大藏兩省宛

相州城ケ島籌屋ノ儀、追々民部省へ申遣候通、篝火ハ相廢、横須賀製鐵所首長ウエルニ、申付燈明臺ニ換築造落成致シ、右入費ノ外、油代番人給料燈點手當燈明臺修復諸道具手入等凡金貳百三兩、年々入費相掛候旨、同人申立候ニ付、右ノ内番人給料燈點手當ハ、當縣浦賀出張所ニテ渡方取計候

段相達候處、ウエルニ、築造致候上ハ、佛人指揮不致テハ、器械掃除方其外油吟味諸事注意方不都合有之候ニ付、横須賀ニテ指揮并品川燈明臺同様諸入費一手ニ渡方相成度、左モ無之候ハ、全關係不致事ニ致度旨、同人申出、屢引會候へ共、同様申立候ニ付、右城ケ島燈明臺ノ儀ハ、民部省へ及御引渡、觀音崎品川臺場等ト同様横須賀製鐵所管轄ニイタシ度、尤入費出納方ハ是迄浦賀出張所ニテ諸回船ヨリ取立候石錢ノ内ニテ渡方取計來候處、右石錢取立候分ハ、月限當縣出張ノ大藏省へ引渡、出方相成候分ハ、同省ヨリ製鐵所ニテ請取候様御處置有之度、此段及御掛合候也。三年閏十月七日

工部省申立辨官宛

相州城ケ島燈明臺ノ儀ハ、當省規則相立候迄ハ、品川燈明臺同様横須賀製鐵所ニ於テ取扱有之度候也。三年十二月二日

申出ノ通。

〔附記〕 城ケ島燈臺改色

第貳拾三號

相模國城ケ島燈明ノ儀、左ニ第六號ノ通改正以條、此旨布達以事。

帝都時代ノ港灣

附記  
城ケ島燈  
臺改色



明治八年九月廿三日(同月廿四日日本府)

工部卿 伊藤博文

明治八年即西曆千八百七十五年第六號

城ヶ島燈臺

一、此燈明ハ、從來白色ノ處、明治八年十一月十五日即西曆千八百七十五年十一月十五日夜ヨリ、綠色ニ變換シテ、海面三百零九度ヲ照輝シ、一方ハ南五十五度東、又一方ハ北七十四度東ノ方位ニ於テ蔽蔭ス。但シ光達距離及ヒ其他ノ景況ハ、從前ノ如シ。

明治八年九月廿三日

燈臺頭 佐藤 與三

西曆千八百七十五年九月廿三日

築造方 アイール・ヘンリー・プラントン

法令類纂

九月四日明治三年紀元二五三〇年

神奈川砲臺突出ノ洲ニ浮標ヲ設置ス。法令類纂

神奈川砲臺  
前洲浮標設置  
前洲浮標設置  
置事蹟

神奈川砲臺前洲浮標設置 法令類纂ニ、

航客へ布告

一、浮標ハ横濱港ノ北方ニシテ神奈川砲臺ヨリ突出セル洲ニ浮置ス。  
一、浮標ハ赤色ニ塗リ、頂ヲ球形ニ作ル。水面ヨリ高サ一丈。

一、浮標北方へ一「ゲイブル」ノ間、一「ケイブル」ハ、海上里法ニテ一分度ノ十分深サ八「フット」ニシテ、浮標ノ位置ハ、大于潮海ノ深サ四間ノ所ニアリ。

一、地本ハ南十八度東、堀割川南口ハ南四度三十分西、神奈川砲臺ハ北五十九度西、燈明船ハ南五十四度東ニ當ル。但シ眞方位ナリ。

洋曆千八百七十年九月二十八日神奈川縣廳、日本政府築造方  
アイール・ヘンリー・プラントン

四年辛未明治〇紀元

正月十一日、相州劍崎浦郡ニ燈明臺ヲ設ク。法令類纂

劍崎燈臺建設

劍崎燈臺建設  
設事蹟

劍崎燈臺建設 法令類纂ニ、

布告

一、此度相州劍崎ニ於テ、石造燈明臺ヲ設ケ、千八百七十一年第三月一日治我年正月十一日ヨリ、毎夜日没ヨリ日出迄、第二等閃光燈明ヲ點ス。其高サ海面ヨリ百十「フット」、礎ヨリ燈籠ノ中心迄二十五「フット」ニシテ、東北二十七度ヨリ西南七十五度迄二百二十八度ノ間、海方ニ向ヒテ十秒毎ニ閃光ヲ發シ、達スル航海家里數十六「マイル」半ヲ隔テ、船ノ甲板上ヨリ見ユ。又東北二十七度ヨリ同四十三度迄ノ間、赤光ヲ挾ミ、「プリマウス」岩ヲ標セシム。

帝都時代ノ港灣



右方位、相違ナシ。

一、此地ハ北緯三十五度八分ニシテ、グリニッチヨリ東徑百三十九度四十分ニ當ル。

右民部省ノ命令ニ依テ、航客ヘ布告スル者ナリ。

千八百七十一年二月三日

横濱辨天燈明臺屬。日本政府器械方  
アイール・ヘンリー・ラントン

〔參考〕 燈臺燈船浮標

明治五年 日本燈臺燈船浮標便覽表抄。摘

燈臺

燈臺通號	設置之地	北緯東經	初點年月	燈臺形質	燈明等級	射光之眞方位	標示之眞方位	自基礎至燈面	自燈面至水光距離	別記
品川	東京灣西側	三十五度三十分	明治三年三月五日	煉化石造第四等不動	第四等不動	北八度南	北八度南	二丈五尺九里	九里	横須賀造船所ニ於テ建築ス
觀音崎	相模國	三十五度三十分	明治二年正月八日	煉化石造第三等不動	第三等不動	北七度南	北七度南	二丈五尺九里	九里	同
劍崎	相模國	三十五度三十分	明治四年正月八日	煉化石造第二等不動	第二等不動	北七度南	北七度南	二丈五尺九里	九里	同

燈船

野島崎	城ヶ島
安房國メラ崎	相模國御崎
三十四度五十分	三十四度五十分
九百三十分	九百三十分
明治二年十二月廿七日	明治三年八月九日
煉化石造第一等不動	煉化石造第四等不動
北七度南	北七度南
三丈六尺十里	三丈六尺十里
横須賀造船所ニ於テ建築ス	同

浮標

船號	位置	近地之眞方位	下碇年月	燈船形質	大退潮海之深	燈光差別	自水面至燈火	光達距離	別記
本牧丸	横濱港ノ東南	本牧ノ鼻ハ南廿九度西	明治二年十一月十八日	赤色木造二橋アリ	十間	不動赤色	三丈六尺十里	十里	
横濱港ノ北方ニシテ	砲臺ヨリ突出セル洲ニ浮置	赤色鐵造ニシテ頂ヲ球形ニ							
横濱港ノ南方ニ於ケル洲ノ北端ニ浮標ス	赤色鐵造ニシテ頂ヲ球形ニ								



東京灣羽根田洲ノ外方極南ニ浮置ス	赤色鐵造ニシテ頂ヲ球形ニ作ル水面ヨリ高一丈	六間	本牧ハ南四十八度西川崎ハ北八度三十分西房州鼻ハ南六十八度東
東京灣羽根田洲ノ外方極北ニ浮置ス	黒色鐵造ニシテ頂ヲ球形ニ作ル水面ヨリ高サ一丈	六間	川崎ハ南八十九度西ノコ川口ハ北六度東房州鼻ハ南五十五度東南方浮標ハ南三十四度三十分西
東京灣富津ノ洲ノ西端ニ浮置ス	赤色鐵造ニシテ頂ヲ球形ニ作ル水面ヨリ高サ一丈五尺	九間	地本ハ南二十六度東「ベルリ」島ハ北六十度半東觀音崎燈明臺ハ北四度西

凡例

- 一、燈明ハ都テ日没ヨリ日出マテ點ス。
  - 一、假燈明ハ一時假用スル者ニメ、他日其眞ノ成ルヲ俟テ改ムベシ。
  - 一、經度ハ、英國「グリニツチ」ヲ零度トスル者ヲ取用ス。
  - 一、里法ハ、英國海程里ヲ取用ス。一里ハ即チ一緯度ノ六十分一ニシテ、我一里ハ、則二里ト一分五厘ニ當ル。
  - 一、眞方位ハ、南北二極ノ正軸ヲ根基トシ準定スル者ニシテ、磁針方位ニアラズ。
  - 一、英語ハ「」印ヲ以テ區別ス。
- 明治五年壬申 西曆千八百七十二年
- 工部大坂兼燈臺頭 佐野常民  
工部省分局横濱燈臺寮  
築造方アル・ヘンリ・プラントン

法令類纂

附記 海軍水路局設置

〔附記〕 海軍水路局設置  
法規分類大全ニ據レハ、明治四年七月兵部省職員令ヲ定メ、海軍職員中ニ、海軍水路局

中佐一人。少佐二人。  
ヲ置キ、五年二月十三日水路局規則ヲ設ケ、二月廿七日海軍省ヲ置クニ及ヒ、十月廿二日水路局ヲ廢シテ水路寮トシ、六年七月五日水路寮分課人員表ヲ定ム。九年八月卅一日海軍省職制章程ヲ設クル、水路寮ヲ廢シテ水路局ヲ置キ、十二月十四日水路局事務取扱順序、水路局各課假章程ヲ定メ、十九年一月廿九日水路局ヲ廢シテ、事務ヲ海軍水路部ニ屬シ、四月廿二日海軍水路部官制ヲ定ム。

八月廿九日 元○明治四年(紀) 元二五三一年。東京府太政官達スル所ノ船稅規則ヲ布令シ、同時ニ川船改所ヲ靈岸島 ○市内。京橋區。ニ移シテ、船改所ト改稱ス。

○法令類纂  
東京通志。

船稅規則布達船改所移轉

區々

中 添 年 寄

帝都時代ノ港灣

六九五

船稅規則布達船改所移轉

船稅規則布達船改所移轉



船税之儀ニ付、別紙之通被仰出、其旨相心得、尤大川端川船改所ニ儀ハ、靈岸島元廻漕會社内ニ移轉、船改所ト改稱、其間、回船其外蒸氣風帆ニ至迄船々所持之者ハ、來月十五日ヨリ右改所於テ改受、其様可致。

但、川船之分ハ從前、通可相心得。

右之趣市在不洩様可觸知者。

東京府

辛未四年八月廿九日

「別紙」  
商船ニ義布告書并規則書共、去庚午四月中相達、其處、今般船税ニ儀、別紙規則書之通相定、其條、右管内共區々之所爲無之様可取扱、其事。

太政官

辛未四年八月

在來日本商船ハ勿論、西洋形商船ニ至ル迄、船税取立方ニ義、商船規則中ニ掲載有之、其處、右ハ管轄所ニ以テ不取纏、其テハ不都合ニ付、各府縣ニ以テ取調、別紙規則ニ從、其鑑札相渡、當辛未年ヨリ年々定則通税金取立可申、其事。

大藏省

辛未四年八月

船税規則

第一則

一、各管轄所ニ於テ、其管下船持共取調、每一艘篤、其見分之上、積石數相改、鑑札相渡、石數噸數ニ應シ、在來日本船ニ百石ニ付金壹兩、蒸氣船ハ百噸ニ付金拾五兩、風帆ハ同斷金拾兩宛、税金年々可取立、其事。

但、新規合船或ハ讓請船鑑札願出、其節も、本文同様、篤、其見分之上、積石相改、鑑札可相渡、其事。

右鑑札ハ、他方航海中常ニ大切ニ所持可爲致、尤盜難火災其外等、以テ失、其分、其仔細明瞭ニ相成、其ハ、最前渡置、其積石石高を照シ、新規鑑札可相渡、其事。

第二則

一、各管内船税金、毎年四月中迄、取立、六月中迄、取調書共相添、當省へ可相納、其事。

但、當辛未之分ハ、十月中迄、取立、十二月中ニ納、方可取計、其事。

第三則

一、各港入津、其船々より所持、其鑑札爲、差出相改可申、若積石數鑑札面、其相違、以テ多、其ハ、其積石之差違、其應シ、日本船ニ百石ニ付金三兩、蒸氣船ニ百噸ニ付金四拾五兩、風帆ハ金三十兩之罰金、其港役所ニ於テ取立、其管内之分ハ



更ニ鑑札相渡差違之石數ニ應シ増税金之其次第明細ニ相認當省ニ相届可申事。

但取立ハ罰金納方之義ニ外税金同様可取扱事。

他管下之船積石相違有之ハハ罰金ニ其改出シハ港ニお以テ取立可申其  
他鑑札書改并増税金取立方之儀ニ其管轄所へ相達其段當省ニ可申立事。

第四則

一各管下之者新規合船或ハ解船破船又ハ船讓渡之分ハ其時々相届可申事。

但四月前解船破船並四月後合船之分ハ其年之税金相納ニ不及事。

第五則

一右ノ掲イ船ニ積石五拾石以上之商船ニ限り可申尤も舢漁船等ニ積五十石以上以下ニハ共例外之事。

但舢漁船之類取扱方各所區々ニ付一定之御規則御詮議可相成ハ條船數等調税則見込可申立ハ尤右税則御確定相成ハ迄ハ從前ニ通取扱可申事。

第六則

一鑑札燒印并押切判ニ雛形ニ通其管轄所ニテ製造以テ右印鑑當省ニ差

出且諸港ニモ相廻シ置可申事。

第七則

一右規則施行ニ付ハ諸入費ニ一ケ年試験之上可申立事。

右之通規則相定ハ事。

辛未〇明治四年八月

大藏省

法令類纂

東京府船舶改所

京橋區新船松町ニアリ面積凡百八拾貳坪三合三勺明治四年辛未九月之ヲ置キ出入船舶ヲ検査ス。東京通志

十一月九日

〇明治四年(紀元二五三一年)

神田橋外

〇市内

ニ通船見張所ヲ設ク。〇太政

神田橋外通船見張所設置

太政類典云フ、

東京府下神田橋外へ通船見張所ヲ設ク。

東京府上申 辨官宛

神田橋御門外此程出來相成ハ關門見張所後ハ川端ノ方へ通船取締ノ爲  
見張所取立申度ハニ付別紙仕様書繪圖面ノ通入札申付ケ候處金拾壹

帝都時代ノ港灣

神田橋外通船見張所設置  
神田橋外通船見張所設置  
神田橋外通船見張所設置



兩貳分安直段落札ニ付、右御入用渡シ方ノ義、大藏省へ御達シ相成リ候様  
イタシ度、此段申上候也。四年四月東京  
申立ノ通受取方大藏省へ可申出事。十一月九日

大藏省意見 辨官宛

神田橋外關門見張所後、川端通船取締リノ爲メ見張所取建ノ儀、仕様圖  
面相添へ、東京府申立書御廻ハシニ付、取調へ候所、落札高金拾壹兩貳分ニ  
テ不相當無之候間、申立ノ通り御指令相成然ルヘク、依ツテ右按添書類及  
返進ハ也。四年五月日欠

十二月十三日

元〇明治四年紀  
二五三一年

水路局府内海岸ヲ測量ス。

〇法令  
類纂

府内海岸測量

法令類纂ニ、

正 副 戸 長

今般海岸測量ノ爲メ、兵部省水路局官員出張、臨機ノ場所へ目標相建ハ條此  
旨相達ハ事。

辛未〇明治四年 十二月十三日

東 京 府

品海測量ノ爲メ、海軍省官員致出張、海岸市街并大川筋其外海岸、最寄橋々於

テ致測量ハ趣ニ付、此旨爲心得相達ハ事。

壬申〇明治五年 八月二十日

東 京 府

〔附記〕 東京海手土手築造

大木文書ニ左ノ如ク有リ。東京横濱間鐵道敷設ノ時ノ者歟。

品川脇八ツ山下堀割東京海手土手築造約定

約定之件

此作事ハ、東京及ヒ品川持南手一マイルと印セシ印杭を始として三マ  
イル七拾六チャインと印セシ印杭迄之間、惣長貳マイル七拾六チャ  
インの間として、此仕様書并繪圖面と印せる如く、八ツ山下ニ堀割拔なし、  
東京海手土堤を築き、石垣下水拔、其外夫ニ付るの諸工業及び各所用ゆ  
る都る物材、道具、人夫、車、其外必用之物材ハ一切引受る約定、尤薩州の砲臺  
前の橋并品川ニ有鐵道の上に掛る橋ハ、此約定の外あり。

土手拔築爲めの土其外ハ、別紙繪圖面ニ紅色を以て印する八ツ山より出  
る積ふきハ、建築方頭取の免許ふくして外の場所々土を運ぶ事を許さば。



建築ニ用る石炭取除事

右場所ニ掘取に取掛居る節ハ、各建築道普請或ハ埋立ニ用べき石炭堀出に事あらハ、建築方頭取より差圖の場所に片寄積置へし。右ハ追々嵩高抜計り、價抜定め、且總々右様之品ハ政府の御用品ニ成、受負人ハ建築方頭取歟又ハ其代り人よりの免許の書面無之候でハ、右土堀取掛り中ニ堀出し候もの抜自儘ニ進退し、又ハ是抜賣捌事抜免さる。

海面埋立之事

別紙繪圖面□萌黄色の所ハ、其圖面中赤線を以て印せる高サ并水平ニ築造にべし。請負人此仕事を爲せよといふ、窪ミ之地面固り以後至り、赤線通り平面に出来る様ニ前以ふ其心得にて埋立へし。猶地面固り候上ニある、窪ミ出来る節ハ其時ニ是抜平面ニ埋立、皆出来之上、全平面にして窪ミふき様仕立べし。

脇堀の事

脇堀ニおゐてハ、追々差圖する通り、中深サ并勾配を以て堀通し、其堀出しとる土、差圖通り其堀の脇ニ積立る歟、又外に荷ひ越しと歟、又寸法通り出来の上ハ、壞き込等ふく萬手入する事あらと、此約定期限中ハ全受負人の自分入用を以て取締ふべし。

出来榮の事

約定通り出来之上ハ、埋立地並石垣等は、別紙繪圖面ニ記し圖通り、三寸法間數たるへし。

土臺を堀固むる事

總て復道下水并海岸の石垣等の土臺を堀固むる仕法ハ、東京海岸ニおゐて平均大凡泥の下二フットにて取當る土炭岩迄堀下くへし。此事ニ就ルハ、政府ニ稔ふ引受候ニハ不相成候間、其邊斟酌して受合へし。且又深サニ寸法等も差圖ニ隨ひ改る事も兼ふ心得へし。繪圖面之石垣築建及び地堀別段増添又ハ夫々差引事は、此仕様書に添たる値段書をもつて、算當築建、其値段を以て此約定高の基と致し候。

土臺の見分を受べき事

築建方頭取歟又代人土臺を見分して免許せし上ならてハ、決る石垣等築立申間敷候。



捨杭之事

此受負の事の内、復道又ハ海面の土臺下ニ捨杭を打込事必用ふる時ハ、受  
負人カ一フット六方ニ付ル何程ホ申立、右ニテ總ル物材抜用意シ、追ッ建  
築方頭取カ下渡段繪圖面ニ隨ヒテ、作事致込ヘシ。是ニ用ゆる捨杭ハ、い  
れも兼テ差圖シタル目方の鐵を杭の先ニ取付、差圖通りの仕法を以テ駈  
込手答ヘ有所迄打込ヘシ。

海面の石垣勾配之事

海手石垣の勾配ハ、薩摩臺場の石垣の内尤上品ニ出來上リタル場所、同處  
ニ致テ勾配を取るヘシ。尤是ニ用ゆる石ハ少ふくも六インチ程、海面より  
海手の方に向ヒタル石垣の勾配ハ、堅一フットニ付ル横一フット半此勾  
配を取るベシ。

ホツテックの勾配之事

ホツテック勾配ハ、堅一フットニ付ル横一フットニ仕上ヘシ。

地固之事

地固拔致込ヘキ地所ある時ハ、燒たる石灰一分ニ洗上タル砂六分抜乾

る儘ニテ能春ませ、石灰ハ前以粉ニ打くごき、其後十分ニ水抜入れハ能西  
洋漆喰ふふる迄ハ水抜入込交ベシ。

石垣築立之事

石垣ハ上品ニして手強キ荒築致シ、合せ目ハ西洋漆喰抜入、石ハ念を入能  
品抜撰ミ、天然の土炭岩ニル築建ヘシ。石壹分側の厚一フットより不少様  
ニして、石垣等ニ出ル石ハ可成丈一様之厚サ之石抜撰むベシ。いづれも鑿  
切いとし、表カ八インチの深サニ附ケ合せ、石ハ高サより長サ少ふきもの  
抜用ゆる間敷、堅石ハ石垣之惣平面の四分一抜なし、長サハ石垣の厚サ丈  
ニいとし、堅石を上下ニ置ヘあらは一番大きくして平ふる石を礎ニ据ヘ  
シ。角石ハ堅石横石とも圖面之通りの寸法を用ヒ、其合せ目を奇麗ニ仕上、  
中抜鑿切いとし、廻リ抜小叩いとし、石ハ一側毎ニ極水平ニシ、只石の堅合  
合せ目も眞直ニすベシ。總ル漆喰を用ヒ、丈夫ニ仕立ヘシ。此組立方ハ、石抜能  
合せ堅固ニ組立ベシ。合せ目ハ石ハ粉抜突込ベシ。石垣の角又ハ出張リ  
せし所又ハ横筋を取り、石欄干ハ笠石、四方男柱の笠石等ハ、細アハ鑿目を  
入込、漆喰をもつて接合込。欄干ニ用ゆる笠石ハ鐵の鋸抜以テベ、すき間に



鉛を鑄込て固むべし。

石合せ目ニ角葺とる事

右之通り仕事終りし後、合せ目ハいつきも一インチ四分の三の深サ迄切り込、其上葺新らしき西洋漆喰葺もつて奇麗ニ仕揚べし。

西洋漆喰モルタル之事

此モルタルハ、新らしき品ニ、能燒とる石灰壹分、洗上とる清き砂三〇、尤石灰ハ前以粉の如く細ニして乾とる儘にて能まき、然ル後水を用て製すべし。且餘り漆喰又ハ遣残りの漆喰ハ、此作事ヲ用ヒ間敷候事。

石垣の背後を固むる事

石垣、葺積上るニ隨ヒ、其裏手六フートの間、一側六インチの厚サにて土又ハねど土を以て打固むべし。

材木之事

若し材木入用の事ある時ハ、用ゆる木の種類内極上の物にて、水氣裂れ目大節よふく、極枯とるもの葺用、出來の後、仕様之通り三寸法ニ違ハさる様致し可申候。

破損修復之事

此普請場ニ道具物材等出火盜賊天災其他の次第ニ寄普請未出來以前、受負人の手葺離れさる内破損所又ハ紛失物等有之節ハ、受負人自分入用を以速ニ修復を遂ケ、建築頭取の意叶よふ相當の處置及ぶべし。

仕事怠惰之事

仕事怠りよりして、普請の害又ハ障りと成事あらハ、都る受負人の引受とるべし。

物材の善惡并惡材取除候事

此作事ニ用ゆる品物ハ、いつきも最上の品葺用、萬一普請中不正之事ある歟、又ハ不宜品葺用ゆる事あらハ、其不正葺改め良材を以て補ふ迄ハ、受負人ニ追ふ渡ほべき代金葺差留へし。

仕事手始之事

普請之繩そり并都る必用ふる水平其外仕事取掛り場所之印杭等ハ、建築方頭取歟又ハ其代人より是葺差圖し、受負人は紛失又ハ間違等無よふ睨ふ引受へし。



仕事差圖之事

此普請掛り之役人ハ、何時ニあるもいつれの場所より最初ニ取掛る様可致旨、受負人ニ差圖ハ、事勝手とるへし。

値段書之事

此約定の書面ニ調印する以前、受負人自分見分の算當額以て、品毎ノ價書を差出はべし。

普請成就之期限の事

此仕様書丈ケ之諸工業ハ、受負人仕事取掛る差圖を受たる日より、四ヶ月の内ニ出来はべし。

約定抜怠ル節可差出過料の事

右期限ニ後るゝ時ハ、一日延引はる毎ニ、政府より罰金ニハあらはして損所償の譯を以て、一日ニ付、高を差引べし。

代金下渡之事

代金下方之儀ハ、出来普請高の七割五分を月々下渡はべし。殘金三分ハ、追る建築方頭取普請向十分ノ成就せし旨抜認とる證書抜差出とる上ニある

相渡し。

普請仕様之事

此工業ハ、いづれも圖面并此後相渡繪圖并仕様書之趣意仕方通り、極手丈夫ニ永世不朽様職方之手際を顯し候よふ念入出来し、建築方頭取の意ニ叶ふよふ出来はべし。若し右之趣意ニ違ふ事あらハ、受負人自分入用抜もつて速に改め且是抜補ふべし。

直段書之事

- 第一、八ツ山カ埋立の場所迄、並之砂利岩等を掘出し方一坪ニ付、
- 第二、海手埋立之内溝海手石垣地堀其他都之入用抜束壹坪ニ付、
- 第三、捨杭水留丸相もの木材或鐵具并人足手間抜込物材等或一フット六方ニ付、

第四、地固一坪ニ付、

第五、荒築石垣一坪ニ付、

第六、表面石壹ニ付、

第七、人足手間壹日ニ付、



第八、石工手間壹日ニ付、

檢賀通船查  
浦廢止

五年壬申○明治○紀元  
二五三二年三月廿八日、相州浦賀港ノ通船查檢ヲ廢ス。

浦賀通船查  
檢廢止事蹟

浦賀通船查檢廢止 法規分類大全ニ、

布告五年○明治三月二  
十八日、第百七號。

相州浦賀港ニ於テ、是迄上下ノ通船改來ハ處、自今廢止ハ事。

大藏省伺五年○明治三月二十四日

浦賀表船改并石錢取立方廢止ノ儀ニ付、別紙ノ通神奈川縣ヨリ伺出ハ處、右船改番所ノ儀ハ、舊幕中東京ヨリ周圍へ出ハ女并周圍ヨリ東京へ入ハ武器類、其他便船人積荷等相改ハ儀ニテ、物品輸出入相改、口錢等取立ハ儀ニ無之處、諸道關門御廢止相成ハ以來、女武器類便船人改方ハ相止ハへ共、諸回船ハ從前ノ通り改來リ、其内蒸汽船ニ限り、改方不致段ハ不公平ニモ有之、元來和船之儀ハ、第一順風相頼ハ儀ニ有之ハ處、全改ヲ請ハカ爲ニ、同處へ立寄ハ様ニテハ、同縣申立ハ通り、人民ノ迷惑不少儀ト相考申ハ。且又

石錢ノ儀ハ、從前暗礁標示ノ爲、篝火入費ニ取立ハ趣ニ付、燈明臺被設ハ上ハ、相廢シ可然筋ニ有之、旁以テ兩様トモ伺ノ通爲取計可申ト奉存ハ。依テ同縣へノ達シ案相添、此段相伺ハ也。

指令五年三月日

神奈川縣ヨリ大藏省へ伺五年三月十日

相州浦賀番所於テ、諸國ノ廻船改方イタシハ儀ハ、舊幕マテ出女入鐵炮ヲ專務ニ相改メ、出女トハ、東京ヨリ國へ出ハ改メ、入鐵砲トハ、國其他便船人積荷相改ハ仕來ニハ處、去ル巳年○明治中、諸道關門被廢ハ節興廢處置方相伺ハ處、追テ於東京規則相立ハ迄、從前ノ通り被建置ハ旨、民部官ヨリ達有之、其後猶又去八月中、船改方并酒稅取立方及五釐歩合取立方等、廉々相伺ハ處、一般稅則御確立可相成ハ條、當分ノ處、從前ノ通り處置致シ可申旨、當御省ヨリ御差圖有之、本文御差圖有之ハ後、酒稅取立方ハ、御布告ノ趣ヲ以テ相廢シ、五厘歩合取立方ハ、猶見込ノ趣取調、去未十二月中伺書差出、當時ハ間、今以從前ノ通り取計來ハ儀ニ有之、一體船改ノ原因ハ



前條ノ通りニテ、追々荷物等相改ム手續ニ相成假令ハ登リ船下リ船トモ風順宜自在ニ上下可致モ、至改ノ爲浦賀表へ入船可致ム故、風様ニ寄リテハ、數日滯船ヲモイタシ、次第ニ成行、諸廻船幾莫ノ難澁ニ相成、且蒸汽船ノ分ハ改方不致儀ニテ、不公平ニ有之、且又諸道關門被廢ム御趣意柄ニ對シムテモ甚不相當ニ付、浦賀船改ノ儀ハ、以來都テ御廢止相成ム様致度奉存イ。本文船改ノ爲、諸廻船一旦浦賀港へ乗寄ムニ付テハ、出入トモ引船差出シ、右雇夫其他浦賀番所届向ニ關係イタシ、問屋共等、多分有之、生活相立居、イ處、右等ノ者共差向生活ノ道相妨ム故、必苦情モ可有之哉ニイ。ハ、右ニハ難換ト奉存イ。

一、同所ニテ積石ニ應シ石錢ト唱へ取立ム起立ハ、相州城ヶ島志州菅島等暗礁夥敷有之、諸廻船及困難ムニ付、右兩所へ籌屋取設、右薪油代トシテ積石百石ニ付錢六百文宛取立來此儀舊幕中ハ、百石ニ付六百文ヅ、取立來イ處、御座イ儀ノ處當時ニ至リムテハ、國々へ燈明臺御取設相成イ際、城ヶ島菅島兩籌屋ニ限リ、薪油代取立ムハ、相當不仕殊ニ今般諸國ノ廻船船稅御布告有之取立ム上ハ、旁不相當ニ付、以後石錢取立方御廢相成可然奉存イ。右ノ通り相成ム上ハ、當時浦賀へ出張罷在イ官員モ、一體ノ處置相附ム上、其土地并歩合銀取立方等ノ取締イタシム者ノミ差置、其餘ハ一同爲引拂ム

様可仕ム間、早々御差圖可被下ム。委細高木權參事同所へ出張ノ砌、逐一取調ム儀ニ有之、此度同人出府爲致ム間、猶親ク御談被成下ム様仕度、此段御伺旁申上ム以上。

大藏省伺 五年三月二十八日

相州浦賀表船改番所廢止ノ儀、今般伺ノ通り御下知相濟ムニ付、神奈川縣へ相達申上ム。依テハ、其段一般御布告相成可然奉存イ。別紙取調相成イ也。大藏省ヨリ神奈川縣へ達 五年三月日關

伺ノ通り、尤浦賀港へ出入ノ船々ハ規則ニ照準シ改方イタシ、海關稅法ノ儀、相當ノ見込相立、猶可伺出事。

七月五日元○明治五年(紀)二五三二年東京居留地ヲ弘擴ス。類○法規分大全

居留地弘擴 法規分類大全ニ據ル。

東京居留地取廣げの書翰 五年(○明治)七月五日  
以手紙啓上ム。然茲東京開市場外國人相對借家可相成場所の内、南小田原町邊、去る二月廿六日火災にて燒失致シム跡、道敷も改革致シ、家屋も無之に付、右燒跡元ホテルの地及其續きなる(ほ)と印せし地四千五十五坪、此度海軍省

帝都時代ノ港灣

居留地弘擴  
事蹟



用地に致し度、就ては相對借家の場所減省に付、右代りとして新富町并八町堀の方へ」と記せし飛朱引地の内一圓、相對借家差許可申し、將右の海軍省用地と可致しと記せし地は、追て外國人居留地に可致旨、兼て規則面にも掲げ有之場所の内には、前書四千五百坪の代りには、外國人居留地に隣れる」と記せる元商社の地を用意し、逐て要用の節は、居留地に可致し。此段御相談旁可得御意、如斯御座し。以上。

明治五年七月五日

外務卿 副島種臣

英、佛、米、布、蘭、瑞典、丁、抹、伊、魯、奧、西、獨、各公使閣下

英國公使返翰 五年七月七日

貴國本月五日附之貴翰致落手し。然る築地外國人居留地之儀ニ付、御相談之爲メ被差越し繪圖面致熟覽し處、右模様替ニ付、我國人民丈ケ、別段異存無し。右回答可得御意、如斯御座し。以上。

七月七日

英國代理公使  
アイジワトサン

副島外務卿閣下

各國公使返翰皆承諾ノ旨趣ナレバ略之。

〔參考〕 法規分類大全ニ、

東京府上申五年(○明治)十一月十七日

東京開市場外國人相對借家場所南小田原町邊、去ル二月二十六日ノ火災ニテ類焼致シ、同所ニ借家罷在候外國人、日數三十日限ヲ以テ一時府下ニ住居差許置候處、築地邊道敷割替建家等モ煉瓦石造ニ建築ノ積ニテ、落成期限目途モ無之候ニ付、新富町并中之橋以北本八丁堀邊、別紙繪圖面飛朱引之通、相對借家取廣ノ儀、各國公使へハ外務省ヨリ申談候積ヲ以テ、同省打合之上、去ル四月二十五日右之段申上置、外務卿ヨリ各國公使へ商議相成候へ共、回答無之向モ有之、遲延相成候處、此程ニ至リ何レモ異存無之旨ニ付、兼テ申上置候通り、不日取廣ケ施行可致積ニ御坐候。依之猶又圖面相添、此段申上候也。圖面ハ略之。

東京府布令 五年十一月十七日  
第七百四十三號

府下開市場外國人相對借家場所築地邊一圓、去ル二月大火ノ節延焼致シ候ニ付、南八丁堀及ヒ新富町一圓并仲ノ橋以北本八丁堀大通リヲ限り、今般外國人相對借家場所ニ取廣ケ相成候ニ付、兼テ相達置候趣相守、家作ノ



ミ貸渡候儀ハ不苦候條、貸渡方等ノ儀ハ、鐵炮洲運上所へ可申出候事。  
右之趣、相對借家ニ相成候町々ハ、懇切ニ申渡、其外區々無洩可觸示モノ也。  
(參考)

各國領事へ書翰 五年二月二十七日

以書狀致啓上候。然ハ東京開市場ニ借家罷在候貴國人、昨二十六日之出火  
ニテ類燒致シ、居所差支候者モ可有之、就テハ東京ニ一時逗留致シ度者ハ、  
馬喰町旅籠屋ニテ外國人止宿爲致不苦旨申渡置候間、同所へ相越可申、且  
家作賃借致シ度者ハ、東京中何レノ地ニテモ日數三十日丈ケハ、都合次第  
家作主ト示談相整候上、運上所へ申立、不都合ノ事モ無之候ハ、承リ届候  
積リニ付、其旨貴國人へも御回達有之度、右ハ東京開市場規則ニモ關係之  
儀ニ付、此段可得御意、如斯御坐候。以上。

壬申<sup>○明治</sup>五年二月二十七日

東京府權參事 三嶋 通庸

各國領事宛

各國領事へ書翰

以書狀致啓上候。然ハ東京開市場居留ノ外國人、我商賈等ノ家作相對借家

可相成場所ノ内南小田原町邊去ル二月二十六日之火災ニテ類燒イタシ  
候跡、道敷モ改革イタシ、家屋無之ニ付、此度右燒跡過半海軍省ノ内へ圍込  
ニ相成候。就テハ外國人相對借家場所モ減少候ニ付、右代リトシテ新富町  
并八丁堀ノ方、別紙圖面飛朱ノ通り、相對借家差許可申候。且右小田原町ノ  
方ハ、追テ外國人居留地ニ可致旨兼テ規則面ニモ掲ケ有之候間、右代リニ  
ハ其期ニ及ヒ、外國人居留地ニ隣居候元商社取拂、其地所居留地ニ可致候。  
右之趣貴國公使へハ、外務卿ヨリ御商議相濟申候付テハ、相對借家取廣候  
場所々々へハ、貸渡方相達置候ニ付、去ル二月中火災ニ罹リ一時府下ニ散  
住致シ候御配下人民モ有之候得ハ、來ル我十一月二十日ヨリ向三十日ノ  
間ニ是迄ノ借家引拂ヒ、開市場へ引移候様御下命有之度、此段可得御意、如  
此御座候。以上。

壬申<sup>○明治</sup>五年十一月十七日

東京府知事 大久保 一翁

瑞西聯邦總領事

シイッレンワルド

丁抹國總領事

イテ、バヒール

米利堅合衆國領事

シイ、ラ、イ、セバルト



佛蘭西國領事

ラスガールゴロ

獨乙國領事

エムマリテンベール

葡萄牙國領事

エドワルトロレイロ

魯西亞國領事

アラロウスキイ

白耳義國領事

イムールロン

兼和蘭國領事

アイボドウイン

伊太利國領事

エフヅリユニ

兼大貌列國領事

兼埃地利國代領事

マールテンドイメン

西班牙國領事

ラスガールヘーレン

各貴下

附記 石川島製造所

海軍省達 五年(明治)十月二十九日

造船局被廢、主船寮管轄、自今石川島製造所ト可相唱事。

海軍省達 五年(明治)十月三十日

石川島ノ内、

艦材圍場 鋸器械場 修船場

右主船寮へ被管ハ條此旨相達ハ事。

海軍省達 五年(明治)十月三十一日

石川島ノ内、

艦材圍場

鋸器械場

修船所

右主船寮管轄トシテ、修船所ト可唱事。

十一月三日

元(明治)五年(紀元)二五三二年

日本國郵便蒸汽船會社ノ設立ヲ許可シ、

是日

元(明治)五年(紀元)二五三二年

達シテ、同社船ニ郵便物運送ヲ命ス。同社ハ

舊通商司廻漕會社及東京爲替會社ヲ基礎トシテ設立シタル者

ニ係ル。

郵便蒸汽船會社郵便物運送 法規分類大全ニ據ル。

達 五年(明治)十一月三日

元(明治)五年(紀元)二五三二年

日本國郵便蒸汽船會社ノ船ニ、別紙ノ旗章ヲ以、御國內各港へ郵便物運送ハ

條此段相達ハ事。

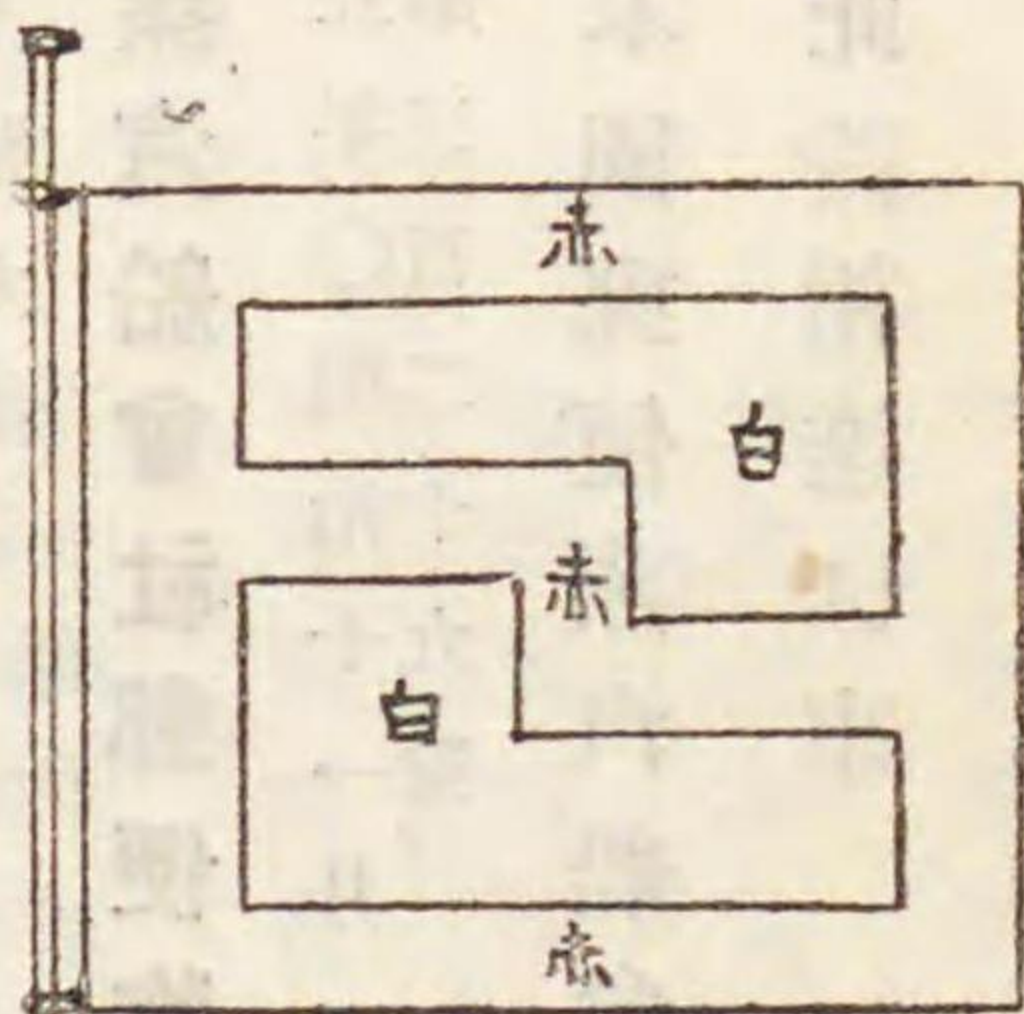
(別紙)

帝都時代ノ港灣

郵便蒸汽船會社郵便物運送

郵便蒸汽船會社郵便物運送





郵便蒸氣船會社旗章

○蓋頭十七年六月第十五號布達ヲ以テ郵便徵章ヲ定メ、本達ヲ廢ス。一郵便蒸氣船會社ハ、舊通商司廻漕會社ト東京爲替會社ノ關係ニ根據シ、大藏省ノ誘導ニテ成立ス。一八年九月二十日閉社。内務省其所有物ヲ購求ス。

大藏省へ達五年十一月三日

日本國郵便蒸氣船會社、伺之通御許可相成シ。付テハ、右會社規則中、司法省ニ關係之廉モ有之ニ付、追テ規則類寫一通、同省へ可被差廻、此段相達置シ也。

大藏省伺五年、○明治八月二十七日

舊縣縣ヨリ引揚シ、船船ノ内、舊廻漕取扱所へ貸渡シ、從前同所ニ屬スル船ト組合セ、寰海各港へ往復ノ一線可相開積ヲ以、同所頭取共へ説諭ヲヨビ、別紙ノ通數部ノ規則書ヲ以、更ニ日本政府郵便蒸氣船會社開業ノ儀願

出、取調シ、處、猶不充分ノ廉不尠シ、へ共、別ニ不都合ノ儀モ無之ニ付、申立ノ通致、准允シ、就テハ、左ノ通一般へ御布告被下度、此段御届旁相伺申シ也。

指令五年十一月三日

伺之通

大藏省伺五年十月十七日

此頃舊回漕取扱所ノ者共更ニ開業ノ會社へ准允致シ候名稱ニ冠スル日本政府之文字ハ、蒸氣船會社ノ種類ヲ示ス形容詞ニモ無之、又日本政府ノ蒸氣船會社ト申儀ニモ無之、全ク郵便船ノ性質ヲ著ス形容詞ニシテ、日本政府郵便ノ蒸氣船會社ト申語句、即チ日本政府ノ郵便ヲ運送スル蒸氣船會社ト云フ意ニ有之、西洋國々ニモ是等ノ例格多分有之候得ハ、決シテ内外ノ人民之ヲ日本政府所有之郵便蒸氣船會社ト誤リ認ルノ恐有之間敷ト存シ候ヘトモ、御達ノ趣モ有之候ニ付、猶替稱ノ儀勘考仕候處、極テ世人ノ誤見無之様、句讀ノ病ヲ相除キ、且其本意ニ相達シ候ニハ、日本政府ノ郵便ヲ運送スルト言ハス、所謂共和政治郵便等ノ例ヲ照シ、日本帝國ノ郵便ヲ運送スルノ儀ヲ以テ政府ノ文字ヲ帝國ニ變シ、日本帝國郵便蒸氣船會



社ト名稱爲致可然哉ト存候。右御差支ノ儀無之候ハ、更ニ准允ノ令ヲ被降、且先般伺ノ通其旨一般へ御布告被下度、此段相伺申候也。

指令五年十一月三日

伺之通。

但、日本國郵便蒸汽船會社ト名稱可爲致事。

左院意見五年十月二十二日

郵便會社ノ儀ハ、組合會社ノ者政府ノ物品及内外人民ノ物品ヲモ運輸イタシ候儀ニテ、政府ハ之ヲ保護スルノミニ候へハ、右規則中ノ名稱其他左ノ通改稱イタシ度候。

郵便會社名稱ノ儀、日本國郵便會社ト改メ、規則中會社主務ノ者ヲ指シテ議長某ト稱シ候ヲ社長某ト改メ、其他日本政府何何トアル政府ノ字及ヒ公印トアル公ノ字ヲ除キ、大藏省ノ命ヲ奉シ云々ノ命ノ字ハ令ト改メ候方、可然存候。其他異存無之候也。

史官ヨリ大藏省へ達五年十一月三日

會社名稱ハ日本國郵便蒸汽船會社ト被相定、會社規則中日本政府例ニト

アル政府ノ字及ヒ公印トアル公ノ字ヲ除キ、大藏省ノ命ヲ奉シ云々トアル命ノ字ヲ令ノ字ニ被相改候ニ付、別冊規則書へ朱書致シ置候。付テハ其通相改候様御達濟ノ上、別冊ハ御差戻シ被下度、此段申入候也。追テ、別冊御差戻被下候ハ、昨日寫御差出シ相成候様申入置候處、御差出シニ不及候。此段爲念申添候也。

(別冊)

日本國郵便蒸汽船乘船并荷物積入規則

一、荷物ハ充分堅固ニ行李造リ可有之、且箇物毎ニ宿所姓名等充分委敷認メタル繪符ヲ附ケ、或ハ其箇物へ認ラルヘシ。若シ荷物作リ粗慥ナルヨリ破損等有之、又名前ノ記シ方委シカラサルヨリ紛失等有之候トモ、會社ヨリ辨償不致事。  
一金銀寶石其他高價ノ品ヲ入レタル荷物ハ、別段精敷其品書ヲ差出サレ、且會社定式ノ增運賃ヲ拂ハルヘシ。若シ其儀無之、高價ノ品ヲ荒荷トシテ差出サレ候節ハ、紛失破損、或ハ濡濕等ノ事有之、會社ヨリ辨金差出候トモ、荒荷ノ割合ヲ以テ可償事。



一、箇物ハ出帆前日中ニ積入候ニ付、其日ニ至リ持參ノ分ハ、總テ相斷申ヘシ。尤乗客ノ手廻荷物并小包物ノ類ハ、出帆三時迄ニ持參ノ分ハ、差支ナク積入可申事。

但、自分ノ費用ヲ以テ舩船相雇本船ヘ直ニ持參ノ分ハ、此限リニ無之事。一、手廻荷物積目録手板等モ無之ニ付、其所持主ニテ紛失損傷無之様御用心可被成、尤危難請負有之分ハ、會社ヨリ別段ノ取扱致スヘキ事。

一、木箱并苳包ノ類ハ、假令乗客ノ手廻リ荷物ニテモ、決シテ船室ヘ積入候儀ハ堅ク相禁候事。

一、格外重量ノ品并長大ノ物ハ、別段ノ示談無之以上ハ、積入不申事。

一、荷物ノ運賃ハ、會社ノ河岸庫ヨリ著港ノ河岸庫迄ノ定メニシテ、陸地運送ノ賃錢ハ、荷主ヨリ差出スヘキ事。

一、火藥并製藥類ノ火ヲ發スヘキモノ、水液酒醬油脂ノ類、船及ヒ他ノ荷物ヲ損害スヘキ危險ノ品ハ、別段ノ手當ナクシテ積入ノ儀ハ、堅禁止致シ候。モシ荷主ヨリ其品柄之報知無之、積入ノ節萬一是カタメニ損害ヲ生シ候ハ、其荷主是ヲ辨償ハ勿論、且相當罰金取立ヘキ事。

一、風波或ハ餘儀ナキ難事ニテ航海ノ時日延淹致シ、是カタメニ荷主ヘ損失出來候トモ、會社ヨリ之レヲ辨償不致事。

右ノ件々、驛遞寮ノ許可ヲ蒙リ相定候間、毎條御承知ノ上、荷物御積入可被下事。

日本國郵便蒸汽船會社頭取

乗船規則

一、乗船ノ御方ハ、其御身分貴賤御用柄ノ輕重ニ拘ハラヌ、乗船切手ノ等級ニ隨テ其位置ニ御就ナサレ、上中下等互ニ混雜セサル様、御銘々御心掛ケ可被成事。

一、此乗船切手ノ賃金ハ、航海中ノ食料、給仕小遣ノ給料、并定量ノ手廻リ荷物運賃、且上中等ノ分ハ、臥室并蒲團フランケットノ損料ヲモ相籠候事。

但、下等ノ方モ別段損料御拂ナシ下サレ候ハ、蒲團等ノ手當可致事。

附、自身食物御持參或ハ御不快等ニテ船中ノ食物御用ヒ無之、且手廻荷物ノ量目輕少ニテモ全ク御持參無之候共、別段其代料ノ減方ハ不致事。

一、手廻荷物ハ、上等一人ニ付目方十貫目、中等ハ七貫五百目、下等ハ五貫目



迄、子供ハ其等ニ隨ヒ手荷物本量ノ半高ニ限リ、其大サハ二尺立方積ニ可限、是ヨリ以上ハ、荷物ノ割合ヲ以テ運賃可請取事。

但、手提革袋ノ類、過重過大ニアラサレハ無賃ノ事。

一、三歳以下ノ乳兒ハ、別段船賃ヲ申受ス。三歳以上十歳迄テノ子供ハ、其等級切手料ノ半高申シ受ケヘキ事。

一、乗船ノ儀、御申入ノ節、上中等ノ分ハ、約定金トシテ其賃ノ半金高御拂可被成、モシ其金御拂ヒ無之時ハ、出帆ニ差掛御斷申スヘク儀モ可有之候。尤モ下等ヘ御替ノ儀ハ、何時ニテモ多人數ニサヘ無之候ハ、更ニ差支無之事。

一、已ニ御拂込相成候乗船切手料、并約定金ハ、自分都合ヲ以乗船差止ラレ候共、差戻シ候儀ハ致サス候。尤右乗船切手并約定金證書ハ、六箇月ノ間當會社ノ船船ヘハ、何レモ流用相成候間、他日御用ヒナサレ候トモ、又他人ヘ御賣渡ナサレ候トモ、御勝手ノ事。

一、乗船切手ハ、船中ニヲイテ會計役ヘ御渡シ可被成、萬一切手紛失イタシ候ハ、改テ會計役ヨリ他ノ切手御買取ナサルヘキ事。

但、紛失ノ切手ハ、番號等ノ印有之候ニ付、充分探索行届候様其世話致スヘキ事。

一、船中ニテ切手買取候時ハ、定價二割増ニ候事。

一、往返切手ハ、定價ヨリ一割減ニテ可差出、尤是ハ六箇月限リノ定ニ付、其後ニ至リ候ハ、全ク用立サルモノト相成候事。

一、出帆刻限三時前迄ニ會社ヨリ乗客ノ爲メニ舢船差出候間、其時刻迄ニ御乗組ナサルヘシ。是ヨリ後レ候分ハ、御銘々費用ヲ以舢船御雇ナサルヘキ事。

一、犬猫ノ類ハ、食物ノ料ヲ除キ、一頭ニ付金一圓宛ノ運賃、遠近ニ拘ラス御拂ヒ可被成、尤航海中ハ料理人ノ守護ニ附シ、決テ船室ノ内ヘ連込候儀ハ不相成候。且航海中病死致シ候トモ會社并船中ノ者ヨリ償等ハ差出サ、ル事。

一、火ノ元ヲ最モ警慎致シ候ニ付、臥所ハ勿論、船室ニオイテ、烟草ヲモ相用候儀ハ堅ク禁止イタシ候事。

一、乗合ノ内何様ノ失禮有之候トモ、御當人ヨリ直ニ咎メ、或ハ口論ニ及ハ



ス、其旨船長へ御談、當然ノ處置可被成、若シ相對ニテ喧嘩爭論ニ及ハレ候節ハ、理非ニ拘ハラヌ双方ヨリ乘船規則ヲ破タル科料ヲ取立可申事。

一、給仕小遣ノ者、使令ニ供セス、或ハ無禮ノ所行有之候ハ、船中會計役へ其旨御談可被成、其外乗込水夫等ニ無禮ノ次第有之候ハ、船長并當番士官へ御談可被成、必ス自身之ヲ咎メ、或ハ打擲コレナキ様可被成事。

一、各港碇泊ノ節、船長ノ免許ナク上陸ハ決シテ不相成、郵便遞送御用ヲ以テ主務ト致シ候ニ付、尤モ出入ノ時刻ヲ嚴ニシ候間、假令船長ノ免許アリテ上陸致サレ候トモ、出帆ノ刻限ニ後レ候時ハ、決シテ待合セ不致事。

但、右ノ場合ニテハ其人ノ船賃損失ト相成ルヘキ事。

一、風波或ハ餘儀ナキ難事ニテ、航海ノ時日延引致シ、是カタメニ何様ノ損失乗船方へ出來候トモ、會社ヨリ之ヲ償ヒ候儀ハ不致事。

右之件々、驛遞寮ノ許可ヲ蒙リ相定候間、毎條御承知ノ上、御乗船可被下事。

日本國郵便蒸汽船會社頭取

右正ニ承認候事。

明治五年八月十日

驛遞頭 前 島 密

日本國郵便蒸汽船會社運賃ノ定并荷物取扱内規則

第一則 別紙各地運賃表ニ記載ノ定メハ、驛遞寮ノ准允ヲ稟テ現今當然ノ者ナリトス。然レトモ他日物價ノ高低傭夫ノ俸給等一般ノ變更有之時ハ、隨テ増減可有之事。

第二則 行客ノ船賃中ニハ、航海中ノ食料并乘船規則ニ記載スル手廻荷物及ヒ手提類ノ運賃ヲモ算入ス。然レトモ航海中自身食料ヲ齎シ、手廻リ荷物ハ定量以下ヲ持參シ、或ハ持參無之トモ、定額ノ船賃ハ減少不致事。

第三則 行客乗込ノ員數、一組十人以上ハ本途運賃ノ五分、二十五人以上ハ七分五厘、五十人以上ハ一割、七十五人以上ハ一割五分、百人以上ハ二割、二百人以上ハ三割ノ引方可致事。

第四則 碇泊中ノ入費ハ、一日一噸ニ付十二錢半ト相定、政府其外何レヘ雇船相成候トモ、前以テ荷物等積卸シ日限ノ外、先方ノ都合ヲ以滯船致サセ候節ハ、右割合ヲ以入費金請取ヘク旨ヲ可約定事。

第五則 各地世話人へハ、十人以下ニテモ行客一人ニ付金一步宛、荷物ノ運賃ハ多少ニ限ラス其運賃ノ五分宛、世話料トシテ會社ヨリ拂フヘキ事。



第六則 政府ノ士官并兵隊ノ運送ハ、驛遞寮御條約ノ通引方致シ、一艘御借切ノ節ハ、其時ニ臨ミ別段ノ御條約致スヘキ事。

第七則 航海中風波等ノタメニ先方著港之期日延引致シ、其故ヲ以テ行客其他ノ損失ヲ生シ候トモ、會社ヨリ是ヲ辨償セス。又船中何等ノ危難有之候トモ、危難請合無之者ハ、一切會社ヨリ償ヒ不致事。

第八則 荷物ハ都テ荷造リ方嚴重ニシテ封印有之、且個中ノ品書及ヒ宿所姓名有之者ニ限ルヘシ。若シ粗漏ノ荷物造リ或ハ宿所姓名ナキ品ニ候ハ、何様ノ荷物タリトモ會社ヘ受取ヘカラス。萬一之ヲ受取候節ハ、損破或ハ紛失等有之トモ、決シテ辨償イタサ、ル事。

第九則 高價ノ品物運送賃ハ、荒荷運賃三割増ノ定ニ付、若シ荒物ノ内ヘ高價ノ品ヲ封入シテ其品書ヲ附ケス、且荒荷ノ運賃ノミ拂ヒ有之時ハ、假令濡レ損シ有之候トモ、荒荷ノ割合ヲ以テ辨金可致事。

第十則 荷物ノ運賃ハ、積出地會社ノ河岸庫ヨリ積入地ノ河岸庫迄ノ定ニ付、都テ其場所ニ於テ荷主ト請取渡致スヘキ事。

第十一則 會社ノ荷物庫ヨリ解下船ヘ積出ノ節、荷物毎ニ番號ヲ記シ、解

下船ヨリ本船ヘ積渡ノ節ヨリ、又本船ヨリ解下船ヘ積渡シ、解下ヨリ荷庫ヘ相渡候節迄、都テ其番號ヲ以帳合致ス可キ事。

第十二則 諸荷物ヲ會社ヘ請取候節ハ、其封印ヲ改メ、荷造リノ精麁ヲ検査シ、送狀ノ品書ニ照シ、會社ノ本帳并請取書及寫トモ、夫々式ノ如ク可取扱事。

第十三則 藏所ヨリ本船ヘ積入候節ハ、藏出シ人足解下船賃、本船ヘ積込人足賃トモ、解下方ノ者ヘ運賃金高百分ノ六ヲ以テ受負致サセ候事。

第十四則 著港ノ節、本船ヨリ解下船賃并積移シ人足荷物配リ所迄ノ陸上ケ人足賃トモ、是亦解下方ノ者ヘ運賃金高百分ノ六ヲ以テ受負致サセ候事。

第十五則 荷物口譯ケ捌方等ニ至迄、其運賃金高百分ノ三ヲ以テ、其取扱人ヘ受負致サセ候事。

第十六則 米糖雜穀料ハ、運賃高百分ノ一ヲ以テ、取扱ノ者ヘ請負致サセヘキ事。

第十七則 荷物配リ并届方ノ節、會社ノ藏所ヨリ届先迄ノ車力賃ハ、其届



先ヨリ請取ルヘシ。尤遠近ニテ賃錢割方左ノ通、  
藏所ヨリ十町以内、荷物日方七貫目以下ヲ一人持ト相定、賃錢百五十文。同所ヨリ二十町以内、賃錢三百文。

右ノ割合ヲ以テ、十町毎ニ百五拾文宛相増候事。

但、坂路ノ分、本文三割増ノ事。

第十八則 本船入津ノ節ハ、荷捌方ノ者荷物送り狀手板ヲ會社ニテ受取、本船へ出張致シ、其送り狀ニ記載スル總員數ヲ引合、舂下船へ積移シ、終リテ後上陸致シ、荷捌所ニ於テ送り狀ノ通り届方相濟セ、先方ノ受取書殘ラス會社へ相納申ヘキ事。

但雨天暴風ノ外ハ、五日限りニ取扱濟セヘキ事。

第十九則 届先運賃ハ、荷捌方ノ者ヨリ引受ケ受取方致スヘシ。尤引受候上ハ、先方ノ遲速ニ拘ハラス、入港十日ノ間ニ會社へ皆納致スヘキ事。

第二十則 荷捌方請負致シ候者ハ、倉庫所持致シ、身元慥ナル者ニ限ルヘシ。且會社申合規則ニ隨、相當ノ證據金差出サセ、萬一荷捌方ニ付不都合ノ儀有之候節ハ、罰金或ハ辨金致サセヘキ事。

第二十一則 舂下船請負モ、舂下船七艘以上所有致シ候身元慥成者へ請負ハセ、且前條ノ通證據金差出サセヘキ事。

第二十二則 爲替金ヲ貸渡候荷物ハ、會社へ預リ置、爲替金請取候上ニテ、其荷物ヲ渡シ、或ハ届方致スヘキ事。

第二十三則 荷物濡レ損シ并紛失ノ取締受負ハ、運賃金高百分ノ六ヲ以テ、船中乗組ノ者ト荷捌方ノ者ト組合ノ上、受負セ候事。

但、荷捌所ヨリ其積所へ一人出張致シ、荷物品書封印番號等相調、出先ノ送り狀ト引合、破損等ノ無有檢査シ、損シ荷物ハ藏所へ相戻シテ之ヲ積入申ヘカラサル事。

船中ニ於テモ、同斷著船ノ砌番號并封印品書等相改舂下船ヲ以テ荷捌所へ陸上ケ致シ候事。

舂下船中ニ於テ濡レ損シ、或ハ紛失等有之候節ハ、舂下船請負ノ者ヨリ辨金致スヘキ事。

右ノ條件、會議ヲ以テ決定致シ、且驛遞寮ノ公認ヲ相受候條、此事ニ關係候者、屹度違犯アルヘカラサル事。



明治五年八月

頭取

高崎長右衛門

一等副頭取

山路勘助

二等副頭取

岩橋萬造

右正ニ承認候事。

明治五年八月十日

驛遞頭

前島

密

日本國郵便蒸汽船會社職務章程

庶務部

一、頭取

會社諸般ノ事務ヲ總判シ、及ヒ船長其他諸役員等會社ニ使役スル一切ノ者ヲ進退黜陟シ、且其任ヲ分テ課スルコトヲ掌ル。凡ソ成規アルノコトハ、總テ專執施行シテ後之ヲ社中ニ報知セシム。會社ノ業社中ノ事ニ付、大伴アリテ會議ヲ要スルトキハ、常ニ議員ヲ集合スルヲ得ヘシ。

會社ノ事業ニ付テ公法ヲ犯ス者アラハ、官ニ對シテ其責ニ任シ、且會社ノ事業ノ舉不舉ハ專ラ其責ニ當ルヘシ。

一、副頭取

職務頭取ニ亞ク。頭取不在ノ節及ヒ分社へ出張ノ時ハ、職務全ク頭取ニ同シトス。

一、會社監督役

頭取以下諸役員ノ所務ヲ監察シ、殊ニ會計ノ當否出納ノ正否ヲ監督ス。正副頭取ニ非違アルトキハ、其事ヲ詳ニシテ之ヲ社中ニ明告シ、是カ罰黜ヲ會議セシメ、其他ノ役員ニ非違アルトキハ、之ヲ正副頭取ニ告ケ、之ヲ社中ニ報シテ黜罰ヲナサシム。

各地ノ分社ニ出張シテ、事務ノ精否會計簿冊ノ正不正ヲ檢閱ス。

一、各船監察使

船長以下ノ勤怠、運用機關者ノ優劣ヲ察シ、船體機關諸器械ノ完全スルヤ否ヲ案シ、航海并碇泊中ノ運用動作ヲ檢ス。

船客接待ノ模様、荷物積卸ノ順序ヲ監督ス。

船長ノ罪アルハ、之ヲ糺彈シテ、頭取ニ明告シテ其罰黜ヲ爲サシメ、其以下ノ罪アルハ、之ヲ船長ニ督シテ其處分ヲナサシム。



船體及ヒ機關鑛子ノ腐朽且他ノ器械ノ缺乏アラハ、直チニ之ヲ頭取ニ報知シテ之ヲ修繕補償セシム。

一、重立書記役

會社一切ノ文書記録及往復ノ事ヲ掌ル。

會社ノ名印ヲ保持シテ、凡テ此名印ヲ以テ證スルノ文書ハ、皆此檢閲ヲ經ヘシトス。故ニ正副頭取ト雖モ、此共同ヲ得ルニアラサレハ肆ニ名印ヲ用ユヘカラス。

會社ニ屬スル簿書及ヒ往復文書ノ類、都テ後證ニ備フヘキモノハ、年月部類ヲ分テ之ヲ藏スヘシ。

正副頭取不在ノ時、金銀出納ヲ除クノ外尋常ノ小事ハ、之ヲ代理スヘシ。出納ノ事ト雖モ代理ノ權ヲ得ルモノハ、唯此任ニ限ルヘシ。

一、二等書記役

職掌重立書記役ニ亞ク、重立書記不在ノトキハ職掌全ク同シトス。

一、重立出納役

金銀出納ヲ掌ル。金銀ヲ出スハ必其入用ノ正否計算ノ當否ヲ正算シ、且頭

取ノ證印ヲ取テノ後ニアラサレハ之ヲ許サス。又正副頭取ト雖モ、此任ノ證印ヲ得サレハ決シテ之レヲ出スヘカラス。

金銀ヲ納ムル時モ、其計算ノ當否ヲ正シ、之ヲ本帳ニ記シテ頭取ノ證印ヲ得ヘシ。正副頭取ト雖、此任ノ正算ヲ經、且證印ナケレハ之ヲ納ムヘカラス。其日ノ會計ハ其日ニ卒ヘ、其月ノ會計ハ翌月五日ヲ限リテ整算スヘシ。

毎三月ニ各地ノ分社出張所及ヒ他ノ合併ノ會社ト會計ヲ精算シ、四箇月目ノ晦日限リ、會計簿冊ヲ淨書シテ頭取ノ證印ヲ得、之ヲ社中ニ明告シ、且世上ヘモ公報スヘシ。

諸會計簿冊ハ、常ニ政府正任ノ士官及社中ノ檢閲ニ供スヘキタメ、其體裁ヲ齊一ニシ、其記載ヲ整肅ナラシムヘシ。

會計ニ屬スル諸簿冊及書附類ノ後證トナスヘキ者ハ、重立書記ニ附シテ之ヲ藏セシムヘシ。

一、二等出納役

職掌重立出納役ニ亞ク、重立出納役不在ノトキハ職掌是ニ同シトス。

三等四等書記役

三等四等出納役



公務掛

往復掛

修繕掛

石炭油掛

藏所掛

荷物集方

荷物捌方

筆者

小買物方

船務部

一、船長

全船諸般ノ事務ヲ總括シ、乗組總員ノ進退黜陟ヲ司ル。

發船ノ期日ヲ命シ、且各船ノ要務ヲ整頓セシム。

航海ノ針路ヲ令シ、且ツ著港之時投錨ノ地位ヲ定ム。

航海日記ヲ詳記シテ、運用諸般ノ事皆其蹤路ヲアキラカニス。

船中掃除、全數ノ器械ヲ検査シテ、腐朽破廢ノ患、ナカラシム。

乗組ノ者ニ不正アラハ、其責ニ當リ之ヲ辨償ス。

船中ノ事務舉ラサルトキハ、獨リ其責ニ任スヘシ。

一、二等運用方

船長ニ次テ船中ノ事務ヲ總判シ、且船長ヲ助テ航海ノ針路投錨ノ地位ヲ定ム。

荷物積卸ノ順序ヲ命ス。

次役ヲ督シテ各其分課ヲ司ラシム。船長不在ノ時ハ、全ク其職掌ヲ攝行ス。

一、二等運用方

一等士官ノ指令ヲ請ケ、其分課ノ職ヲ司ル。甲板上ノ當番ヲ勤メ、水夫小頭

ニ令シテ諸帆ノ運轉ヲ司ル。

一、三等運用方

職掌二等運用方ニ同シ。

一、準三等荷物取締方

荷物積卸ノ検査ヲナシ、積入口ノ締リヲ附ケ、其鍵ヲ一等士官ヘ渡シ、運用

中其取締ヲ爲ス。

一、水夫小頭

運用方ノ令ヲ請テ水夫ヘ指圖ヲナシ、且水夫ノ取締ヲ司ル。

一、一等器械方



機關一切ノ事ヲ總裁ス。

機器運轉ノ要領ヲ監ス。

運用中并碇泊中トモ、器械ノ掃除ヲ検査シテ腐朽ノ患ナカラシム。

石炭及油脂等ノ要品缺乏ノ事ナカラシム。

次官ヲ督シテ當番ヲ勤シム。

一、二等器械方

一等器械方ノ命ヲ受ケテ當番ヲ勤メ、火夫小頭へ命シテ火度ヲ適宜ニシ、

且油脂ノ澆方怠ルコトナカラシム。

一、三等器械方

職務二等器械方ニ同シ。

一、火夫小頭

器械方ノ命ヲ受ケ、火夫へ指圖ヲナシ、且火夫ノ取締ヲ司ル。

一、會計役

船中會計ノ諸務ヲ司ル。

郵便行囊請取渡シ、且防護ノ事ヲ司トル。賄方小頭ヲ督シテ其職ヲ奉セシ

ム。旅客乗船切手ヲ集テ會社へ差出ス。積荷目錄ニ照シテ手板帳ヲ製作ス。

乗込人員ニ應シテ薪水食料ヲ適宜ニシ缺乏ノ患ナカラシム。

一、賄方小頭

會計役ノ令ヲ受ケ、給仕人料理人其外小遣等ニ差圖ヲナシ、且取締方ヲ司ル。

右ノ件々、職員相定候事。

明治五年八月

議長 永田 甚七

頭取 高崎 長右衛門

一等副頭取 山路 勘助

二等副頭取 岩橋 萬造

右正ニ承認候事。

明治五年八月十日

驛遞頭 前島 密

日本國郵便蒸汽船會社ノ資本取扱條令

第壹條

一、金



是ハ現今別冊船號帳ニ記載スル大藏省ヨリ御貸下船々代金。

但、追々御渡相成候ニ隨ヒ、船號并代金ヲ記シ、結局ニ至テ後總金高ヲ茲ニ記載スヘントス。

一、金

是ハ右同帳ニ記載スル爲替會社ヨリ貸渡船々代金并同船修繕料合高。

一、金

是ハ爲替會社ヨリ差出候當會社ノ公舖土藏其外器械類等別冊ニ記載スル代金ノ合高。

一、金

是ハ別冊株金出高帳ニ記載スル株主ヨリ差出候株金高。

右ハ合計 圓ハ、明治五壬申年 月 日郵便蒸汽船會社ノ名號ヲ定

メ開業候時ノ資本ニシテ、之ヲ辨濟スル方法、左ノ如シ。

第二條 大藏省ヨリ御貸下船代金ハ、無利息ニテ一個年据置、十五年賦ノ

定ニシテ、當壬申年ハ返納金無之、來癸酉ヨリ毎年

圓宛返納致シ、乙

亥ニ至リ皆返納ノ積リ。尤會社ニ損失有之、其年々賦金返納致シカタキト

キハ、延期一年ツ、兩度迄ハ御差許、三度ニ及候トキハ、別段ノ御詮議ノ次第ニ由リテ、更ニ辨納可致事。

第三條 前ニ掲ル船號帳ニ記載ノ船々ニ難破有之候節ハ、其難破ノ船代金ヲ大藏省ト爲替會社ノ總金額ニ割合、大藏省ノ分ハ同省へ可返納金額中ヨリ之ヲ減シ候餘リヲ以テ、約條ノ年限ニ割合、更ニ年賦ノ高ヲ定メテ返納可致事。

但、再三破船ノ難有之時モ皆此例ヲ以取扱可申事。

第四條 右難破船代金大藏省へ屬スル部分ハ、不定年賦ノ法ニシテ、當會社會計法第二殘高資本總額ノ一割以上ニ及フトキハ、其利益ノ百分ノ二、一割以下五分以上ノ利益ナレハ其益金ノ百分一ヲ上納シテ、其代金ヲ辨償スヘシ。若シ其利益資本ノ五分ニ滿サル時ハ、其年ノ返納無之事。

第五條 萬一難破船ノ多キヲ以テ當會社頽敗ノ時ハ、其難破船ノ代金大藏省ニ屬スル部分ハ、全同省ノ損亡ト相成候事。

第六條 爲替會社ヨリ貸渡船代金ハ、返濟ノ期限ヲ定メス、別紙當會社會計法ニ記シ候第二殘高ヲ同會社へ分配シ、合計此船代金ノ總額ニ滿ルヲ



返濟金ノ極度トシ、夫レ迄ハ世上普通ノ利息ヲ拂ヘキノ約束ヲナセリ。故ニ現今ハ年一割ノ利息ヲ拂ヒ、又他日ニ至リ普通ノ金利低下セハ隨テ之ヲ低下スヘシ。尤萬一右第二殘高ノ分配合計船代金ノ總額ニ滿タサル以前、難破船ノ故ヲ以テ當會社頽滅候時ハ、爲替會社ニ屬スル其難破船ノ代金ハ全損亡ト相成ヘキ事。

第七條 爲替會社ヨリ差出候會社ノ公鋪并土藏其外諸器類ノ代金ハ、尋常ノ株金ト認メ、即チ同會社ハ當會社何株ノ持主トシテ之ヲ他ノ株金ト同一ニ取扱ヘキ事。

第八條 都テ株金ハ當會社諸般ノ運用ニ供スルヲ以テ、是ヨリ生スル利益ハ別紙會計法ニ照シテ、其出金高ニ割合之ヲ受取ルヘシ。勿論別段利息無之、若シ又損失有之時ハ、各出金ノ高ニ割合、俱ニ其損失ヲ受ヘシトス。故ニ他年解社ノトキ幾何ノ積金又幾艘ノ船幾多ノ器械有之トモ、之ニ關スル借財之ナキ以上ハ、皆此株主ノ所有ニシテ、其株金ノ出高ニ應シ、平等ノ分配致ヘキ者トス。然レトモ若シ難事損失有之會社廢頽ニ及フトキハ、株金并積金ヲ以テ製造或ハ買入タル一切ノ器物ヲ賣却シテ、諸借財主ヘ分

散スヘキ事。

但、自是入社ノ株主出金高モ皆同般ノ事。

右ハ、本月本日社中會同協議ヲ以テ相決シ、驛遞寮并爲替會社ノ承認ヲ得候條、現今別社ノ者ハ言ニ及ハス、將來入社ノ株主モ皆能ク此旨確守可致事。

明治五年八月

頭取 高崎長右衛門  
一等副頭取 山路勘助  
二等副頭取 岩橋萬吉

右之件々、正ニ承知候也。

右正ニ承認候事。

明治五年八月十日

驛遞頭 前島密

日本國郵便蒸汽船會社條約書

條約書

下ニ記名スル驛遞頭ハ、大藏省ノ令ヲ奉シ、會社ノ頭取副頭取ハ社中一同ノ總代トシテ、本月本日左ノ條件ヲ決議シ、約定候事。



第一條 御貸下船號帳ト題スル一部ノ簿冊ヲ製シ置、既ニ御下渡ノ船々并將來御渡シ可相成船々并ニ是ニ相屬シ候御下ケ金ヲモ悉皆相記シ、大尾ニ至リテ其合計ヲ御貸下金額ト相定メ可申事。

第二條 此度ノ御貸下蒸汽船并會社ニ於テ從前運用致來候蒸汽船共、都テ此條約期限中ハ、運用并碇泊中共、何ノ地ヲ不論日本國郵便蒸汽船ト相稱可申事。

第三條 御貸下船々中、風帆船并各港ニ相用候藏船ハ、右同斷郵便蒸汽船附屬風帆船或ハ藏船ト相稱可申事。

第四條 右御貸下船々ノ儀ハ、其筋ニ明ナル御國人并西洋人トモ公詮ヲ以テ、每船附屬品ニ至ル迄、正價相定可申事。

第五條 右船號帳ニ記載スル總金額ハ、無利足ニテ一箇年据置、十五箇年賦ニ返納相定來癸酉年ヨリ乙亥年迄年々金　　ツ、無相違返納可致、尤右船々ノ内難破有之節ハ、返納年賦ノ高ハ、會社ノ資本取扱條令第三條ノ通處分ノ上、改正可相成候事。

第六條 右年賦期限中、不慮ノ損失有之、其年ノ金額返納難致節ハ、會社ノ簿冊驛遞寮ノ檢閱其他ノ檢査ヲ經テ、事實相違無之上ハ、其損失ノ模様ニ應シ、或ハ何分或ハ皆高其年ノ返納有免相成、年賦ノ期限一箇年差延可申事。

第七條 不慮ノ損失再度ニ及ヒ候節モ、同斷相違無之上ハ、再度ノ延期可相成、然三度ニ及候節ハ、別段ノ詮議可相成事。

第八條 年賦ノ期限差延有之候中、餘計ノ利益有之節ハ、先年ノ不納相償ヒ、正當ノ期限ニ可復事。

第九條 損失有之御貸下年賦金其年全ク返納難致節ハ、爲替會社出金ノ利息モ、拂方不相成、尤分合ノ不納有之節ハ、其分合ニ隨ヒ、右出金ノ利息可相拂事。

第十條 不慮ノ損失打續キ、會社潰轉分散等ノ節ハ、會社會計法第十二條第十三條并資本取扱條令第五條ノ通處分可相成、若シ又會社ノ事故有之解散ニ及候節ハ、會計法第十一條ノ通取扱可致事。

第十一條 別冊船號帳ニ相記シ候船々ノ中、難破有之候節ハ、會社資本取扱條令第三條第四條ノ通り可取扱事。



但、難破ノ蹤跡不正ニシテ、會社ノ條理明カナラサル時ハ、別段ノ詮議可有之事。

第十二條 會社ノ諸會計帳ハ、驛遞寮ヨリ臨時ニ檢閲可致、其他往復文書等會社ノ事務ニ關スル書類ハ、毫モ隱秘スル事無之、同寮ノ閱見ニ可供事。

第十三條 都テ會社ノ蒸汽船繫泊ノ地ニ於テ、出船期日相定次第、其地ニ在ル郵便役所或ハ郵便取扱所ヘ其定日及ヒ刻限トモ相知可申事。

第十四條 風波ノ時ヲ除クノ外、定日ノ刻限ヨリ格別ノ事故無之以上ハ、出帆ノ遲滯半日ヲ過ヘカラス。若シ事故有之、延日致候節ハ、其段前以テ其地郵便役所或ハ郵便取扱所ヘ可相届、若シ等閑ニシ置郵便發遞ノ時限ヲ誤ルトキハ、相當ノ罰金可有之事。

第十五條 各地其出帆刻限迄ニ、其地ノ郵便役所或ハ郵便取扱所ヨリ郵便囊ヲ其會社或ハ會社出張所ヘ差出可申間、請取證書相渡シ、屹度其船ヘ積入可申事。

第十六條 各地ヘ著船ノ節ハ、先第一ニ積入有之郵便囊ヲ其地ノ郵便役所或ハ郵便取扱所ヘ相届、請取證書可申受、若シ是ヲ陸揚ケ不致以前旅客

或ハ何ノ荷物ヲ陸揚ケ致シ、或ハ是ヲ不届以前、他ノ品物ヲ何レヘナリ共相届候節ハ、破約毎ニ金五百圓ノ科料可有之事。

第十七條 郵便囊取扱方ハ、船中會計役ノ事務トス。故ニ濡レ損シ、或ハ盜難等有之節ハ、其者ノ越度ニシテ、其時ノ次第ニヨリテ相當ノ科料可有之、且會社ヨリモ如斯粗漏ノ者ヲ使用シタルニ因テ、此不束ヲ生シ科料ヲ可拂事。

第十八條 郵便囊幾個有之候トモ、同シク目方百貫目迄ハ無賃ニテ、運漕可致、是ヨリ以上ノ目方ハ、會社定式ノ賃錢可相拂事。

第十九條 何レノ地ニ於テモ郵便切手無之書狀并新聞紙ハ、一切取扱不相成旨、船中乗組之者ヘ不洩様可申渡、若シ私ニ賃錢ヲ受取、窃ニ取扱候者ハ、一通毎ニ金二十五圓ツ、ノ科料可有之事。

但シ、送狀或ハ添狀ノ類ハ、限外ノ事。

第二十條 臨時御用物ノ運漕有之節ハ、何レノ地ニテモ繫泊相成候海ニ候ハ、何時ニテモ會社船々ノ内線合セ元ヨリ會社ノ都合ヲ不論御用相勤可申、尤荷物ノ多寡ニ不關、其船一艘借切ノ運賃至當ニ御下ゲ相成事。



第二十一條 平常非常ニ拘ラス、兵隊并兵什ノ運送、有之節モ、同様御用可相勤、尤非常運兵ノ節ハ、砲丸不達ノ土地ニ可限事。

第二十二條 萬一非常運兵ノ節、砲丸等ニテ破船候カ、或ハ掠奪ニ罹リ候カノ節ハ、御貸下船ノ内タリトモ、別段ノ譯ヲ以テ相當ノ船代金御下渡相成、尋常難破船ノ例ニ從フヘカラス。且其船乗組ノ者ヘハ、手負夫々ニ相當ノ御手當可有之事。

第二十三條 平常ノ時、兵隊運送ノ船賃ハ、二十五人以上ハ定額ノ一割引、五十人以上ハ定額ノ二割引、七十五人以上ハ二割半、百人以上三割、二百人以上ハ四割引、兵器兵什ノ運送ハ、總テ定額ノ通り運賃可拂事。

第二十四條 此條約ハ、當壬申年ヨリ二十箇年ヲ以テ期限トス。尤其尾年ニ至リ猶此條約ヲ續候時ハ、更ニ書面ヲ可造事。

第二十五條 條約期限中改正スヘキ條件有之節ハ、双方ノ商議ヲ盡シ、一致ノ上ニ可決事。

第二十六條 此條約書同文言ヲ以テ本書二通外ニ寫一枚、都合三枚ニ作リ、驛遞寮ノ官印并會社ノ印及驛遞頭會社頭取ノ手書實印ヲ以テ之ヲ證

シ、且前書ノ件々正ニ承知ノ趣、爲替會社ノ頭取トモ手書實印ヲ以テ之ヲ證シ、一通ハ驛遞寮、他ノ一通ハ郵便蒸汽船會社ヘ藏シ、寫ハ爲替會社ヘ相渡候條、相違無之候事。

明治五年八月

驛遞頭 前 島 密  
頭取 高橋長右衛門  
一等副頭取 高井房太郎名代 山路 勘 助  
二等副頭取 岩橋 萬 造

前書御條約會社ヘ相關候件々正ニ承知仕候段、私共手書實印ヲ以テ證シ候條、相違無御坐候事。

爲替會社  
總頭取 三井次郎左衛門名代 永田 勘 七  
小野善助名代 行岡莊兵衛  
島田八郎左衛門名代 藤田東四郎  
田中次郎左衛門名代 前川由兵衛  
小津清左衛門名代 大市 彦 藏



日本國郵便蒸汽船會社定款

廣ク海運ノ便ヲ起シ、速ニ郵便ノ用ヲ達シ、交際ノ誼通商ノ利ヲ厚フセンヲ謀リ、茲ニ會同ノ者、大藏省ノ准允ヲ以テ會社創立ノ事ヲ決シ、左ノ條件ヲ議定セリ。

第一條 當會社ハ日本國郵便蒸汽船會社ト名號シ、郵便運漕ノ事ヲ本務トシ、兼テ行客及ヒ物貨ノ運漕ヲ以テ本業ト致シ候事。

第二條 當會社ニ屬スル諸船ハ、皆其用ニ隨テ日本國郵便蒸汽船會社ノ蒸汽船或ハ郵便附屬船ト號シ、何國何地ニ碇泊スルトモ、又航海運用タリ共都テ之ヲ稱號スヘキ事。

第三條 當會社ハ驛遞寮ノ管轄ニシテ、社中ノ規則取扱ノ方法會計ノ簿冊等、常ニ同寮ノ監護檢閲ヲ受ヘシト雖モ、社中ノ者ノ身分ハ、地方官ノ所轄ニシ、其身家ニ起ル一切ノ事且會社ニ生スル紛議ト雖モ、其裁判ハ管轄地方廳ニ願フヘキ事。

第四條 郵便運送ノ事ハ、全ク驛遞寮ノ指圖ニ隨ヒ、且各港發著ノ時、其港

ニ在ル郵便所或ハ郵便取扱所ノ郵便囊ヲ受ケ取り渡ノ順序ヲ最モ嚴正ス可キ事。

第五條 政府ノ御用物并兵隊ノ運漕ハ、平常非常ニ拘ハラズ、奉令次第、會社ノ都合ヲ計ラス相勤ヘシト雖モ、別ニ一船ヲ發出スルカ、或ハ定日有之郵便船ノ日割ヲ變スルカ、或ハ其定日ノ船ヲ他日ニ轉シ之ヲ勤ムルニ於テハ驛遞寮ノ官印有之指令書ヲ得ルニアラサレハ、何等至急至要ノ御用ト雖モ之ヲ奉スヘカラサル事。

第六條 行客并積荷ノ運賃ヲ定メ、或ハ之ヲ變更スルハ、必驛遞寮ノ検査ヲ得テ後之ヲ極ムヘキ事。

第七條 日本國郵便蒸汽船會社ト刻スル一箇ノ社印ヲ製シ、公ノ申牒或ハ契約書其他ノ文書ニ至迄、會社ノ名ヲ以テ證スル書類ハ、一切之ヲ用ユヘシ。但シ大坂其他ノ分社ニ於テモ、各其社印ヲ製シテ元社同様ニ致スヘキ事。

第八條 當會社ノ株主中ヨリ入札法ヲ以テ頭取副頭取各一名ヲ撰舉シ、三年ヲ以テ勤仕ノ期ト成スヘシ。尤社中ノ望ニ因リテハ、幾期ヲ重テ勤ム



ルモ妨無之事。

但、副頭取ハ會社ノ都合ヲ以テ二名若クハ三四名ヲ命スヘシ。然ル時ハ第一等第二等第三等ト區別シ、以テ其階級ヲ立ツヘキ事。

第九條 別ニ社中ノ公選ヲ以テ議長一名ヲ薦舉シ、一年ヲ以テ當職ノ期トナスヘシト雖モ、社中ノ公選最多ク其人ニ屬スルトキハ、幾期モ重ネテ其職ニ當テヘキ事。

第十條 凡テ社中ノ衆議ヲ決スル時ハ、社中三分ノ二以上ノ同記ニ從フヘシ。若シ議論兩岐ニ分レ、其異同數モ亦等分ナルトキハ、議長ノ同意スル方ヲ採テ之ヲ決定スヘキ事。

第十一條 會議ノ節、其論說異同ノ數ヲ定ムルハ、株主ノ人員ニ管セス其株金ノ員數ヲ以テスヘシ。故ニ五百圓ノ一株ヲ所持スル者ヨリ、五千金ヲ出シテ十株ヲ所持スル者九倍ノ權利有之事。

第十二條 社中ノ會議ハ春秋兩度ト定メ某月某日某地ニ於テ其席ヲ開ク旨ヲ報知スヘシ。尤大事ヲ決スルトキハ、臨時ノ會議ヲ開クヘキ事。

第十三條 會議ノ節、自身出席シ難キ者ハ、委任書ヲ以テ同社ノ者ニ名代

ヲ託スヘシ、自ラ出席セス又名代ヲ命セサル者ハ、決議ノ後其事ヲ可否論辨スヘカラス。又自身出席シ或ハ名代ヲ命スル共、決議ノ後ニ至リ再度異論ヲ起スヘカラサル事。

第十四條 議長ハ會社ノ役人ヲ攝スルヲ得ス。會社ノ役人ハ議長ヲ兼スヘカラス。尤評議有之時議員ニ列スル事ハ妨無之事。

第十五條 成規有之會社ノ常務ハ、頭取之ヲ專斷執行スヘキモ、小事ト雖モ新ニ規則ヲ定メ、事業ヲ起シ、且其成規ヲ改正變更スルハ、社中ノ合議ニ於テ決スヘキ事。

第十六條 會社ノ都合事務ノ模様ヲ計リ、手代其他ノ役々ヲ撰舉シ、且其事務ヲ分課スルハ、頭取專執ノ權ニ可有之事。

第十七條 社中ノ者、此定款ニ背キ、或ハ議定スル會社ノ諸規則ニ違ハサル事有之時ハ、議長ト頭取合議ノ上、其罪科ヲ社中ニ明告シテ、速ニ會社ヲ脱セシメ、且其科ニヨリ相當ノ贖金ヲ命スヘキ事。

第十八條 若シ會社ノ役人此定款ニ悖リ、或ハ會社ノ諸規則ニ違ヒ、或ハ當然ノ事務ヲ怠リ、或ハ私欲ノ所業有之時ハ、社中ノ衆議ニ從テ之ヲ糾正



シ、之ヲ譴責シ、或ハ之ニ贖金ヲ命シ、其者當職年期中タリトモ速ニ之ヲ免シ、且速ニ其代人ヲ撰ヘキ事。

第十九條 社中一切ノ者、隱ニ定款其他諸規則ニ背キ、奸偽ノ所行有之ヲ偵知スルトキハ、速ニ其由ヲ會社ヘ明告シ、決シテ之ヲ看過シ、或ハコレヲ覆フヘカラサル事。

第二十條 總テ社中ノ者、其株金ヲ私ニ讓リ渡スハ勿論、假令一時ノ融通ヲ以テ質入書入引當物等ニ致スト雖モ、必ス正副頭取ノ公認ヲ得ルニアラサレハ肆ニ之ヲ成スヘカラス。若シ之ヲ犯ス時ハ相當ノ贖金ヲ命スヘキ事。

第二十一條 萬一規則ヲ犯シ、株證文ヲ二重或ハ三重ニ質入書入引當等ニ差出シ、他日此議ニ付紛争ヲ生スルトモ、會社ニ於テハ決シテ之ヲ關知セス、元ヨリ之ヲ辨償スヘカラサル事。

第二十二條 萬一頭取社中ト紛争ヲ生スルトキハ、双方ヨリ社外ノ者二名以上ヲ撰ミテ取扱人トシ、其衆說ニ就テ之ヲ判定セシムヘシ。若シ其取扱人之ヲ了解シ能ハサルトキハ、其次第ヲ詳記シテ官裁ヲ仰キ、此定款ト

議定ノ規則ニ就テ公正ノ裁決ヲ可受事。

第二十三條 此定款ハ、社中ノ集議ニ依テ何時ニテモ改正スルヲ得ヘシ。尤其改正ノ條款ハ、必驛遞寮ノ公認ヲ受ヘキ事。

明治五年八月

議長 永田 甚七  
頭取 高崎 長右衛門  
副頭取 山路 勘助  
二等副頭取 岩橋 萬造

右郵便蒸汽船會社定款ハ二通ニ認メ、其一通ハ御檢印ノ上之ヲ會社ニ藏シ、此一通ヲ奉呈シテ他日ノ保證ニ供シ候也。  
右正ニ承認候事。

明治五年八月十日

驛遞頭 前島

密

日本國郵便蒸汽船會社申合常則

第一則 當會社ノ株金ハ、五百圓ヲ以テ一箇トス。故社中七百五十圓ヲ出ス者ハ、一株半ノ持主、千圓ヲ出ス者ハ二株ノ持主ニシテ、乃チ五千圓ヲ出ス者ハ十株ノ主ト稱スヘキ故ヘ、五百圓以下ヲ出ス者ハ當會社ノ株主タ



ルヲ得ス。又五百圓以上ヲ出ス者モ、平素ノ行狀社中ニ列スヘカラサル者ハ之ヲ拒ミ、株主ト爲スヘカラス。若シ一旦株主ト成タリトモ之ヲ脱社セシムヘキ事。

但シ、別ニ罪ナク、唯平素ノ行狀社中ニ列スヘキ者ニアラサルヲ以テ脱社セシムル時ハ、其株金ハ返スヘシ。然レトモ其年其株金ニ生スル利益ハ一切分與セサル事。

第二則 船舶或ハ船具器械類其他倉庫及ヒ都テ會社必用ノ物品ヲ以テ、入社ヲ請フ者有之トキハ、社中合議ノ上、何等ノ物品ト雖モ其公價ヲ定メ、コレヲ社中へ買入レ、其價ヲ以テ何箇ノ株主トナスヘキ事。

第三則 都テ株主ノ出金高ハ、會社ノ本帳ニ相記シ、是ニ割判シタル株證文ヲ其出金主ヘ渡スヘシ。一旦本帳へ記載シテ株證文ヲ請取ル上ハ、假令何等ノ事有トモ、春秋兩度會議ノ節其事由詳細申出テ、社中ノ協同ヲ得サルニ於テハ、脱社并其本金ヲ請取リ戻スヲ得ヘカラサル事。

第四則 株主自分ノ都合ニ寄リ、其株證文ヲ何等ノ價ヲ以テ他ニ賣渡シ、或ハ讓リ渡トモ勝手タルヘシ。然レトモ其節ハ、其旨會社へ届出、其證文ヲ

書替ヘキハ勿論、何等ノ價ニテ買受タリトモ其原證文ノ金高ヲ以テ書替ヘシ。且買受讓受人共書替タル株證文ヲ受取ル上ハ、正シキ會社ノ株主トナルヘシト雖モ、其買主或ハ讓受主ノ人品ニ依リテハ之ヲ拒ムヘキノ權利ヲ會社有スヘキ事。

第五則 株主ノ内ニ家財分散ニ及フコトアルトキハ、其株證文ヲ公買スヘシ。若シ買請人ノナキトキハ、社中會議シ、其公價ヲ立テ、之ヲ驛遞察及社外ノ人三名以上ニ質シテ確定シ、會社第一ノ積金ヲ以テ是ヲ贖ヘシ。然レトモ第一ノ積金是ヲ贖ヘキノ數ニ充タサルトキハ、其公價ヲ以テ一人或ハ數人ニテ之ヲ買受ケ、或ハ總社中ニテ各箇其株金高ニ應シ出金シテ之ヲ買取ヘキ事。

第六則 當會社ノ議長頭取副頭取ト成ヘキ者ハ、少クトモ當會社五株以上ノ持主ニシテ、其他樞要ノ任ニ當ル者ハ、必一株以上ノ所持人ニ限ルヘシ。尤其者無株タリトモ、實直ニシテ當會社二株以上ノ持主ヨリ確實ノ引受之アルニ於テハ、之ヲ命スル場合モ有之ヘキ事。

第七則 正副頭取ハ、勤役中證據金トシテ三千圓、其他ノ要地ニ任スル者



ハ、其任スル所ノ大小ニ隨ヒ、金二百圓以上千五百圓迄ノ正金、或ハ政府ノ公債證券ヲ會社ヘ差出シ、正副頭取ノ分ハ其本人ト會社ノ兩名ヲ以テ認メタル證書ニ、驛遞寮ノ檢印ヲ受、其他ノ分ハ其本人ト會社トノ兩名ニテ認メタル證書ヘ頭取ノ檢印ヲ以、確實ナル銀行ヘ預ケ置、何レトモ其三方ノ證印無之迄ハ、決シテ渡ヘカラサル旨約定致ヘシ。尤其證據金ニ生スル利息ハ差出人ノ所有タルヘキ事。

第八則 正副頭取ニ奸僞私欲ノ所爲之アルトキハ、社中合議ノ上、驛遞寮ヘ伺ノ上、其證據金ヲ取揚、且相當ノ贖金ヲ命スヘシ。其他ノ者ヲ處置スルトキハ、社中ト頭取ト合議ノ上、其證據金ヲ取揚、且相當ノ償ヲ命スヘキ事。

第九則 何等ノ損失有之會社ノ不都合相生シ候共、其事由明瞭ニシテ、頭取并樞要ノ地ニ任スル諸役員ノ不束ヨリ生スルニ非レハ、其證據金ハ取揚ヘカラサル事。

第十則 新ニ公舖造營シ、或ハ倉庫等ヲ建築シ、或ハ一時ニ多量ノ石炭ヲ買入、或ハ石炭坑ノ約條ナスハ、臨時社中ノ集議ヲ以テ之ヲ決シ、且新ニ船ヲ買入、或ハ製造シ、或ハ蒸汽罐入換等ノ節ハ、假令第一第二ノ積金ヲ以テ

之ニ支給シ得ル共、必ス社中ノ合議ニ決スヘキ事。

第十一則 船長其他ノ士官會計書記等、會社并船々ニ使用スル一切ノ者ハ、内外人ニ拘ラス皆頭取ヨリ其進退黜陟ヲナスヘシ。尤頭取缺員ノ時、或ハ分社ヘ出張ノ節ハ、副頭取ニテ之ヲ命スヘキ事。

第十二則 船長并一等運方一等機械方ハ、其筋ニ於テ吟味ヲ受、免許狀ヲ所持スル者ニ限ルヘシ。又新ニ船ヲ買入、或ハ之ヲ製造スル時ハ、必海軍士官并造船寮且熟練ノ西洋人ニ検査ヲ得テ、後會社ノ使用ニ供スヘキ事。

第十三則 其筋ノ者ヲ出シテ、各地ノ分社出張所等事務ノ勤怠會計ノ精否ヲ檢シ、且諸船ノ掃除修繕ノ模様器械ノ完否ヲ監視セシムヘキ事。

第十四則 諸帳面ノ製方并書載ノ法ハ、都テ頭取ノ考案ニ隨ヒ、其式ヲ一ニシ、殊ニ金銀ノ出納并請取渡及諸入費ノ計算ハ、最モ嚴肅ノ制ヲ設ケ、且後證ト成ヘキ諸簿冊并請取書其他會社ノ往復文書ニ至ル迄、皆年月部類ヲ分テ之ヲ會社ニ藏スヘキ事。

第十五則 會計帳ハ最モ書載ヲ明瞭ニシ、常ニ驛遞寮其他政府適任ノ士官并社中ノモノ且社中ニ關係スルモノ、檢閱シ易キ様ニ致スヘシ。又訊



問ノ事アラハ明了之ヲ説明スヘキ事。

第十六則 會社事務ノ模様會計ノ都合損益ノ多少、且諸船航海發著ノ次第等緊要ノ件ハ、明細ニ書記シテ、時々驛遞寮ヘ報知シ、且之ヲ新聞紙ニ掲テ、世上ニ公告スヘキ事。

第十七則 會社ノ費用ハ、勉テ之レヲ省略シ、社中一同質素ヲ旨トシ、會合ノ時ト雖モ、飲食ノ奢靡ヲ禁シ、極テ會社ノ目的ヲ盛大ニ達セシムヘキ事。  
第十八則 當社運漕ノ荷物取次所或ハ取扱ノ者ハ、必ス社中タルヲ得ヘシトス。故ニ一株以上ノ所持主ニ非サレハ之ヲ許サ、ル事。

第十九則 實際施行ノ際ニ方リ、此規則ヲ改正増補スル事ハ、社中協同ノ上常ニ妨ケナシ。然トモ之ヲ改正増補セハ、必ス驛遞寮ノ承認ヲ稟ヘキ事。右ノ常則現今會社ニ列スル株主共同合議之上確定候條、今後會社ニ列スル株主共、其身其子孫及後見人、代理人、其他一切此會社ニ關係スル者皆能之ニ遵準シテ、毫モ乖戾スヘカラサル事。

明治五年 月 日

株 主

右正ニ承認候事。

明治五年八月十日

驛遞頭 前 島 密

日本國郵便蒸汽船會社會計法

第一條 運賃總額ノ内、

百分ノ五 荷物取次所世話人手数料。  
百分ノ五 船泊ニ屬スル諸費ヲ除クノ外、會社諸務役員其他ノ俸金、頭取請并ニ公舖修繕、其他會社ノ常務ニ屬スル一切ノ費用トモ。

百分ノ六 發港ノ節荷物積込舢下船賃及ヒ人足賃共一式。舢下方請負

百分ノ六 著港ノ節 同請負

百分ノ三 諸荷物口譯ケ 荷捌方請負

百分ノ六 荷物濡痛損候節 船長并荷捌方組合請負

辨償金爲ニ手當。

合計三十一分ヲ引去。

六拾九分 運賃實高トス。

右運賃實高ノ金額中ヨリ、各船々長ヲ初、器械方水火夫ノ者末々ニ至迄俸金、及運用碇泊中ノ諸費、并ニ各船艦及ヒ機械尋常ノ小修繕金五百圓以下



ノ費ヲ除キ去リ、其殘高ヲ第一殘高トナシ、其内ヨリ、大藏省御貸下金年賦其年ノ返納ヲ引去、爲替會社貸渡金其年ノ利息ヲ引去、右ノ二口ヲ引去、其殘高ヲ第二殘高トス。

但、此高資本總額ノ一割以上ノ時ハ、之ヲ百分シテ、

○其四十分ヲ難破船有之節代船買入并古船ヲ廢シ候節、新船買入ノ豫備トシテ、之ヲ第一積金ト稱ス。

○其二十分ヲ蒸汽機關大破ノ修繕并蒸汽罐入換ノ爲メ、之ヲ第二積金ト稱ス。

○其七分ヲ爲替會社へ船代金爲返濟分配スヘキ高トシテ、之レヲ第一分配金トス。

○其三十三分ハ全ク社中ノ利益ニシテ、株金ノ高ニ應シテ分配スヘキ者トシ、之ヲ第二分配金トス。

但、大藏省へ難破船代金上納ノ事有時ハ、此百分二ヲ引去ヘシトス。

第二條 第二殘高資本總金額ノ一割未滿五分以上ノ時ハ、此殘高ヲ百分シテ、

○其五十分ヲ第一積金トス。

○其二十五分ヲ第二積金トス。

○其五分ヲ第一分配金トス。

○其二十分ヲ第二分配金トス。

但、前條ノ事アル時ハ、此百分ノ一ヲ大藏省へ上納スヘキ事。

第三條 第二殘金資本總金額ノ五分以下二分以上ノ時ハ、之ヲ百分シテ、

○其五拾五分ヲ第一積金トス。

○其三十五分ヲ第二積金トス。

○其一分ヲ第一分配金トス。

○其九分ヲ第二分配金トス。

第四條 第二殘金資本總額ノ二分以下ナル時ハ、之ヲ百分シテ、

○其六十分ヲ第一積金トス。

○其四十分ヲ第二積金トス。

但、第一第二ノ分配金ハ皆無之事。

第五條 大藏省ノ年賦ヲ皆納シ、或ハ爲替會社ノ元金ヲ辨償シ、或ハ第一



第二ノ積金二十萬圓ニ及フ時ハ、前條分賦ノ法ヲ改正シ、更ニ適宜ノ算ヲ立ツヘキ事。

第六條 第一第二ノ積金ハ別途ニ之ヲ計算シ、其目途ノ經費ニ支給スル外ハ、其殘高ヲ爲替會社或ハ確實ナル銀行等へ預ケテ相當ノ利息ヲ請取リ、年々之ヲ増殖セシムヘキ事。

第七條 第一第二ノ積立金二十萬圓ニ及フノ後、其年ノ所得少キトキハ第一ノ積金ヲ積立サルモ、第二ノ積金ヲ可積立事。

第八條 損失有之第一殘高ノ返納或ハ歩合ヲ以テ減納シ、或ハ皆不納ノ時ト雖モ、第一第二ノ積金ハ相當ニ可積立、尤此積金現數二十五萬圓ニ及ハ、第一殘高ハ可成丈ケ減納スヘカラサル事。

第九條 會社ニ所得無ク、第一殘高些少ニシテ、大藏省ノ年賦金歩合ヲ以減納ノ節ハ、爲替會社ノ利息モ其割合ヲ以拂方ヲ減少スヘシ。若シ大損失ニテ右年賦金皆不納ノ節ハ、爲替會社ノ利息モ不拂事。

第十條 損失有之、大藏省ノ年賦返納不相成、且爲替會社ノ利息モ拂カタキ時ハ、株主ノ分配金ハ一切無之事。

第十一條 事故有之、社中一同協議ノ上解社ノ節ハ、船船并會社ニ屬スル一切ノ品物ヲ賣却シ、其代金ト第一第二ノ積金ヲ合セ、大藏省并爲替會社へ無損失様辨償致スヘシ。若シ右ノ金高ヲ以テ猶不足ノ節ハ、株主等出金ノ高ニ應シ、相當ノ割合ヲ以テ更ニ出金シテ之ヲ承辨スヘシ。若シ又總テ辨償ノ後餘金有之候ハ、株主一同其出金ノ高ニ應シテ正當ノ割合可致事。

第十二條 萬一會社分散ニ及フ時、大藏省ノ年賦、爲替會社ノ借金返濟未滿ノ時ハ、株主一同ヨリ出金有之、株主損耗ハ勿論、會社ニ屬スル一切ノ品物ヲ賣却シ、其代價ヲ以テ尋常ノ分散公法ニ可處事。

第十三條 頭取等ノ取扱ヨリ大損失ヲ生シ、會社分散ノ時ハ、會社ニ屬スル船々器類其外一切ヲ賣却シ、且正副頭取其他樞要ノ地ニ任スル役員モ、皆其證據金ヲ不殘出シテ其分散金ノ内ニ可相充。若シ又頭取等不正ノ處置アリテ、會社大損失ヲ生シ、或ハ分散ノ場合ニ及フ時ハ、其當身ノ證據金ヲ出スハ勿論、財産ヲ盡シテ其損失ヲ償ハシメ、或ハ分散ノ數ニ可充事。



時、穩妥ナラサル事アラハ幾度モ官ノ許可ヲ得テ之ヲ改正スヘキ事。  
右ハ、現今會社ニ列スル株主一同協合ノ上、取極候也。

明治五年八月

頭取 高崎長右衛門  
一等副頭取 山路 勘助  
二等副頭取 岩橋 萬造

右正ニ承認候事。

明治五年八月十日

驛遞頭 前 島 密

海運史料所收明治十五年七月廿七日物價新報記事、左ノ如ク見ユ。

吾カ商業世界ノ海運ハ、近世ニ至ルマテ寥々乎トシテ其見ルヘキモノナカリシカ、維新後即チ明治三年始メテ回漕會社(木村萬平ノ首唱)ノ設アリシヲ濫觴トシ、○中明治四年春、爲換會社ニ於テ其劇ヲ繼キ、別ニ回漕取扱所ヲ立テ、千里、回漕(原名ヲ「サクラ」ト謂ヒ、本ト東京商社ノ所有船)有功、明光共ニ紀州藩ノ所有船、萬里丸(長鯨ノ改名)ノ五汽船ヲ以テ、東京大坂間ノ定航ヲ創メ、兼テ函館、石卷等ノ航行ヲ開キ、元廻漕會社ハ、○中尾勢州ト東京トノ回漕ヲナセシノミナルカ、萎靡トシテ振ハス、後年遂ニ其社ヲ解クニ至レリ。此時ニ際

シ、九十九商會アリ(岩崎彌太郎氏ノ起立ニ係リ、後チ三川商會ト改稱シ、又終リニ三菱會社ト變ス)、紅葉賀、夕顔(後チ太平ト改名ス)、鶴丸(後チ千年ト改名ス)ノ三汽船ヲ以テ、東京大坂高知等ヲ廻航セシメタリシモ、其勢ハ遠ク回漕取扱所ニ及ハサリシ。

是ヨリ先キ、太平洋郵船會社(横濱ニ支店アリテ、一般ニ亞墨利加四番ト稱ス)ハ、吾カ日本沿海ノ運輸ヲ開ラキ、且ツ盛ニナラシメサル可カラサルノ理由ヲ論シ、之レヲ吾カ政府ニ建議シタリ。今其要ヲ舉クレハ、未開ノ人民ニ在テハ、容易ニ斯ノ偉業ヲ起ス能ハサルヘシ、政府宜シク率先セズンハアルヘカラス。若シ政府ニシテ起業スヘカラサルノ事情アレバ、姑ラク之ヲ當社ニ命任セラル、ノ特許アランコトヲ請フトノ趣意ヲ以テ、切リニ相迫リシヨリ、吾カ政府ニ於テモ、之ヲ急ニセスンハアラサルノ情勢アリシノミナラス、固ヨリ沿海ノ運輸ニ注目セラル、ノ厚キモ、奈何セン、事務多端ノ折柄ニテ、事ノ此ニ及フヘキ違アラサルニ、明治四年十一月廢藩置縣ノ制變アリタルヨリ、從來或ル藩々ノ所有セシ蒸汽船ハ、總テ大藏省ニ徵集セラレタレバ、當時在職ノ顯官及ヒ陸奥○宗前島密ノ兩氏ハ、首トシテ爲換會社ノ役員行岡庄



兵衛永田甚七、其他高崎長右衛門、山路勘助、岩橋萬造ノ諸名ヲ懲憚シ、其回漕取扱所ヲ擴張シテ、更ニ郵便蒸汽船會社ヲ設立セシメ、(具企圖ハ、明治五年ニ始マリ、其開社ハ、明治六年ニ在リテ、最初ハ、日本政府郵便蒸汽船會社ト稱シタリ)之ニ藩々ヨリ收メタル所ノ蒸汽船十數艘ヲ拂下ゲ(代價ハ合金二十五萬圓餘ニテ、永年賦上納ノ約)以テ大ニ之ヲ保助シタリ。然レトモ其船舶タルヤ、修理ヲ加フルニ非スンバ直チニ海運ノ便ニ供シ難キモノ居多ナルカタメ、其費用トシテ六十萬圓ノ金額ヲ大藏省ヨリ追々ニ下付セラルヘキ筈ナリシカバ、郵便蒸汽船會社ニ於テハ、其下付金ヲ用途トシ、且創立ノ初ヨリ其資金ハ爲換會社ヨリ辨用スルトノ約束モアレバ、遽カニ船舶ノ修理ニ取掛リ、之カ爲メ爲換會社ヨリ借り入レタル金額ハ、少頃ノ間ニ四十餘萬圓ヲ超ヘタリキ。既ニシテ明治七年小野組ノ瓦解スルニ當テヤ、爲換會社忽チ其影響ヲ被リテ、逆モ維持スヘカラサルノ害故ニ遭ヒ、且同社ノ目當ト做シタル大藏省ノ下付金モ、政府正ニ會計法ノ改革ヲ行ハレ、容易ニ下附セラレサルノ有様ナレハ、郵便蒸汽船會社ニ對スル舊誼前約ヲ捨テ、頻リニ其貸金ヲ督促シ、郵便蒸汽船會社ハ、當初ノ用途ニ由リ、大藏省ニ向テ修理費(六十萬圓)

ノ下付ヲ要請シタリシカド、竟ニ其請ヲ聽サレバ、爲換會社ノ督促ニ應スル能ハサルハ勿論、斯ル手違ヨリ種々ノ不都合ヲ醸生シ、内ニハ已ニ株主ノ紛擾不平アリテ、冗費ノ出途多ク、外ニハ又三菱汽船ノ此機ニ乘シ競争スルアリテ、運銀ノ收額ヲ減シ、加之其船舶ハ、素ト舊藩々ノ外國商人ニ銜賣セラレタル老朽ノモノ多ク、商業世界ノ供用ニ適セル良船ハ少レナルヲ以テ、到底收支相償ハサルノ困頓ヲ見ルニ至レリ。之ヲ郵便蒸汽船會社ノ第一厄運ナリトス、

折シモ又明治七年五月初ヨリ臺灣征討ノ役起リシカハ、三菱會社ハ、唯此時ヲ然リトシテ書ヲ政府ヘ奉リ、所有ノ三汽船ヲ以テ軍用ニ供シ、國恩ノ萬分ニ報ントノ衷意ヲ表シタレバ、蕃地事務局總裁ハ、殊ニ之ヲ嘉賞セラレ、此役ニ就キ同局ニ於テ購入セシ汽船ハ、悉ク之ヲ三菱會社ニ托シテ、其取扱ヲ命シ、何故ニヤ郵便蒸汽船會社ノ汽船ハ、一艘ダモ使用セラル、コトナク、獨リ海軍省ヨリハ、兵器彈藥其他ノ運輸ヲ命セラレタリト雖モ、其運賃ハ三菱會社ノ汽船ニ於ケルカ如クナラズシテ、毫モ益スル所アラサリシガ、此役ノ畢リタル後モ前ニ述ベタルガ如キ場合ナルニヨリ、郵便蒸汽船會社ハ、益



々艱苦ニ陥リテ、三菱會社ノ壓倒スル所トナリ、其蒸汽船及ヒ一切ノ所有物ヲ政府へ買上(代價合計金三十五萬圓)ケラレンコトヲ請フニ至レリ。是レ郵便蒸汽船會社ノ第二厄運ニシテ、此厄運ヲ最期トシ、明治九年ヲ以テ終ニ此會社ヲ崩潰セリ。

〔參考〕 法規分類大全ニ、

布告六年(○明治)六月十四日。太政大臣三條實美署。第二百一十一號。

近來郵便蒸汽船問屋或ハ取扱所等ノ看板ヲ相掲ル者、多分有之ル處、日本國郵便蒸汽船ト米國太平洋郵便蒸汽船ト相混シルニ付、自今日本國及米國太平洋ノ文字ヲ加ヘ、判然區別シ可申事。

〔附記〕 郵便汽船會社品海發著合砲

東京府布達六年(○明治)三月二日。坤第三十六號。區戶長。

日本國郵便蒸汽船會社ノ船舶品海發著共、自今合砲相發シル儀、御聞届相成旨、大藏省ヨリ被相達ル間、此段爲心得相達ル事。

法規分類大全

港内取締規則制定

六年○明治○紀元二五三三年。

一月十二日、港内取締規則ヲ定ム。

○法令類纂。

港内取締規則制定事蹟

港内取締規則制定 法令類纂ニ據ル。

第八號

府 縣 へ

港灣海川口等ニ於テ、出入ノ商船へ積込ル物品ニ應ジ、些末ノ品々迄モ、從前税金收入致來ル向モ有之ル處、右ハ國內一般ノ運輸ヲ塞キ、交易ノ利潤ヲ妨グ、終ニ物價ノ不平均ヲ釀成致シル間、當明治六年一月ヨリ一切被廢止、更ニ別紙之通港内取締相立、出入之船舶検査致シ、手数料收入可致答相心得、從前海川口稅收入有之向ハ、御廢止ノ廉々、見込取調、大藏省へ可申出事。

一、神奈川港ヲ始メ、各開港場ニ於テ、内外船舶共碇泊場所ハ、其港内ノ景況ニ應ジ、内外船碇泊ノ場所區別致シ可申、萬一其港内區別難相立ル得ハ、可成丈混淆不相成様、可致注意ル事。

一、從前船改所等取立積荷品相改ル箇所ハ、地名早々取調、大藏省へ可申立事。

明治六年一月十二日

太 政 官

港内取締規則

第一條

一、凡ソ諸商船、西洋形日本形ニ拘ラズ、其船主住居ノ地、乃チ其船定繫ノ港ヨリ帝都時代ノ港灣



リ、或ル他港へ出帆スルトキハ、其港船改所又ハ其筋ノ役所ヨリ、其船着到スヘキ港ニ在ル船改所或ハ其筋ノ役所へ宛タル左ノ雛形ノ通りナル添書ヲ受取り、出帆致スヘク、若シ右ノ添状ヲ所持不致、他ノ港へ入津スル時ハ、其港ニ於テ、船ノ大小ニ從ヒ、相當ノ過料可申付事。

但、着船ノ上ハ、其港ニ在ル船改所或ハ其筋ノ役所へ、添書相納メ可申、甲港ノ船乙港へ入津致シ、其積荷ヲ揚陸シ、更ニ他ノ物品ヲ積込ミ、又他港へ出帆スルトキハ、其港ニ在ル船改所或ハ其筋ノ役所ヨリ、更ニ本文同様ノ添書ヲ請取ル可キ事。

出帆免狀

一、船名西洋形敷日本形敷

積石

乗組人

船頭誰外何人

積荷

何品幾許

何石又ハ何噸

但次港以後ハ

何港ニ於テ積込

送狀幾通ノ通り。

船客

次港以後ハ、

何人、或ハ無之。

但何港ニ於テ乗込

次港以後各港出入致シハ分ハ、左ノ通記載。

何年何月何日

某港へ出帆。

同年何月何日

某港へ著。

何年何月何日

同港出帆。

同年何月何日

當港へ着。

右者當港誰所持ノ船、何年何月何日當港出帆、某港へ罷出以段、届出以間、免狀相渡以也。

月 日

何國何郡何港

船改所

何國何郡何港

誰

第二條

一、船主居住ノ地、乃チ其船定繫ノ地へ歸著ノ時ハ、出帆ノ港ニ於テ受取以添書ヲ、其所ノ船改所又ハ其筋ノ役所へ可相納、若シ等閑ニ致シ以者ハ、船ノ大小ニ從ヒ、相當ノ過料可取立事。

第三條

一、凡ソ其港へ入津ノ諸船西洋形敷、著後廿四時間ニ、其港船改所又ハ其筋ノ役所へ、左ノ届書案之通り、船税鑑札荷物送り狀相添届出、許可ヲ受ル上、荷物

帝都時代ノ港灣



揚陸可致、若等閑ニ致シム者ハ、船ノ大小ニ從ヒ、相當ノ過料可取立事。

入港御届

西洋形歟  
日本形歟

一、船名

船主 某國某郡某所何某

積石 何石又ハ噸數何噸

乘組 何人

積荷 何品幾何

船客 何人

右迄何月幾日何國何港出帆仕、何月幾日當港へ著船仕ハ、間、船稅鑑札某港御役所之御添書、並ニ荷物送り狀相添、御届申上ハ、以上。

月 日

右沖船頭或ハ直乘。何國何郡何所

何 某

何 某

右宿或ハ問屋。何町

何 某

印

何港船御改所御中

第四條

一、某港入津ノ船ハ、西洋形共、船改所又ハ其筋ノ役所へ左ノ通港内碇泊稅ト納可致事。

五十拾石以上 拾石ニ付 新貨壹錢。

則貳百石ニ付、新貨貳拾錢。

貳百石以上 拾石ニ付 同七厘五毛。

貳百石迄ハ定法新貨廿錢、貳百石ニ至リ貳拾錢、七厘五毛。則五百石ニ付四拾二錢五厘トス。

五百石以上 拾石ニ付 同五厘。

五百石迄ハ定法新貨四十二錢五厘、其以上十石ヲ増ス。毎ニ五厘ツ、ヲ増ス。則前例ニ同ジ。

但、噸數ヲ以テ唱ハ船ハ、壹噸ニ付六石七斗貳升ノ割ニテ石ニ直シ可取立、且ツ出帆ノ節ハ、都テ其半減上納ノ筈ニ付、入港ノ節合テ上納可致置事。

第五條

一、凡ソ諸船風潮ノ不順ニヨリ一時無餘儀入港シ、一晝夜間ニ出帆スル者ハ、即チ廿四時間。査檢ヲ受ルニ及ハスト雖モ、二日以上碇泊スルカ、事故アリテ數日碇泊スル時ハ、其港ニ在ル船改所或ハ其筋ノ役所へ届出、檢査ヲ受ケ、風潮ノ便宜次第出帆スヘキモノハ、兼テ出帆ノ免狀ヲ受ケ置ク可シ、自然免狀受ケ置

帝都時代ノ港灣



以後、猶十日以上碇泊スル時ハ、出帆ノ節、免狀書換願出ツ可ク、税金ノ儀ハ、上納ニ不及シ事。

但、其船ノ都合ニヨリ、其港ニ於テ積荷揚陸或ハ賣拂ハ節ハ、定ノ通碇泊稅上納可致事。

第六條

一、郵船之類、或ハ積荷船ニシトモ、從來之場所差定ハ、分神戶ハ東京ト横濱、大坂ト類。出入ノ度、毎取立ハテハ、營業ノ差支ニモ可相成ハ、間、右等ハ一ヶ月分出入ノ度數ヲ計リ、前章規則之割合半方ツ、取纏、其月初メニ一時上納可致、其時ハ檢査濟ノ票札可相渡、若シ納方延引致ハトキハ、相當ノ過料可申付事。

第七條

一、凡諸船出入ハ、開港場ハ勿論、其他ノ港内ニ於テモ、荷物或ハ荷足品ヲ揚卸スルキハ、波戶場ノ順序、揚卸ノ時間等、總テ其港ニ定メタル法則ヲ守ル可シ。若シ之ヲ犯ス者ハ、相當ノ過料可申付事。

第八條

一、無鑑札ニテ入港ノ船ハ、辛未八月中相達ハ、船稅規則第三則ニ照準シ、百石

付金五圓ノ割合ヲ以テ、罰金可取立事。

第九條

一、積石五拾石以下ノ商船及解漁船等ハ、都テ各港ニ於テ相當ノ規則ヲ定メ可申事。

但、五拾石以下船稅ノ儀ハ、船稅規則第五則但書ノ通、可相心得事。

第十條

一、從前通船無之土地ヲ新タニ堀割、運輸ノ便ヲ開キハ、老堀割入費支消ノタメ、年季ヲ定メ通船ヨリ口錢等取立ハ、類ハ、此規則之例ニ非サル事。右之通確定シ事。

明治六年一月

坤第三十五號

大藏省  
市在區々  
戶長

川船持共之内、是迄五十石積以上之海船ニテモ、河岸直着之分ハ、川船鑑札相渡、通船差許シ來ハ、處今般港内取締規則御發行ニ付テハ、右五十石積以上之分ハ、以來出帆歸帆共、御規則之通り、船改所之許可ヲ受不申ハテハ、他港へ入津之節、差支ハ、條、所在船持共へ、爲心得、區々無洩可觸知事。

帝都時代ノ港灣



但海船ニ無之、全ク川稼船之分ハ、在來之通事。

明治六年二月十一日 東京府知事 大久保一翁

利根川水運

六月○明治六年(紀元二五三三年)陸運元會社利根川荒川鬼怒川ノ水運ヲ開ク。即

チ後ノ内國通運株式會社也。十年○明治〇紀元二五三七年二月、利根川筋ノ運漕

ニ汽船ヲ用ヒ、十四年○明治〇紀元二五四一年十二月、銚子汽船會社ノ創立有

ルヤ、廿八年○明治〇紀元二五五五年二月一日ニ及ヒ、兩社同盟シテ、東京銚子

○下總國。間直通航路ヲ開ク。○利根川汽船航路案内。

利根川水運

利根川汽船航路案内ニ據レハ、

内國通運株式會社の沿革并に通運丸の起源

内國通運株式會社は、江戸定飛脚問屋仲間の發起に係り、本邦に於ける最古の運送會社なり。而して同社が運輸交通業に係る創立は、遠く慶長の昔江戸開府當時に發軔し、連綿として本業を承繼せしが、明治三年政府新に郵便法を制定せし以來、本業漸く衰頹の徵を呈し、同五年遂に町飛脚の本業を廢し、別に私立會社を起して、物貨遞傳の業に従事す、名けて陸運元會社と稱す。其内國通運會社の稱あるは、全國の物貨を通運し得たる後なりとす。而して同

利根川水運  
事蹟

會社か水陸運輸交通の上に至大の關係を有するも亦之か爲なり。其現状及  
ひ取締役員名左の如し。

資本金 百貳拾五萬圓現在拂込額ハ拾七萬五千圓

諸積立金 五拾六萬五千貳百四拾壹圓餘。

船舶數 汽船二十貳隻。和船三十六艘。

取締役 吉村甚兵衛氏。佐久間精一氏。日向野善太郎氏。吉村佐平氏。平川

潤亮氏。

通運丸航路開始の由來を原ぬるに、内國通運會社の前身陸運元會社が明治五年八月水運理辨の爲め、上州高崎川岸に運送所を設け、野州阿久津川岸に出店を開設し、以て和船漕運の路を開きたり、是れ同社水運の濫觴なりとす。同六年六月利根川荒川鬼怒川の三川に水路を開き、物貨運漕の取扱をなす。同七年小網町出張所に於て、陸羽筋水陸兼行駄荷物賃錢を定め、之を廣く公衆に示して、大荷物取扱を擴張せり。同九年九月水陸運送規則を定め、驛遞寮の認可を得、同年十月従前の取扱所を内國通運會社取扱所と改稱せり。斯の如く水運幼稚時代にして、日本形小船と雖平田高瀬の類にあらざれば、通じ

帝都時代ノ港灣



難きを以て、汽船の通航を見る能はさりしなり。當時同社の重役たる吉村甚兵衛氏(先代)佐々木莊助氏等、汽船の通航し能はざるを遺憾とし、同九年東京より武州北河原に至る利根川筋の水心を實測し之れが深淺を測りて、汽船の通航に便ならざるを知悉したり。同十年一月遂に之か浚渫を忽諸に附すべからざることを政府に建議す。次て利根川筋往復旅客の重量手荷物の賃錢并に乗船人心得書を制定して、之れが認可を得、同年二月新造汽船落成せしを以て、第一號通運丸と命名し、其筋の検査を受け、免狀下附に伴ひ、二月二十四日試運轉を爲し、東京を發して利根川筋武州大越迄往返し、次で水上除害及取締方を上願す。同年三月命を承け、先に建議せし江戸川及利根川の淺瀬を浚渫す。其幅僅か六間なりしと雖延長實に一千五百六十餘間に達すと云ふ。茲に航路開通の端を開き、同十年五月一日に至り、始めて東京及武州妻沼間に汽船航行の業を開くに至れり。次て船舶衝突豫防規則を定むる等、幾多の苦心經營に依り、漸く一般運輸交通の便益を起し、遞次汽船を新造して、小名木川筋より江戸川利根川を経て、武州妻沼航路、常州高濱航路、下總境町銚子間航路、中仙道戸田航路を開き、延て渡良瀬川より思川に入り、栃木縣生井

川岸の航路を開く、其延長數十里なり。故に東京兩野常總及武州の五ヶ國に跨り、其沿岸は勿論陸羽街道の旅客は多く之れが便に倚るを以て、川汽船營業益隆昌なり。此時に當り、舊岡山藩士永島良幸、藩主池田侯の助力を藉り、同十三年同一航路に汽船長島丸の航行を開始せしかは、忽ち競争の端を開き、凡三年間激烈なる競争をなせり。而して同年十月野州新波の航路を延長し、同十六年三月永島良幸氏の所有せし地所家屋及汽船は擧て之れを同社に買收し、同年五月早川田航路を笹良橋に轉じ、同年八月銚子汽船會社及吉岡七郎氏と協定し、陸路千葉縣野田及三堀を経て、東京銚子間連絡輸送の便を開く。此間東京行徳河原間の汽船航路を開きしが、是又類業者起りて競争をなし、同十六年末に至り、行徳地方有志と示談整ひ、同十七年より行徳航路を獨占せりと云ふ。是より先汽船營業者續出して競争止むときなし。就中航運會社なるもの始終拮抗せしも、遂に十八年に至り、又休業するに至れり。延て三十三年下總浦安常州水海道并に川俣航路を開き、以て早川田の復航を圖る。此間幾多の開廢ありしも、現に同盟航路を併せ、笹良橋外十航路を有し、其汽船營業事務を深川支店の管掌とし、汽船二十餘隻補助和船三十餘艘を以



て之に充て、航業益盛なりと云ふ。

銚子汽船株式會社の沿革并に銚子丸の起源

銚子汽船株式會社は、明治十四年五月創立に着手し、同年十二月官許を得、資本金壹萬千貳百五拾圓を以て株式となし、銚子汽船會社と稱す。社長に岡本吉兵衛氏を選任し、同十五年二月開業す。之れを同社の起源とす。蓋し銚子港は、戸數六千、人口三萬有餘、河漕海運にて其股賑を助け、號して東京以東の都會とす。然るに汽船の設け先鞭の人なきを以て、同志相謀り、本社を創立せし所以なり。延て二十六年十月商事會社法に依る定款を更正し、資本金を貳萬圓に増額せり。當年に於ける後期決算は會社創業以來未曾有の収益ありしと曰ふ。然るに當時を以て將來を豫想するに、既に日本鐵道の取手驛に達し、總武鐵道の御倉驛に達する等、社運消長測るへからざるを以て、配當率を五朱以内とし、専ら基礎を固からしむることに勉めたりと云ふ。降て三十五年五月定款を變更し、資本金を四萬圓に増額す。三十六年より四十一年に至る間に於て、或は日露の戦役に遭遇し、或は汽船吉田丸と競争をなしたる如き、幾分の損害を蒙らざるに非すと雖、社運益良好にして、幾多の辛酸艱難に

耐へ、漸次諸般の改良設備を盡し、益斯業の隆盛を見るに至る。其現状及び取締役氏名、左の如し。

資本金 四萬圓 諸積立金 壹萬參千圓

船舶數 汽船七隻 和船四艘 取締役 岡本吉兵衛氏、加瀬宇平治氏、渡邊兵右衛門氏

銚子丸航路開始の由來は、銚子汽船株式會社の起源に胚胎し、明治十五年一月銚子木下間に銚子丸一隻を以て隔日航回を開始せり。之れを銚子丸の起源とす。當時航路の狀況は、下利根川に銚港、信義、銚浦丸等あり。西北浦には、通運豐通、高濱、開運、大吉丸等、其數十餘隻ありて、各船主を異にし、其競争進んで、軋轢の勢をなせり。當時同社の航路たる銚子木下間隔日の航行にては、交通の便宜足らざるを以て、第二銚子丸を新造し、十五年八月竣工式を行ひ、爾後二隻の汽船を以て日航するの便を開く。是より先銚港丸船主吉岡七郎氏は、競争の弊を憂ひ、其營業管理を同社に委し、合同同盟の議を交渉するに至る。同社其要求に應じ、十五年八月に至り、合同同盟をなし、十六年八月内國通運株式會社と締約し、其航路を東葛飾郡三堀に延長し、下利根川の航回は、同盟



汽船を之に充て、江戸川は通運丸を以てし、銚子東京間連絡輸送の便を開始せり。然れども三堀野田間悪路の爲め、冬期氷雪の候に際しては、乗客貨物輸送上の困難少からざりき。十六年八月いろは丸の銚子港に回航したるを以て、直ちに競争の端を惹起し、或は進路の前後を争ひ、或は賃金の低減を競ひ、三堀野田間の陸上に於ては、無賃乗車を供する等、其競争最も激烈にして、一年四ヶ月に亘り、其冗費鮮かならずとす。十七年十一月に至り、いろは丸は遂に跡を利根川に絶つ。同年十二月銚港丸船主吉岡七郎との聯合條約満期たるに據り、營業上管理の委託を解約せり。廿一年二月銚子丸を北浦に廻航し、通運丸、銚港丸と共に、順番航回せり。二十三年十二月西浦航路を開く。曩に高濱町篠田八郎兵衛小川町井崎忠介兩氏の請求に依り、二社一名共有汽船誠長丸を以て之れに宛て、其經濟は共通計算とし、内國通運會社及吉岡七郎氏の囑託を受け、同社之れか管理の任に當り、而して誠長丸解散の後には、各自の汽船を用ひ、輪番航回することに更めたり。二十六年四月利根運河内に汽船を進め、直接荷客の繼替を開始せり。蓋し利根運河完成以來、運河内は舢舨船を用ひ、荷客の交換を爲せしが、時間を浪費するのみならず、風雨夜間の際に於

ける乗客の困難あるを以てなり。二十七年十二月第三銚子丸を新造し、二十八年一月銚子東京間直航を開始せり。是より先き社長岡本吉兵衛氏同盟船主吉岡七郎と俱に内國通運株式會社と直航の議を圖る。蓋し陸上汽車の延長に鑑み、荷客繼替の不便あるは、斯業を發展する所以に非ざるを以てなり。同社も亦之れを諒とし、再三交渉の結果、西北浦船を以て佐原繼替に止め、東京銚子相互二回定期發船直航するの便を開きたり。三十年三月第四銚子丸を新造す。同年六月總武鐵道の銚子に延長するを以て、運賃率の改正を爲せり。卅五年五月内國通運株式會社と共に、吉岡孝太郎氏所有汽船銚港丸四隻と營業の全部を買收分割し、其二隻を得て第五第六銚子丸と改名せり。四十二年八月内國通運株式會社と協定し、汽船吉乃丸美吉丸の二隻を買收し、内美吉丸一隻を領し、現在使用汽船七隻補助和船四艘を有し、其航業益盛なりと云ふ。

#### 兩會社の同盟

通運銚子兩株式會社は、以上の經歷を有し、他汽船と數次激烈なる競争をなし來りしも、漸次反對業者は營業休止となり、今は反對船の隻影を止めざる



に至れり。由來汽船の競争は孰れも極端に走り、徒らに賃金の低減を競ひ、航業の改善、汽機、汽鐘の改良等を省る違なく、其害毒實に尠少ならず。茲に兩社は漫りに輸贏を争ふの不可なるを覺り、明治二十八年二月一日東京銚子間を始め、銚子高濱間、佐原銚子間の各航路を同盟航路となし、爾來圓滿に發達しつゝあるは悦ぶべき現象なりとす。

而シテ謂フ所ノ利根川航路ハ、左ノ如シ。

本汽船航路を分ちて左の十一航路とす。  
曰く、東京行徳間、東京川俣間、東京笹良橋間、東京水海道間、東京銚子相互間、佐原銚子間、銚子高濱間、銚子土浦間、土浦佐原間、土浦鹿島間、土浦江戸崎間、是なり。

東京行徳間は、深川高橋を起點とし、小名木川新川を経て、千葉縣東葛飾郡行徳町一丁目に至る航路七哩なり。東京笹良橋間は、兩國を起點として、隅田川を横斷し、小名木川新川江戸川を經、千葉縣關宿の激流を溯航して、逆川赤堀川を過ぎ、渡良瀬川に入り、茨城縣古河上流に至りて二となる。一は巴波川に入り、下都賀郡部屋村新波に至り、一は渡良瀬川を上航し、下都賀郡三鴨村笹

良橋に至る。此航程六十六哩なり。

東京川俣間は、兩國を起點とし、埼玉縣栗橋上流鷺の宮地先に至る。此間笹良橋航路同一の進路なり。是より上利根川を上航し、群馬縣邑樂郡佐貫村川俣に至る。航路五十四哩なり。

東京水海道間は、兩國を起點として、隅田川を横斷し、小名木川新川江戸川を經て、利根運河を通航し、中利根川より、菅生沼に入り、更に鬼怒川を上航し、茨城縣結城郡水海道町に至る。航路四十三哩なり。

東京銚子間は、東京銚子相互起點の航路にして、東京より航するものは、蠣殻町を起點として、隅田川を横斷し、小名木川新川を經、江戸川を上航し、千葉縣深井新田に至りて、利根運河に入り、東北航して、中利根川に出で、右折東航して、千葉縣銚子町に至る。(銚子を起點として上航するものは、この順序を顛す)航程七十八哩の同盟航路なり。

佐原銚子間は、佐原を起點とし、横北利根川及び浪逆浦を經て、大船津より鹿島郡銚子町に至る。航程二十二哩の同盟航路なり。

銚子高濱間は、銚子を起點とし、下利根川を上航して、千葉縣香取郡佐原町を



經、横利根川に入り、茨城縣行方郡牛堀より左折して霞ヶ浦を北航し、高濱に至る。航程四十二哩の同盟航路なり。

銚子土浦間は、銚子高濱間航路と同一進路を取り、途中霞ヶ浦に於て行方郡玉川村井上地先より西航して、土浦川口に至る。航程四十二哩なり。

土浦佐原間は、銚子土浦間航路の内、佐原町下流を除きたる同一航路にして航程二十二哩なり。

土浦鹿島間は、土浦を起點とし、土浦佐原間同一航路に依り、行方郡牛堀より、北利根川に入り、潮來前川を経て、鹿島郡大船津に至る。航程三十三哩なり。

土浦江戸崎間は、江戸崎を起點とし、小野川を過ぎ、霞ヶ浦に出で、大山岬より左折西航して、土浦に至る。此航程二十哩なり。

利根川汽船航路案内

七年 〇明治〇紀元

二月十八日、解漁船並海川小廻船等船税規則ヲ

定ム。類纂。

解漁船小廻船税規則制定

第二十一號

解漁船小廻船船税規則制定

法令類纂ニ

解漁船小廻船税規則制定事蹟

明治四年辛未八月船税規則中、解漁船等ノ類ハ、追テ一般ノ税規確定可相成旨相達置ハ、處、各地方有税無税或ハ寛苛輕重有之、不平均ニ付、今般別冊ノ通相定、來ル明治八年一月一日ヨリ施行ハ、條、此旨布告ハ、事。

明治七年二月十八日、太政大臣 三條 實美

解漁船並海川小廻船等船税規則

第壹則

一、各府縣管下之人民所有之解漁船並海川小廻シ船等之類ハ、來ル明治八年以後、檢査之上、燒印ヲ標シ、ハ、管ニ付、本年十二月中迄ニ管轄廳ニ申立、檢印相受ケ可申事。

第二則

一、解漁船并川船ハ、積石之多少ヲ問ハズ、其他五十石未滿海船之類、壹艘毎ニ舳梁ヨリ、舳梁迄之延長間數ニ、應シ、左之通り年々四月中迄ニ税金相納可申事。

但、曲尺六尺ヲ以壹間トシ、間ニ不滿端數ハ切捨ハ、事。

一、舳梁マテ、長三間迄ハ壹ヶ年税金貳拾錢

帝都時代ノ港灣



以上長壹間ヲ加ル毎ニ、十五錢ツ、ヲ増加納稅可致事。

第三則

一、耕作一途ニ相用ヒ田舟、及ヒ水害備ノ爲メ常ニ陸上ニ設ケ置全ク他ノ稼方ニ不充船ニハ、別紙書式之通リ願書差出シ、船稅免除之檢印相受ケ可申事。

第四則

一、四月前之解船破船、及ヒ四月後ノ新規造船ハ、其年納稅不及以得共、時々相届ケ、造船之分ハ第壹則之通リ檢印請置可申。但、讓渡船之義モ、其時々届出可申事。

第五則

一、無檢印之船、及ヒ船稅免除之檢印相受ケ置、他ノ稼方ニ相充以船モ有之ニ於テハ、其船相當稅額五倍ノ罰金可申付事。

第六則

一、無檢印之船及ヒ船稅免除之檢印有之船ヲ以テ、他ノ稼方致シ以者ヲ訴出以者ハ、其罰金十分之壹賞金トシテ給與以事。

耕作船其外船稅免除願書式

一、船長 船梁マデ 何間。

何艘。

右者 耕作一途ニ相用ヒ 度ハ間、船稅免除之御檢印被成下以様仕度、尤外稼業ニ

ハ一切相用ヒ申間敷以、仍之此段奉願上以、以上。

何年何月幾日

何縣府

何

知事 誰殿

之

前書之通相違無御坐以也。

右同町宿

市在 區 戶

長 何之誰印

番外

區 戶

長

本年第廿壹號ヲ以、船稅規則御達相成以ニ付ハ、更ニ船之間尺打改、燒印打替ル筈以條、各大區船持共、別紙日割略。之通、船改所へ罷出以様各區無洩可相達以事。

但、午前第十時迄ニ船々乘廻シ以様可致事。



築地開市場  
税關移管

明治七年六月十九日

東京府知事

大久保 一翁

五月十三日元○明治七年(紀二五三四年)築地開市場税關○京市橋區事務ヲ租稅寮ニ移シ、東京府支廳ト改稱ス。廿日○明治七年(紀元二五三四年)五月ニ至リ、横濱税關ヲシテ之ヲ兼管セシム。○横濱税關沿革、大藏省文書。

築地開市場税關移管

左ノ如ク傳フ、

略。上。同。治。明。七年五月十五日、同關○築地開市場税關ノ事務ヲ租稅寮ニ移シ、爾來築地税關ト通稱ス。而シテ同開市場税關ハ、東京府支廳ト改稱ス。

東京府届七年○明治○五月十五日

當府所轄築地税關事務租稅寮へ引渡シ様、大藏省ヨリ此度指令有之ハ處、同所ノ儀ハ、同地方關係ノ外國事務調所ニテ、開港場ニ無之ハ間、東京ヨリ輸出ノ品ハ、横濱ニテ税銀取立ハニ付、稅務ノ廉ハ無御座ハ得共、外國人輸出入物品改方等ノ儀ハ、税關附荷物改所ニテ取扱居ハニ付、右改所并同所波止場南品川ニ取設有之ハ出入船尋問所建物等、一昨十三日租稅寮ニ引渡申ハ、就テハ税關名義ハ相廢シ、當府關係外國事務ハ、從前ノ通り、於同所取扱申ハ、尤税關名稱ノ儀ハ以後當府支廳ト改稱致シハ、依テ此段及御届

也。

同月三十日、横濱税關ヲシテ東京築地税關并ニ品川尋問所ヲ兼管セシム。

大藏省上申七年五月三十日

築地開市場税關事務是迄東京府ニ於テ取扱來ハ處、本月十二日同所明石町改所并ニ南品川尋問所建物共、租稅寮へ請取以來横濱税關ヨリ兼轄事務取扱申ハ、右ハ兼テ伺濟ノ事故、此段御届申上置也。

同年七月五日、東京築地税關ヲ横濱税關出張所ト改稱シ、品川尋問所ヲ横濱税關監吏出張所ト改メ、品川灣出入船舶ノ尋問監視ノ取締ヲ爲サシム。

五月十二日○明治七年

横濱税關沿革

租稅頭

助

屬

横濱税關ハ別紙之通回答申越ハニ付、供回覽併る東京府ニ相達案相伺申也。

築地開市場税關事務、當寮へ請取方之義ニ付、頃日星租稅權助出張、其筋官員ニ引合濟、別紙ケ所書之建物并地所共、明十三日午前九時横濱發車品川尋問

帝都時代ノ港灣



所より請取方可爲致趣申出以間、其筋擔當之者御差出相成、差問無之様御取計有之度、此段申入以也。

租 稅 頭

東京府知事宛

東京府築地稅關請取方之義ニ付回答

橫 濱 稅 關

過日八十七號ヲ以、東京府築地稅關請取以前、一應實地ニ付立會可致旨御達ニ付、即拙者出張取調以處、稅務ニ干係要用之箇所ハ、別紙之通ニ有之以、因テ右箇所請取以様、同府出張之官員ハ談置申以、且稅關本局ト相唱以建物之義ハ、築地裁判所其他ノ出張所ニ充用致居以、其實稅關ニハ無之以、右ニ付強テ本關へ、請取以、亦不用ニ可屬以ニ付、右ハ其儘据置、別紙之箇所而已、明後十三日午前九時該港發車品川尋問所ヨリ請取始メ可爲致以、右ニ付右刻限同府當該之官員も出張、立會引渡方取計以様、同府へ御掛合置有之度、此段回答旁申進以也。

七年五月十一日

租稅權助 星

亨

租稅頭松方正義殿

記

一、築地波止場所

一、同所改所

但七、地所建物共。

一、同所改所付水主并人足溜所

右同斷。

一、南品川尋問所

右同斷。

右四區。

明治七年五月二日

東京稅關之儀ニ付上申

橫 濱 稅 關

右勘考仕以處、管轄を異し居以、毎事煩勞而已、往復之際事情枝梧之事ナキヲ難保、到底稅密輸之懸念も不少以間、當寮ハ御請取相成神戶稅

帝都時代ノ港灣



關より大坂税關を管轄罷在如く、横濱税關に於る當分兼務爲致し、體裁同一に歸し、物品運輸之取締相立可然と存し、條上申之通御決判相成度、仍る東京府并税關に御達案を併る相窺申し。

東京府

各開港場並開市場稅務、去ル辛未八月中當省所轄に歸し、以來、當分從前之通相心得居可申旨、其節相達置し、處今般其府管轄築地開市場稅關事務、自今租稅寮官員出張爲取扱し、間、同寮に引渡可申し。尤簿冊整頓之都合も可有之し、間、引渡日限之儀ヲ適宜取極可申出。此旨相達し事。

月 日

大藏少輔

横濱税關

築地開市場之儀ニ付、四百五十二號ヲ以上申之趣、別紙寫之通り、本日東京府に御達相成し、間、當分同關之事務其稅關に於る管轄致し、儀と相心得可申し。尤引渡期限ハ、同府より申出次第、尙相達可申し、間、其稅關より出張請取方處分可被致し。此旨相達し事。

月 日

租稅頭

東京税關之儀ニ付上申

横濱税關

東京開市場稅關之儀ニ付、過日出寮之砌御面談ニ及し、通、尙熟慮し、處、密商脱稅無之哉之懸念も有之、且管轄を異しし、ハ、事務扱振も同一ニ難保、加之、每事東京府へ打合し、様こゝるハ、彼方ニ於るも冗手ニ可有之、旁以海關之一部ニ有之し、得て、御寮に御請取ニ相成し、方可然義と存し、就るハ本關より懸隔之地こゝるも無之し、故、本關にて統轄致し、得て、事務も同一轍ニ歸着可致、且、彼是幾許之手數ヲ省キ、却る取締方行届可申哉ニ存し、因テ至急前議御評決相成し、様致度、此段上申し及し也。

七年四月廿九日

租稅權助 星 亨

租稅頭松方正義殿

御府管轄築地開市場稅關之事務、今般當寮に引渡し、様過日大藏少輔に被相達し、ニ付、ハ、稅關之事務引分方等之儀ニ付、前以實地ニ就キ御打合被成度旨、昨朝森大屬ヲ以具述之趣承知致し。右ハ明九日當寮官員築地稅關出張爲致し、間、可然御打合有之度、此段申入置し也。



五月八日

松方 租 稅 頭

大久保東京府知事殿

大藏省文書

七年<sup>○明</sup>五月十三日、横濱稅關ヲシテ東京築地稅關並ニ品川尋問所ノ事務

ヲ管轄セシム。

大藏省沿革略志

國內廻漕規

則制定

十一月十日<sup>○明治七年(紀元二五三四年)</sup>。國內廻漕規則ヲ定メ、港内取締規則ヲ廢

ス。<sup>○法令類纂。</sup>

國內廻漕規

則制定事蹟

國內廻漕規則制定 法令類纂云フ、

第五式拾三號

明治六年<sup>月</sup>第八號ヲ以テ港内取締規則相達置<sup>ハ</sup>處、今般御國內廻漕規則別紙ノ通相定、來明治八年二月一日ヨリ施行<sup>ハ</sup>條、右港内取締規則ハ、同月同日ヨリ令廢止<sup>ハ</sup>。此旨布告<sup>ハ</sup>事。

明治七年十一月十日

太政大臣 三 條 實 美

(別紙)

國內廻漕規則

第一條 <sup>商船甲港ヨリ乙港へ向ケ出帆ノ事。</sup>

凡ソ諸商船日本形西洋形ニ不拘、甲港<sup>定繫</sup>ヨリ乙港へ出帆スル時ハ、甲港ノ船改所或ハ其筋ノ役所へ、第一號甲ノ書式ニ從テ記シタル願書二通ニ、第二號ノ積荷目錄ヲ添テ差出スヘシ。改所或ハ役所ニ於テ、其積荷目錄ニハ改濟ノ檢印ヲ捺シ願書へハ第一號乙ノ書式ニ從テ與書シ、一通ハ役所ニ留メ置、一通ハ船長へ下渡シ、出帆可差許事。

但、甲港ノ船乙港へ入津シ、其積荷ヲ揚陸シ、更ニ他ノ物品ヲ積込丙港へ出帆シ、又ハ甲港ニ歸帆スルモ、本文同様ノ手續タルヘシ。尤定繫港ニ限り碇泊稅相納ルニ不及事。

第二條 <sup>商船甲港ヨリ乙港へ入津ノ事。</sup>

凡ソ諸商船甲港ヨリ乙港へ入津セバ、着後二十四時間ニ其港船改所或ハ其筋ノ役所へ第三號甲ノ書式ニ從テ記シタル願書二通ニ、船免狀或ハ船稅鑑札甲港ノ出帆免狀積荷目錄ヲ添へ差出スヘシ。改所或ハ役所ニ於テハ、第三號乙ノ書式ニ從テ記シタル入港免狀下渡シ、荷物揚陸可差許事。

第三條 <sup>商船免狀船稅鑑札等所持セザル者、及ヒ入港届等閑ニスル者科料ノ事。</sup>

船免狀或ハ船稅鑑札并ニ出帆甲港ノ免狀無之者、或ハ入港届等閑ニ致シ

帝都時代ノ港灣



者等有之ニ於テハ、船ノ大小ニ從ヒ、船稅規則ノ割ヲ以テ、第五條ニ照準シ科料可申付事。

第四條 商船他港ヨリ定繫港へ歸着ノ事。

凡ソ諸商船乙港ヨリ甲港定繫港ニ歸着セハ、總テ第二條ニ準スヘシ。但積荷無之節ハ、第四號ノ書式ニ從テ記シタル届書ニ、乙港ノ免狀及ヒ船免狀船稅鑑札ヲ差出スヘシ。尤入港免狀ハ下ケ渡サ、ル事。

第五條 免狀手數料ノ事。

凡ソ諸商船出帆入港共免狀相渡シ節ハ、船ノ大小ニ拘ハラズ、免狀一通ニ付手數料トシテ貳錢宛可相納事。

第六條 碇泊料ノ事。

定繫船ヲ除クノ外、諸商船港内へ碇泊セハ、第十五條ノ通り碇泊稅可相納事。但、五十石未滿ノ商船小廻船舳漁船ノ類ハ、碇泊稅ヲ納ムルニ不及ト雖モ、無證印ノ船有之時ハ、本年第二十一號布告ニ照準處分スヘキ事。

第七條 商船風潮不順ニ依リ入港ノ事。

凡ソ諸商船風潮ノ不順ニ依リ一時無餘儀入港シ、二十四時間ニ出帆スルモ

ノハ、届書ヲ差出シ、碇泊稅ヲ納ムルニ不及ト雖モ、右時間以上碇泊スルモノハ、其港船改所或ハ其筋ノ役所へ、第五號甲ノ書式ニ從テ記シタル届書ヲ差出シ、且碇泊稅ヲ納ムヘシ。改所或ハ役所ニ於テハ、第五號乙ノ書式ニ從テ記シタル免狀可下渡事。

第八條 商船避難ノタメ碇泊シ積荷物賣買ノ事。

諸商船一時避難ノタメ碇泊シ、其船ノ都合ニ依リ、其港ニ於テ積荷揚陸賣拂ヒシ節ハ、通常入津ノ手續ヲ以テ、第六號甲ノ書式ニ從テ記シタル願書、船稅鑑札出帆免狀積荷目錄トヲ船改所或ハ其筋役所へ差出スヘシ。改所或ハ役所ニ於テハ、第六號乙ノ書式ニ從ヒ第二條ノ通り免狀可下渡事。但、買入積込シ節ハ第一條ノ通タルヘキ事。

第九條 出入港相定メテ郵船ノ類手數料并ニ碇泊稅ノ事。

郵船ノ類甲乙兩港ノ間平生往來相定シ、分ノ如クハ、東京ト横濱、大坂ト神戸ト出ノ毎度手數料碇泊稅取立シテハ、時間相費、營業ノ差支ニモ可相成ニ付、右等ノ分ハ、願ノ上一ヶ月分出入ノ度數ヲ計リ、手數料碇泊稅共碇泊稅ハ定繫港ヲ除クノ外。都テ規則ノ割合半方宛半方前納ニ及ハス。取纏、毎月初旬中ヲ限り、第七號甲



ノ書式ニ從テ記シタル手形ヲ以テ一時上納スルニ於テハ、第七號乙ノ書式ニ從テ記シタル免狀可下渡事。

第十條 港則違犯ノ事。

凡ソ諸商船出入共、開港場ハ勿論其他ノ港内ニ於テハ、積荷或ハ荷足品ヲ揚卸スル時ハ、波戶場ノ順序等、總テ其港ニ於テ定メタル規則ニ從フヘシ。若シ之ヲ犯スモノハ第十五條ニ照準シ科料可申付事。

第十一條 通船無之土地新規堀割口錢取立ノ事。

從前通船無之土地ヲ願ノ上新タニ堀割運輸ノ便ヲ開キ以テ、堀割入費支消ノタメ、年季ヲ定メ通船ヨリ口錢等取立以類ハ、此規則ノ例ニアラサル事。

第十二條 出帆願書其他諸書式ノ事。

出帆願書其他ノ諸書式ハ、雛形ノ通各府縣ニ於テ黒字ノ通上梓、朱字ノ分其時々填書以様致シ置キ、船改役所或ハ其筋役所ニ於テ可下渡事。

第十三條 輸出入品届書ノ事。

出入港品ハ、品名箇數尺度斤量元價并ニ其仕向ケ場仕出場等、精細第八第九號書式ノ通記載致シ、月末毎ニ各府縣ヨリ租稅寮へ可差出事。

第十四條 各港出入船舶届書ノ事。

各港出入ノ船舶ハ、管轄船舶形船名積高并ニ仕出場入港日仕向場出港日等精細第十號書式ノ通記載致シ、各府縣ヨリ租稅寮へ可差出事。

第十五條

碇泊稅并ニ諸科料等ハ、都テ左ノ算則ニ照準シ可取立事。

碇泊稅

五十拾石以上 每拾石 壹錢

貳百石迄 每拾石 七厘五毛

五百壹石以上 每拾石 五厘

船免狀船稅鑑札所持セサル者科料

日本形船 每百石 金五圓

西洋形汽船 每百噸 金七十五圓

西洋形帆走船 每百噸 金五拾圓

出帆免狀所持セサル者科料

日本形船 每百石 金四圓

帝都時代ノ港灣



西洋形汽船 每百噸 金六十圓。  
西洋形帆走船 每百噸 金四十圓。

入港届等閑ニスル者科料

日本形船 每百石 金三圓。

西洋形汽船 每百噸 金四十五圓。

西洋形帆走船 每百噸 金三十圓。

積荷無之船歸港届等閑ニスル者科料

日本形船 每百石 金貳圓。

西洋形汽船 每百噸 金三拾圓。

西洋形帆走船 每百噸 金貳拾圓。

港則違犯ノ者科料

日本形船 每百石 金壹圓。

西洋形汽船 每百噸 金拾五圓。

西洋形帆走船 每百噸 金拾圓。

但、西洋形船噸數ヲ以テ唱ヘル分、碇泊税ニ限リ、壹噸ハ我六石七斗貳升ノ

割ヲ以テ石ニ直シ可取立事。

第十六條

五拾石素滿ノ小船ハ、碇泊税手数料等相納ルニ不及事。〇一號ヨリ九號ニ至ル書式類略ス。

〔附記〕 海船取締

第廿九號

市在各區 區長、戶長

先般海船取締規則御布告相成以ニ付テハ、自今多摩川利根川中川之三ヶ所出入之船々免狀渡、并入港碇泊税收納共、來明治八年一月一日ヨリ左之ヶ所々ニ於テ戶長取扱以條、其旨相心得、各區無洩可相達事。

明治七年十二月 東京府知事 大久保 一翁

一、多摩川口 第七大區四小區扱所

一、利根川口 第十一大區六小區扱所

一、中川口 第十一大區三小區扱所

第四十四號

市在各區 區長、戶長



海船取締ノ儀ハ、從前多摩川利根川中川之口々へ取設ケ置、内場所換並品川宿及ヒ大森村へ新規取設ケ、大小船出帆免狀渡方、其他碇泊稅收納共、本月十五日ヨリ同所ニ於テ爲取扱ニ付、場所書相添、此旨更ニ相達候事。

明治八年十月五日 東京府知事 大久保 一翁

- 一、多摩川口 第七大區四小區 荏原郡羽田村
- 一、利根川口 第十一區六小區 葛飾郡下今井村
- 一、中川口 第十一區三小區 葛飾郡猿江町
- 一、品川宿 第七大區二小區 荏原郡品川宿
- 一、大森村 第七大區三小區 同郡大森村

東京積酒荷

法令類纂

維新後ニ於ケル東京積酒荷ニ關シ、灘酒沿革誌記ス所、左ノ如シ。

樽船ノ廢絶 往時攝泉十二郷ニ於テ江戸積ニ專用セル樽船ハ、明治七八年彙ヨリ漸ク衰微シ、十三四年交ニ至リ、遂ニ其ノ迹ヲ絶テリ。初メ明治四年始メテ東京積ニ汽船ヲ用ウルノ議アルヤ、樽廻船問屋大ニ驚キ、書ヲ十二郷酒造大行事ニ移シ、哀訴スル所アリ。曰、私共儀、往古ヨリ十二郷御酒

造家様之御愛憐御引立ヲ以、今日迄モ無滯渡世相續仕候段、全御一統様之御最眞御厚恩ト奉存上候テ、難有萬喜罷在候。然處此度蒸汽船之御尊奉承知、誠ニ以仰天致候。因テ不取敢嘆願奉申上候。何卒是迄之通、厚ク水魚之御憐愍ヲ以、不相變樽船積方被成下候ハ、重々難有仕合ニ奉存候。尤モ是迄不行届ニテ、思召ニ不相叶義等モ有之候ハ、其廉々仰付被成下候ハ、私共ハ不申及、船主方へモ篤ト申聞、如何様共取計方モ可仕候間、何分ニモ此度之處私共必至之場合、何卒御賢察被成下、不相變是迄之通樽船ヲ以積方被成下候ハ、無此上御厚恩一統難有仕合ニ奉存候就テハ、以書付此段歎願奉申上候ト。未タ幾ハクナラス、舊例ヲ以テ十二郷相會シ、樽船運賃ヲ協定セリ。會樽船ノ弊多キヲ説キ、汽船ヲ以テ之ニ代ント主張スルモノアリ。池田伊丹下灘灘東組等首トシテ之ニ應シ、西宮今津灘中組西組等ハ、皆以テ不可ト爲セリ。曰ク、汽船未タ多カラス、若シ之カ爲ニ樽船ノ反抗スル所トナラハ、必ス運輸ヲ阻害スルニ至ラン。且夫汽船ハ火力ヲ用キ、而シテ又石炭ノ臭氣多シ、恐クハ變味腐敗ノ媒介タラント。兩々對峙肯テ相下ラス。遂ニ各郷其見ル所ヲ以テ事ニ從フニ至レリ。問屋乃チ書ヲ寄セテ曰ク、當



秋船手運賃御取極一條より、御郷々御人氣不一致、無據蒸汽樽船兩様勝手御積方ニ相成、數年來合併御商業都る嚴重御取締向相立、並に樽廻船連も、夫々御同様之儀にて、當方にては其源ニ基き、規則相立て、累代首尾克渡世仕來候處、今般御積方之儀より、萬々一十二郷別ニ御積込相成候様にては、差當り御目前職始新酒番船之發行も空敷可相成哉、年越不容易、御丹誠を以御醸造之銘酒、人力を盡し、萬里蒼波を凌ぎ、當地へ入津仕ても、御郷別々にては、商内方威勢を失ひ、人氣自然に衰へ、何事も吉先相鈍り可申歟。斯くては年中、相場の不味とも可相成基、且は例年殘駄數御取調御文通被下候儀は、東西商用都合克致度故と奉存候。然るに御積方之義より、萬一御郷々格別之御取計ニ相成候ては、此之義も詮なき事と相成、商内之駈引も自然不活潑ニ終り可申歟。左候時は、東西共ニ重々不益、此等處乍憚篤と御勘辨之上、御積方不同無之様規則被爲立候へは、數百年之御間柄、御兩平に不相成儀は無之筈、何卒早々御和熟ニ御積方奉希上候。右は於當地も、一同心配之餘、集會席より總文を以得貴意度、如斯候下。是ニ於テ十二郷復々相會シ、議ヲ決シ、其ノ汽船積ハ豫メ駄數ヲ定、其五分ハ伊丹池田灘東組下灘兵

庫ノ五郷ヨリ、其五分ハ五郷以外ノ各郷ヨリ積ミ入レ、而シテ其汽船積ハ必ス十二郷連署ノ小送狀ヲ添附スヘキ事トシ之ヲ問屋ニ報セリ。曰ク「蒸汽積一條、漸ク和談相整ヒ、爾後蒸汽積之儀ハ、何郷ヨリ積込候トモ、十二郷連判小送狀無之モノ入津候節ハ、酒味荷分ケ陸上ケ藏詰被成下候上、急速御通達可被下候。然ル時ハ、於當地集談之上、貴答可申上候下。是ヨリ先東京市場ノ形勢ヲ察シ、積留モシクハ割積ヲ約スルニ當リ、往々機乘スヘシト爲シ、密ニ汽船ニ托シ之ヲ輸出シ、以テ害ヲ各郷ニ及ホスモノアリ。蓋シ密輸ノ弊ハ、樽船ニ於テモ亦絶無ナラスト雖、其ノ酒荷廻漕ヲ以テ專ト爲スヲ以テ、毫モ各郷ノ誓約ヲ顧サル汽船ノ甚キカ如クナラス。故ニ公然汽船積ヲ約スルト俱ニ、特ニ十二郷連署小送狀ノ制ヲ立テ、以テ豫メ之ニ備フルナリ。此ノ秋會海上風怒リ波激シ、樽船纜ヲ解ク能ハス。而シテ其ノ既ニ出帆セルモノハ、皆難ヲ志摩ノ的矢、伊豆ノ大島ニ避ケ、畏縮復々出ツル能ハサルモノ月餘、而シテ汽船ノ東西ニ航スルモノ自若タリ。西宮郷ノ酒家乃チ密ニ相謀リ、人ヲ大坂ニ派シ、汽船ヲ傭ヒ、深夜酒荷ヲ搭載シ、以テ之ヲ東京ニ輸セリ。既ニシテ事漏ル。各郷大ニ愠リ、相聯合シテ其ノ背約ヲ責メ、



且書ヲ問屋ニ移シテ曰、當春以來汽船積之義甚以及混雜候ニ付、諸郷打寄り、度々談判ヲ遂ケ、取締方種々規定罷在候處、西宮郷ニ於テ諸郷之約定ニ背キ、是迄積合不及、蒸汽船ヲ臨時至急ニ借入レ、諸郷へ熟談不致、一郷限之荷物取集メ積合、今般内々ニテ及出湊候義如何之譯柄ニ候哉、甚以難得其意外郷々打寄目下集談中ニ候、就テハ右郷之義ハ、古來ヨリ兩積所之廉モ有之候へ共、兼テ申入レ置候通、十二郷連判送狀無之分ハ、於御地請拂不相成筈ニ候條、商業不取締出來不申様、篤ト御勘辨有之、諸郷ヨリ睨ト西宮郷ニ及掛合、引合結了致候迄ハ、勿論右蒸汽積西宮郷荷物ハ御藏詰可相成儀トハ奉存候へ共、不取敢當今之成行、有體之儘席中ヨリ御文談申上候ト。又當時ノ文書ニ、西宮郷蒸汽積入一件、大論判ニ相成候へ共、何分積入人手強申方ニテ、和談難行屆場合ニ相成、無據其向トハ積方一同ヨリ遠慮可仕談事ニ相成候間、樽廻船問屋へモ其旨申渡候ト見ユ。而シテ西宮ノ酒家申合規定ニハ、則チ曰ク、此度蒸汽積一件ニ付、彼是混雜ニ及ヒ、諸郷手ヲ引合ヒ、當郷積合相除之段申合セ候ニ付、無據當今之形勢無致方、爰所熟談行屆候迄ハ、當郷丈ケ別仕建積方申合候ニ付、何事ニ不寄御一同様ニ相順シ、決る

違背申間敷候。何分開化之御時節、柄商業專ラ手廣ニ渡世相成候様被成下度、依テ承知連判如件ト。是ニ於テ所謂東京積益汽船ヲ用キント欲ス。會十一郷連署問屋ニ迫リ、汽船積酒荷ノ受拂ヲ拒絶セシムト聞キ、人ヲ東京ニ派シ、以テ之ヲ協商セシメリ。一書ニ其ノ事ヲ詳叙セリ。曰ク、西宮郷において、東京積酒荷物を斷然汽船に積みたるは、明治四年の秋の事にて、夫れを主張したるは何人なりしか詳かならねど、汽船備ひ入れの爲に大坂に出張せしは、酒造會社の行事を代理せる源中忠兵衛なりき。其の頃は樽船仲間の勢力頗る盛なりしかは、其の反抗を恐れ、同し西宮郷の荷主にてても多少汽船積に反對の向もありて、第一回の積み込みは六七八人位なりしか、それも夜中密に積み込み専ら秘密に取扱ひたれど、何處よりか其の事世間に漏れて評判高くなりしかは、他郷の荷主よりはソハ專斷なり不埒なりとて痛く攻撃せられたるも、第二回積込の時に西宮郷の荷にて前日反對の向も多分積み込みしかは、他郷の激昂は益甚しく、東京の問屋に汽船積の荷物は一切受拂ひすへからすと迫れりとの風聞ありて、事態いかにも穩ならずりしかは、源中氏は最もどかしく思ひて、直接に問屋に交渉せん



とて、自汽船の上乗をなして出帆したるか、其時源中氏萬一此の荷物を問屋が受け拂ひせすとならば、生きて再び積荷諸君に見えずと誓ひたりと云へば、唯此の一事にて當時其の争ひの激烈なりしを想見するに足らん。第二回の汽船積は、かくの如き事情のもとに解纜せしも、問屋の交渉は案外安すらかに行届き、無事に其の受け拂ひをなしたりしかば、是れより汽船積ニおいおい多くなり行きぬ。然し當時の汽船は概ね小形なるか上に、船の數も僅に三四隻にして、荒荷の積み合ひも多き事とて、汽船のみには依りがたく、是非とも一面は樽廻船の力を假らざるを得ず。しかるに樽船はたとへ荷主の所持たりとも自儘に使用するを得ずして、廻船問屋に屬する慣例なれば一朝その怒る所とならば忽ち運輸の便を阻害するの恐れあれば、何れの荷主も汽船積は極めて秘密にして、ひたすら其の感情を害はざるを勉めたり。此レ蓋シ其ノ實況ナリ。然レトモ未タ幾ハクナラス其ノ火氣酒ヲ害スルノ恐レナキヲ悟リ、且其ノ迅速ニシテ發着時ヲ過ラスシテ海上風波ノ虞少キヲ知り、汽船積日ニ益盛ナリ。六年十二月樽船仲間請フテ曰ク、七月下旬之頃、八朔後之運賃御取極之節、格別之御利害ニ

付、乍難澁仰ニ隨ヒ運賃引下ケ辛抱仕候處、近來酒荷物無數折柄承リ候へハ、蒸汽船運賃多分御増シ有之、駄數モ多分御積方ニ相成候趣、迷惑至極ニ奉存候。尤モ近來糧米ノミハ少々下直ニ相成候へ共、其外船手用品ハ下直ト申譯ニ至リ兼、左候へハ樽廻船倍々相續難出來、難澁致候間、御取極之運賃ヨリ何卒格別之御勘辨ヲ以テ、十駄ニ付金一步ツ、御増方ニ預度、以書附御頼申上候。ト酒家肯テ應セス。蓋シ當時汽船ノ速力ハ未タ遅鈍タルヲ免レス、然レトモ所謂東京積ハ大略二晝夜若クハ、三晝夜ヲ以テ達シ、且海難ノ虞殆ト絶無ナリ、之レヲ樽船ノ動モスレハ十三四日ヨリ以テ二十日内外ニ及ヒ、加フルニ風浪少シク起レハ輒チ覆没ヲ免レス、而シテ其ノ損失ハ悉ク荷主ノ負擔ニ屬シ、猶ホ合力ト稱シ金ヲ醸シ船主ヲ補助スル等ノ慣例アルモノニ視ルニ、汽船ノ酒家ニ益スルモノ頗ル多シ。是ニ於テ皆以爲ク、苟モ世運ニ應セント欲セハ、汽船ニ頼ラサルヘカラスト、遂ニ樽船ノ反抗ヲ以テ憂フルニ足ラスト爲スナリ。樽船仲間果シテ大ニ怒リ、檣ヲ飛ハシ、相會シ、議シテ曰ク、方今汽船ノ運賃ハ増シテ十駄八兩二步ト爲セリ、而シテ樽船ハ則僅ニ四兩三步ノミ、乃チ肯テ一步ノ増額ヲ容レス、且



數百年來ノ舊誼ヲ忘レ、肯テ樽船ノ困苦ヲ顧ス、益盛ニ汽船ヲ用キルハ何ソヤ、苟モ汽船積ヲ爲セル酒家ノ積荷ハ、爾後斷シテ拒絕シ、且目下施行セラル積留ノ如キ、我ニ於テ其ノ不利益ヲ忍ヒ、以テ酒家ノ約束ニ從フヲ須キス、任意搭載直ニ出帆シテ可ナリト。因リテ約ヲ定メテ曰ク、先般酒家ヨリ積止被申渡候處、酒荷物積方延引ニ付、忽金融ニモ相拘ハリ、甚タ廻船商法ニ差支候。依之今般一同集談之上、勝手積開可致事。曰ク、今般積開ノ儀、於廻船仲間決定致候儀ニ付、萬一酒家行事衆ヨリ何レノ船へ彼是差支被申立候共、其ノ砌ハ相互ニ實意ヲ以致□□合セ、速ニ出帆爲致可申事。曰ク、運賃之儀ハ、十二郷一同取極ニ相成候處、今般更ニ廢止、已後廻船集談之上、至當之運賃相定、積荷可致候。尤定之運賃ヨリ下直ニテハ決る積方致間敷候事ト。先是西宮郷トノ爭ハ、既ニ平和ニ歸セル如シ。今其ノ何等ノ條件ヲ以テセルヲ詳セスト雖、五年十月ノ間屋總狀ニ、蒸汽船御積方一條ヨリ十二郷不一方御混雜ニ付、既ニ御一郷都テ別振御規則相立、御雙方ヨリ御文談ニ付、當方一統驚入、心配之餘、先日總文ヲ以御和熟之程願上候處、折柄大坂酒造御用係石虎之介殿難捨置思召、早速御雙方へ御説得、諸御郷御得心ニ至

リ、今回今津郷ニ於テ諸御郷御集合御披ヒ行届キ、從來之通御親和有之、向後取締規則之義ハ、追テ御雙方御熟談ヲ以、萬端御治定之上、不遠可被仰通段、委細拜承、大慶至極、雀躍之至、誠ニ安心仕候。先ハ恐悅貴答申上度如此候ト見ユ。是ニ至テ各郷酒家西宮ニ會シ、樽仲間ノ行動ニ對シ協議セルモノ、如シ。當時ノ文書ニ、陳悉今般樽船仲間逆謀之企より、昨八日於西宮郷諸郷集會、百事取締之件、衆談致候處、方今之形勢、萬事改正、新法相立候儀、尤必要ニ可有之、因テ樽廻船事務相捨テ、蒸汽船ニテ郷別割積尤可然奉存候。尤モ即今兵庫神戸大坂汽船問屋相招キ、談判中ニ有之候。何レ歸郷之上、萬端可申上候得共、不取敢致報知候也ト見エ、而シテ其結局ヲ詳ニセス。然レトモ當時恰モ三川商會ニ於テ、其ノ汽船回漕業ヲ擴張シ、三菱商會ト改稱シ、汽船ノ數大ニ増加セルヲ以テ、樽船仲間ノ策スル所ハ其ノ効ヲ奏スルニ及ハス。遂ニ酒家ノ爲ニ壓倒セラル、カ如シ。八年二月樽船仲間即チ廻船問屋及船主沖船頭ヨリ今津西宮二郷ニ提出セルモノヲ見ルニ、即左ノ如シ。

一、今般御荷物積方御郷別ニ相成候ニ就テハ、御兩郷御規則急度相守リ



可申、依テ差入確證左ニ、

一、銘々共船手沖合取締之義ハ、正路大切ニ可仕候。萬一心得違、船玉乗組之内不正路相釀シ候者有之時ハ、如何様御差當候共、一言ノ申分無御座候。但シ萬一不正之義相釀候船有之候ハ、其時宜ニ應シ、御差當可申候。尤俱吟味義ニ付、不正之廉慥ニ申出テ候モノニハ、金何程褒美被下候事。

一、當月ヨリ積切迄運賃之儀ハ、酒味十駄ニ付金五圓一錢二厘五毛、内荷廻料ハ御酒家ヨリ直ニ被遣度候。

右之通運賃金御定メ之上ハ、聊増運賃餘分等決シテ乞申間敷候。萬一御規則相背候者有之候ハ、如何様御處置被成候共、一言之申分無御座候。

一、建毎ニ聊之手合タリ共當前積入之事。

一、登船之砌、御會社へ先後相届可申事。尤手板持參之上、船附手合承リ可申事。

大船之向ハ樽千七百駄限リ、餘ハ何□荷物ニテ荷都合可□□□□□□□□□□

一、萬一難事之節ハ、其時宜ニヨリ御指圖請可申事。但シ實天災ニテ捨リ

荷物五十駄以下ハ、運賃金皆拂、登船次第仕送免シ罰金トシテ船玉ヨリ金百圓出金可致事。

一、同上百駄以下ハ、前同斷爲罰金、船玉ヨリ金二百圓出金可致事。

一、百五十駄以下ハ、前同斷爲罰金、三百圓出金可致事。但シ百五十駄以上ハ、船中心付ナシ。

一、二百駄ハ、四百圓出金可致事。

一、二百五十駄ハ、五百圓出金可致事。

一、三百駄以上捨リ荷物有之節、事實取調之運賃金皆拂ナシ□□集評之上其時宜ニ應シ罰金可申付事。

一、五百駄以上ハ、運賃皆拂ナシ、罰金ノ義ハ集評之上取計之事。尤右罰金之義ハ、何レモ酒荷物總積入高一船分之事。

右之通此度改正規則御差定之上ハ、御荷物等大切ニ取扱可申、勿論不正路之取締決テ致間敷、尤前書御確定御取極ニ相成候得共、事天災ニ相違無之候節ハ、其時宜ニ應シ、御集評之上御取計被成候事。

右之件々御確定相成候上ハ、急度相守可申候。自然船玉沖合乗組之内、心



得違之者有之、一ヶ條ニテモ相背候者有之候ハ、如何之御取計相成候  
テモ、一言之申分無御座候。依テ連判如件。

而シテ八月ノ文書ニ、

銘々共渡世之儀、樽廻船組合トシテ年來御懇命ヲ以テ積方被成下、以御  
蔭運送營業罷在候段、難有仕合奉存候。然ル處、今般組合解散ニ相成、右様  
ニテハ御大切之荷物積請不都合ニ付、此度銘々共申合、集議ノ上、仲間船  
建規定左ニ、

仲間取締之義、人撰之上、沖合行事申付嚴重取締可致事。

一、仕建之儀ハ、御出荷物見込餘ハ、諸品買積仕リ、成丈早々出帆可仕事。

一、積荷物大切取扱可申ハ、勿論航海筋丹誠專一ニ乘方可致事。

一、運賃ノ義、其時ニ應シ成丈引下ケ仕リ、毎月取極メ、前以テ申出、御協議  
可申候事。

ト云ヘリ。蓋シ汽船増加ト共ニ、樽船用漸ク廢シ、遂ニ其ノ組合ヲ維持スル  
能ハサルニ至リシナラン。然レトモ當時仍ホ運送ノ一機關トシテ其業ヲ  
營ムモノ尠カラス。十年西南亂興ルニ及ヒ、汽船多ク官ノ爲ニ借ラレ、而テ

樽船モ亦衰微ノ餘頼ニ其數ヲ減シ、獨力以テ所謂東京積ヲ辨スルニ足テ  
ス。五郷酒家大ニ之ヲ憂ヒ、三菱商會ニ謀リ、一回ヲ限リ爾時最大ト稱セラ  
レタル汽船熊本丸ヲ借り、纔ニ其滞積セル酒荷ヲ東京ニ輸シ、以テ一時ヲ  
彌縫シ、勢此ノ如クナルヲ以、樽船モ亦頗ル其勢力ヲ挽回セリ。然レトモ樽  
船ノ不便ハ酒家ノ認ムル所ナリ。而シテ汽船ニ於テハ常ニ運賃不廉ニ困  
メリ。則チ四年以來、樽船ノ運賃大略四圓ヨリ六圓ニ至リ、汽船ハ八圓ヨリ  
以上十圓ノ間ヲ往來シ、此ニ至テ十五圓、樽船十一圓ニ騰上セリ。而テ運輸  
猶意ノ如クナル能ハス。酒家ノ之ヲ苦シム久シ。其後西洋形帆走船起ルニ  
及ヒ、樽船ノ用漸ク廢シ、遂ニ其迹ヲ絶ツト云フ。○中略

附明治四年以還七年ニ至ル四年間ニ於ケル樽船ノ海難ヲ檢スルニ、總テ  
五回アリ。即チ其第一回ハ、四年四月十八日兵庫沖ニ於テ酒千四百十一駄  
片馬ヲ失ヒ、第二回ハ、其六月二十九日志州安乘沖ニ於テ酒味淋ヲ合シ二  
千九百四十四樽ヲ失フ。皆風浪ニ遭逢覆没セルナリ。第三回ハ、六年四月豆  
洲沖ニ於テ、第四回ハ遠州ニ於テ並ニ風浪ノ爲ニ積荷ノ過半ヲ投棄シ、纔  
ニ覆没ヲ免レタリ。第五回ハ、七年十月三十一日豆州長津呂沖ニ於テ火ヲ



失シ、船體ト俱ニ沈没セル酒味淋ノ代價ハ二千六百餘圓ニ及ヘリト云フ。而シテ其ノ損害ハ皆荷主ニ屬シ、且海難毎ニ積荷ノ多寡ニ應シ、金ヲ釀シ以テ船主ヲ補助セリ。亦以テ當時海運ノ情況ヲ想見スヘキナリ。

帆走船及汽船 酒荷東京積に、西洋形帆走船を用ゐたるは明治八年西宮郷の淺尾市郎右衛門氏が購入したる貫効丸を嚆矢とす。當時汽船積の途既に開け、人皆其の利を認め、運賃の不廉なるを忍ひて積み入れをなしたるも、船の數未だ多からされは、半は仍ほ樽船を使用せり。淺尾氏は蓋し此の不便不利を救ふに意ありしならんも、時機未だ熟せざりしにや、積み入れを爲すもの少なく、久しからずして失敗せしか、其の後十年西南の亂おこるに及び、汽船不足して東京積に非常の困難を極めたりしかは、十二年ニ至り今津郷の千足利右衛門氏ふたゝひ海平丸といへる西洋形帆走船を用ゐ、つゝいて西宮郷の辰馬吉左衛門氏も大平丸といへる帆走船を用ゐて、東京積を爲せしに、船足敢て汽船に譲らず、海上風浪の難にも樽船の如き危険なくして、運賃は汽船の如く高價ならされは、積み入れを爲せ

るもの漸く多く、我も我もと帆走船を造り、又は購入し、期年ならずして數十隻の多きニ及び、樽船を壓倒し、東京積は一時全く帆走船の専有なる如き觀をなせりト。此レ一書載スル所ニシテ、蓋シ當時ノ實況ナリ。既ニシテ汽船ノ數漸ク多キヲ加ヘ、十四年ニ至リ共同運輸會社起リ、三菱商會ト相拮抗セリ。然レトモ三菱商會ハ、既ニ久シク海運ノ業ニ從事セルヲ以テ、酒荷ノ回漕ニ於テモ亦遽ニ之ヲ屈スル能ハス。乃チ運賃ヲ遞減シ、又別ニ方策ヲ立テ、以テ荷主ヲ籠絡シ、必ス其ノ霸權ヲ手裏ニ收メント期セリ。三菱商會之ヲ覺リ、荷主ト謀リ酒荷一手積ヲ約シ、其報償トシテ運賃ノ割戻ヲ約セリ。共同運輸會社遂ニ争フ能ハス。十七年十月三菱商會ニ合同シ日本郵船會社ヲ創立セリ。是ニ於テ汽船積益盛行シ、帆走船ノ用モ亦自ラ廢セリ。是ヨリ先三菱商會ノ一手積ヲ約シテヨリ、時ニ擅恣ノ嫌ナキニ非ス。當時問屋ノ總狀ニ、昨十五年十月九日入港三菱會社扱汽船和歌浦丸舢舨船淺艸丸難事之件、兼テ御報道申上置候通、右難事ニ係ル辨償金請求方、同社ニ就キ、或ハ慣例ヲ解説シ、或ハ理非ヲ辨難シ、百方力ヲ盡シ談候ヘ共、會社ニ於テハ毫モ顧ル所ナク、唯々社則ヲ主張シ、水魚ノ間柄ナル御荷主ト回漕



商トノ情誼ヲ忘却シ、不當薄情之答振リ、實ニ一驚ヲ喫スルノ外無之候。其所以ハ、單ニ損金辨償ノ請求ニ應セサルノミナラス、右難事之際、處々ニ漂着セル流樽取纏メ方ニ奔走シタル弊社員之諸入費金二百二十餘圓ハ、荷高割當テ出金相成度杯ト言語ニ絶セル申分ニテ、遺憾之極ニ候。右ニ付當府ニ於テ有名ナル訴訟鑑定所則チ修進社ニ就キ、巨細打明ケ相談致候處、辨償金請求ノ訴ハ不相立ト鑑定相成候。誠ニ乍殘念最早詮方無之、該難事之際ニ生シタル不足、其外庫辨共、悉皆御荷主ノ御損失ト御承知被下度、此段乍延引申上候。猶又三菱會社荷物引換證切符裏面ニ記載有之約則ノ明文ヲ見ルニ、充分勝手ナル事ニ付、社則ニ當ル辨金請求之權ハ一切無之候間、今後同社扱ノ船舶へ御貨物御積入レ相成時ハ、確乎ト約定御取極之上御積ミ込相成度、左モ無之候テハ、好マサル事ニ候へ共、將來難事等有之候節ハ、御貨主方ノ御損害不尠、又當組合ニ於テモ煩多ナル手數ヲ要スルノミナラス、隨テ若干之入費ヲ要シ候間、篤御協議被成下、平素或ハ非常ノ際ト雖モ、引合向百般手輕ニ相届キ候船舶へ、御積入被下度、偏ニ奉願上候。前陳之次第ニ付、今後三菱會社扱之船舶へ御積入相成候御荷物、本船舫ヲ不

問、難事有之候節ハ、本件之通り悉皆御荷元之御損失ニ取計候條、此段併テ御照會申上置候。宜敷御承引可被成下候。ト見エ、又、客月二十九日貴地建汽船和歌浦丸帆走船數艘入港致候所、帆走船ハ舊ニ依リ迅速荷物取切候へ共、汽船ノ分ハ以テノ外不手配ニテ、漸ク一昨日六日頃ヨリ荷物水上着手致候位之始末ニ御座候。右故汽船積之御荷物ハ、足合ニ幾分歟之關係ヲ起シ、第一此節柄大切之販賣機會ヲ失ヒ候段、實ニ殘念之至ニ候。右之譯ニテ二十九日入港荷物之内汽船積ト帆走船積トノ代價ヲ比較推算致候ニ、汽船之分平均十圓内外ノ低下ト相成候。折角之御注意ヲ以テ汽船ニ御積入之御荷物、意外之御損失ヲ相醸シ、何共御氣毒千萬、唯痛嘆之外無之候。然シ是ハ全ク該船ノ都合ニ出テ、畢竟不親切之取扱ヨリ此影響ヲ來タシ候儀ニ付、以來三菱會社汽船ニ御積込之節ハ、別シテ御注意可被成下候。一概ニ汽船而已ヲ以テ早着ト思召候時ハ、前述之如、非常之御損失相生候間、篤ト得失實際御研究之上、御勘考相成度希望仕候。右ハ向後自他ノ損益ニ關シ、商業上難捨置要點ニ付、不顧忌憚有體ニ御通知申上候間、今後三菱會社汽船御積込之節ハ、當地着船水上取切之日限確ト御契約無之時ハ、前述之如



不都合ヲ生シ候テモ、之ヲ督促スルノ權當組ニ無之、看損失ヲ來タシ可申、此邊幾重ニモ御協議之上、御決定置被成下度候。ト見ユ。其後頗ル其ノ弊ヲ改メタルモノノ如シ。然レトモ猶ホ其ノ獨專ノ事業ニ屬スルヲ以テ、動モスレハ荷主ニ於テ慊焉タラサルモノナキニアラス。是ニ於テ東中西三郷酒家ノ間ニ於テ、神戸東京間定期航海汽船會社創立ノ議アリ。曰ク、今ヤ東京積ノ業年ヲ逐テ益盛ナリ、而シテ其運輸ハ方今之ヲ日本郵船會社ニ托スルノ外、復別途アルナシ、故ヲ以テ運賃其他往々不便ヲ感スルモノアリト雖、托ケテ郵船會社ノ主張ニ從ハサルヲ得ス。此ノ如他人ノ利益ノ爲ニ自ラ甘シテ犠牲トナルナリ。寧ロ酒家自ラ運漕ノ業ヲ親メ、以テ自ラ其ノ利ヲ占ムルニ若カス。因テ其ノ要スル資本及收支損益等ヲ精査セリ。而シテ未タ成立ニ及ハス。會攝津灘酒造業組合ヲ定メ、事務所ヲ創設シ、日本郵船會社ニ謀ルニ運賃特別割引ヲ以テシ、尋テ運賃ハ一年毎ニ之ヲ確定スヘキモノトセリ。其ノ事情ハ當時組長ヨリ提出セル照會書ニ詳ナリ。曰ク、「酒造家營業ノ改良發達ヲ謀ラムカ爲メ、灘酒造業組合規約ヲ締結候處、御社ニ於テモ此舉御贊成被成下、既ニ御一定相成候運賃割引ノ制限ヲ超エ、

特別割引之上、右改良費ニ充用方之儀ハ、昨年六月中御締約ニ相成、組合一統欣喜措カサル所ニ候。然ル處御了知之通、昨年ハ諸商業共、幾分カ衰勢回復ノ兆候相見エ候ヘ共、獨リ酒類ノミハ兎角不景氣勝ニテ、市況更ニ振ヒ不申、左ナキタニ頻年ノ不引合、不一方困難ヲ極メ居候折柄、不得已先ツ費用ヲ輕減シ、元價ヲ廉ナラシムル等、專ラ退守ノ策ヲ講シ居候ヘ共、一方ニ對シテハ、進ンテ本業ノ改良發達ヲ謀ラスシテハ不相成、就テハ酒荷運賃之儀ハ、既ニ特約モ有之、且聞ク所ニ依レハ、酒運賃ハ他ノ荷物運賃ヨリ十分御輕減之趣ニ付、此之上直下等ノ事ハ如何可有之トハ存候ヘ共、何分前述之次第ニ御座候間、事情御洞察之上、本年度造ハ新酒積出ヨリ積切時迄、十駄ニ付運賃金五圓トシ、又曩ニ本組合設立之舉ヲ御贊同相成、改良費トシテ特別割引被成下候次第モ有之ニ付、右五圓之内尙幾分改良費トシ御割引被成下候ハ、獨リ運賃輕減ノミナラス、積掛上大ニ便利ヲ得候儀ニ御座候。然ルニ今日之處ニテハ、酒荷輸出中、時ノ場合ニ依リテハ、運賃隨テ増ス習慣ニ相成居候間、掛引ノ方ノ不便不尠候間、右毎年運賃ノ定度ヲ極ムルニ於テハ、旁以テ便益ノ事ニ付、何卒本年儀ハ、前顯之通、今回更ニ御特



約方御聞入レ被成下度奉希望候。既ニ及御聞ニモ可有之、過般來有志者相謀リ、一ノ汽船會社ヲ設置シ、酒荷ノ廻漕ニ從事スル計畫有之候へ共、要スルニ運賃ヲ輕減スルノ熱心ニ出テタル義ニシテ、御社ノ汽船缺乏又ハ廻漕上ニ不便利アルニ因リ、右様ノ計畫有之儀ニテハ決シテ無之様相見込候。併シ右等ノ計畫アルカ爲ニ、今回特更運賃輕減之儀御掛合ニ及ヒ候譯ニハ無之候。此邊萬々御諒察之上、不日組合總會開設ノ筈ニテ、夫レ是レ都合モ有之候間、右特約ノ成否、至急御回報相成候様致度、此段及御掛合候也。ト。郵船會社其ノ請ヲ容レ酒荷取扱條款五條ヲ締結セリ。曰ク、日本郵船會社神戸支店ニ於テ、曩ニ灘酒造業組合設立ノ舉ヲ賛成シ、灘筋酒造ノ改良ヲ計リ、以テ各自ノ營業ヲ保護スル爲メ、既ニ定メアル運賃割引ノ制限ヲ超エ、特別割引ヲ爲シタル趣意ニ基キ、今回更ニ特約ヲ爲スヲ以テ、灘酒造業組合事務所ニ於テモ其精神ヲ酌量シ、酒荷積出上ニ取締ヲ爲スハ勿論、酒造上ノ改良發達ヲ圖ルコトヲ勉ムヘシ。曰ク、日本郵船會社神戸支店ニ於テハ、灘酒造業組合事務所地區内ヨリ輸送スル酒荷ノ運賃ハ、酒造組合各荷主一手積ノ廉ニ依リ、百駄ノ運賃ヲ五十五圓トシ、其内ヨリ特別五圓

ノ割引ヲ爲シ、又酒造改良ノ舉ヲ賛シ、百駄ニ付更ニ幾何ノ割引ヲ爲スヘシ。但シ味淋ノ荷物モ、本條ノ割合ニ準ス。曰ク、前條ノ次第ニ付、酒造業組合事務所ニ於テハ、其區内ヨリ輸出スル所ノ酒荷ハ、組合員ノ所有セル風帆船ヲ除クノ外ハ、必日本郵船會社ノ汽船ニ積入ヲナスヘシ。若シ他ノ汽船ニ積入ナス者アルトキハ、屹度之レカ取締ヲ爲スハ勿論、其者ニ對シテハ此特約ノ割引ヲ爲サ、ルヘシ。曰ク、特約割引金毎二ヶ月ニ日本郵船會社神戸支店ヨリ酒造業組合事務所へ引渡スヘシ。曰ク、此約定ハ二十年三月一日ヨリ二十一年二月二十八日マテトシ、滿期ニ至リ更ニ約定スル者トシ、組合事務所乃チ之ヲ組合員ニ報ス。且曰ク、過般來ヨリ有志者ニ於テ汽船會社設立ノ計畫有之候ニ付テハ、右汽船會社設立ノ上ハ、郵船會社ニ一手積ニモ相成兼候ニ付汽船會社ノ發起人ニ設立ノ如何ヲ問合候處、事ノ大小ニ拘ラス、是非設立可相成趣ニ御座候。左候時ハ、到底郵船會社ノ談判ハ、當方之望通りニモ行届兼候儀ニ御座候。乍併未タ何時頃設立ニ相成候哉モ難計キ會社ノ計畫ヲ俟チ、却テ郵船會社ノ運賃ヲ其儘ニ致置候儀ニテハ、一般組合員ノ不利益ナルハ言ヲ待タス、依テ尙ホ該社ニ種々談判ヲ



遂ケ候上、今回成セル定約ハ先ツ其儘ニ差置キ、兎角當分之内三月十日ヨリ十駄ニ付五圓五十錢ニ低減致シ、其内割戻シ金ハ従前之方法ヲ以テ組合員ニ割渡可申事ニ相成候。最早新酒積出シノ期節ニモ差向ヒ候間、不取敢此段及御報告候。尤汽船會社設立ノ模様ニ依リ、其時期ヲ見テ尙又十分ノ談判ニ及ヒ可申候。ト未タ幾ハクナラス、所謂汽船會社ハ資金拾五萬圓ヲ以成立シ、之ヲ株式會社灘興業會社ト稱シ、汽船攝州丸ヲ購ヒ、酒荷東京積ヲ營ミ、兼テ酒造業トセリ。灘酒造業組合事務所乃チ書ヲ郵船會社ニ寄セ、問フニ興業會社ハ全ク酒家ノ創立ニシテ、汽船ハ則チ其ノ有スル所ナレハ、酒荷取扱條款ニ所謂組合員ノ所有セル帆走船ト見做シ、敢テ割戻ノ特約ニ異同ヲ生セスト。既ニシテ興業會社ハ、其ノ酒造業ヲ廢シ、專ラ回漕ヲ營ミ、更ニ汽船攝海丸ヲ購入シ、盛ニ酒荷ヲ運送セリ。郵船會社乃チ酒荷運賃ヲ三等ニ分テ、類ニ依リ約ヲ結ヘリ。所謂三等ハ、通常荷主ニ對シテハ五圓、興業會社ニ依ルノ外悉ク郵船會社ニ托スル荷主ニ對シテハ四圓五十錢、舉テ之ヲ郵船會社ニ托スル荷主ニ對シテハ四圓四十錢トシ、荷主ノ欲スル所ニ從ヒ、豫メ之ヲ締結セリ。然レトモ灘酒造業組合ノ瓦解ト俱ニ

其ノ約自ラ解ケ、遂ニ復タ行ハレス。是ニ於テ時ニ郵船會社興業會社ノ間ニ於テ競争起リタルカ如シ。二十四年十月ノ文書ニ、汽船競争醸造家ノ不利益ト題シ、本月十日ノ中外商業新聞ニ左ノ如キ論評有之候。但シ其ノ運賃二圓五十錢ニ引下ト云ヘルハ、事實固ヨリ無根ニ候ヘ共、此節柄大ニ御參考ニ可相成ト奉存候ニ付、供貴覽候。扱テ其本文ハ、下酒ハ追々其積出ヲ増加スヘキ季節ニ際シタレハニヤ、日本郵船會社ニテハ從來航海セシメタルモノ、外ニ、尙ホ二艘ノ汽船ヲ加ヘ、專ラ清酒ヲ搭載スルコトニ勉メ、已ニ去月中ヨリ之ヲ實行スルニ至リ、其運賃ノ如キモ、從來十駄ニ付四圓ナリシヲ、更ニ一割引トシ三圓六十錢ニ引落シタレハ、豫テ灘地方ノ造酒家ニ於テ設立セシ興業會社ニ於テモ、之ニ對シテ忽チ運賃ヲ引下ケ三圓五十錢トナシタルヨリ、竟ニ競ノ色ヲ現ハシ、之カ爲ニ造酒家ハ郵船會社ノ方ヘ、灘造酒家ハ興業會社ノ方ヘ積載スルコトトナリシヨリ、茲ニ彌熱度ヲ増シ、兩社トモ二圓五拾錢迄引下ケタレハ、醸造家ニ於テモ自然爭テ其積出ヲ爲スニ至リ、爲ニ去月二十五日頃ヨリ本月七日頃ヘ掛ケ、府下ノ清酒問屋ヘ輸入セシ高ハ實ニ三萬有餘樽ニ上リタリ。是ヲ例年ノ入荷ニ



比スレハ凡テ一萬以上モ嵩ミタル爲メ、何レモ買控ヘノ姿トナリ、一層氣配ヲ挫キタルモノ、如シ。サレハ此儘競争止マス、造酒家競フテ積出シニ至ラハ、清酒ハ彌在荷嵩ミトナリ、隨テ品痛ミモ生スヘキニヨリ、追々投出スニ至ルヘク、終ニハ漸々相場ヲ低落セシムルノ不幸ヲ來スヘキヤ必セリ。サレハ假令運賃ノ幾分ヲ低廉ナラシムルモ、其價格ノ下落ヲ來ストスレハ、必スヤ造酒家ノ損失タルヲ免レス。如斯事ハ敢テ永續スヘキモノト思ハサレトモ、向後果シテ如何ナル結果ヲ現スヘキカ、尙ホ聞キ得ルニ隨テ記載スル所アルヘシトナリ。愚見ニヨルニ、此記事ハ至極親切ナル主意ニシテ、大ニ同意ヲ表スヘキモノト奉存候。トナレハ僅々五十錢又ハ一圓ノ爲ニ、大體ノ酒價五圓乃至十圓ノ響キヲ來スコトハ必然ニシテ、只サヘ引下ケントスル買出連中ハ、此機ヲ失ハス、共ニ買控ヘヲナシ、終ニ間屋ヲシテ投ケ出サシメントスルノ景況ハ、目前ニ見ルカ如クニ御座候。申迄モ無之候ヘ共、當酒ノ利益ヲ收ムルハ只今ヨリ後ノコトニ無之哉。ソレニ一朝價格沈滞ノ姿トナリテハ、其損失モ莫大ナル事ト奉存候。且又十駄四圓ノ運賃ハ、他ノ貨物ニ比スルモ、又從來ノ有様ヲ回顧スルモ、決シテ不廉

ト云フヘカラス。先ツハ適當ノ額ト相考候。然ルニ頗ル野心ヲ包藏スル競争船ニ積込ミ、十駄金一圓ヲ減スルトスルモ、千駄ノ手前僅ニ百圓ニアラスヤ。此ノ眼前百圓ヲ得ン爲ニ、根元ヲ傷ケ、他日ニ害毒ヲ殘サハ、帳尻ノ損益勘定ハ決シテ相償ヒ申間敷歟。夫故東京積ノ酒荷何時モ運賃四圓ト定マリテ出スコトト覺悟シ、順次掛引積開ヲナシ、彼ノ地ニ於テサヘ荷嵩ミト買出連中ノ申分ヲ作ラサル様可致事尤モ緊要ト奉存候。釀造家諸君ニシテ此決心ヲ定ムル以上ハ、汽船競争ハ御勝手次第ナリ。他日大ニ得ル所アラント欲シ、麥飯ニ鯉ノ策略ハ其手ニ乘ラヌト、泰然トシテ動カサル山ノ如キナルコソ、深謀遠慮ト申スヘケレ、乍序微志申上候。ト云ヘリ。爾時競争ノ顛末ハ今之ヲ詳ニスルニ由ナシト雖、酒家或ハ小利ニ惑ヒ大謀ヲ誤ルノ失計ハ、往々此ノ書云フ所ノ如キモノアリタルカ如シ。是ヨリ先二十年八月西宮ノ酒家相謀リ、資金十萬圓ヲ投シ盛航株式會社ヲ大阪ニ創シ、酒荷ノ回漕ヲ營メリ。既ニシテ之ヲ神戸ニ移シ、灘興業會社ト合併シ、改テ攝津興業株式會社ト稱シ、三十一年資金ヲ増シテ三拾萬圓トシ、又増シテ五拾萬圓トシ、本店ヲ西宮町ニ移シ、益其ノ盛昌ヲ致セリ。初メ灘興業會社



ノ起ルヤ、既ニ運輸ニ便ナリ、而シテ又收益モ多カラスト爲サス、益進ンテ擴張ヲ期セリ。而シテ其ノ尤モ關係ヲ有スル灘酒家銀行ノ失脚ニ會シ、遂ニ策ヲ決シ之ト合併セリ。然レトモ其ノ曾テ一タヒ解散ノ議ヲ決セルヲ以テ、其事情ヲ知ラサルモノハ、概ネ盛航會社ニ於テ興業會社ノ汽船ヲ購入シ、自ラ社名ヲ改メタルモノト爲セリ。其酒荷東京積ハ概ネ攝津興業株式會社及日本郵船會社ニ於テ之ヲ回漕シ、兩々對峙以テ今ニ至ルト云フ。附、五郷ノ地ハ、官設鐵道東海線ニ沿ヒ、西宮及住吉(中郷ニ屬ス)ニ停車場アリ。然レトモ東京酒積荷ハ、之ニ托スルモノ殆ト希ナリ。蓋シ汽車ハ汽船ニ比シ速達ノ利アルカ如クナルモ、其實多數輸送ニ當リテハ毎ニ停滯ヲ免レス。且其ノ既ニ新橋停車場ニ着スルヤ、即チ引取ラサルヘカラス。而シテ又之ヲ新川即問屋所在ノ地ニ轉送スルノ煩アリ。汽船ハ則チ然ラス、既ニ陸揚ノ後ト雖、貨主モシクハ問屋ノ囑ニ應シ、十日内外ノ保管ハ敢テ拒マス。故ヲ以テ受荷主常ニ汽船積ヲ喜ヒ、汽車積ヲ喜ハス。且其ノ運賃モ亦常ニ汽船ヨリ高價ナリト云フ。

解舟 解舟ハ積込ニ用キルモノト、陸揚ニ用キルモノトアリ。其ノ積込ニ用キルモノヲ灘地ノ方言ニ渡海舟ト稱シ、酒家所在地ヨリ其ノ藏出セル荷物ヲ搭載シ、大阪モシクハ神戸兵庫ノ港内ニ繫留セル東京積回漕船ニ輸送シ、其ノ陸揚ニ用キル者ハ、東京ニ於テ之ヲ瀬取舟又ハ五大力船茶舟ト稱シ、横濱モシクハ品川ニ入港セル回漕船ヨリ酒荷ヲ積取り、東京市新川大川端ニ輸送シ、以テ陸揚ヲ爲セリ。而シテ其ノ渡海舟ハ、往時ヨリ仲間アリ。其運賃ハ時ニ異動アリト雖、大略十駄ニ對シ四十錢ヨリ六十錢ノ間ヲ往來シ、其高低ハ皆酒家ト協定スル所ナリ。明治二十一年ノ文書ニ、當地方ヨリ神戸港兵庫港等ニ繫留セル汽船ニ運送スル酒荷之義ハ、當時ハ大抵積出ノ即日或ハ其翌日位ニハ本船ヘ積込濟ニ相成ルモ、時トシテ三日乃至五六日間モ滯船セサルヲ得サル事モ有之、如此場合モ同ク通常ノ運賃ニテハ困難不尠趣ヲ以テ、右等ノ場合ニ於テハ特別増賃トシテ積出ノ第二日目午後六時ヨリ、十駄ニ付一日ニ金十錢ツ、申受度旨請求ニ付、客月二十七日臨時取締役會議ニ付シ候處、右ハ無餘儀事情ニシテ、若シ之ヲ拒ムトキハ、兼テ憂ヒ居ル樽詰正味ノ減却即チ彼ノ滯船中云フヘカラ



ナル弊害ノ矯正方甚六ヶ敷就テハ請求之義ハ許容致置、右弊害矯正ハ、追々該營業組合へ嚴重掛合候方可然トノ旨趣ニ依リ、許容可致事ニ議決相成候條、右様御承知之上、増請求ノ節ハ、事實取調へ無相違ニ於テハ、相當ノ増賃御給與有之度、取締役ノ議決ニ基キ、此段及御照會候也。ト見エ、又三十二年ノ文書ニ、過日御協議申上候渡海増賃之義、同組合願出之通、今度協議之上、總テ一割増、泊賃之義ハ從前之通ト相決候間、右様御承知之上、御支拂相成度、此段御通報申上候。ト見ユ。其所謂瀨取舟モ、亦往時ヨリ仲間アリ、其ノ運賃等ハ、必ス之ヲ酒問屋ニ謀リ、酒問屋更ニ荷主ニ交渉シ、其ノ同意ヲ得テ始メテ之ヲ一定シタルカ如シ。十二年諸郷連署酒問屋ニ寄セタル文書ニ、昨十一年解運賃之義御照會有之、夫レニ付其節何レ特別之方法相設可申段、申進置候處、豈ニ圖ランヤ、瀨取仲間願之通増運賃御拂遣ハシ相成候趣、甚以テ不得其意ヲ、強談至極ト被存候。當方未タ承諾無之件、自儘ニ拂方相成、荷物代價計算之際書出シ有之トモ、一切採用不致候。右ニ付該仲間ヨリ幾度願出候共、當方ヨリ御通知申上候マテハ、増拂斷然廢止、舊來之運賃之外決シテ支拂方無之様、嚴重御取締有之度候。ト見ユ。以テ其ノ概況ヲ

想見スヘキナリ。是ヨリ先瀨取舟ノ風濤ノ爲覆没スルモノ甚タ多シ。然レトモ當時樽船ニ於テ其ノ損害ノ程度ニヨリ之ヲ辨償スル等ノ慣例アリ。○中 其後三菱會社汽船ノ瀨取舟覆没セルニ際シ、酒問屋舊例ヲ按シ損害辨償ヲ請求セルモ、三菱會社ハ社則ニ據リ峻拒應セス。是ニ於テ五郷酒屋相會シ、艱難相救フノ趣意ヲ以テ、議シテ解難破ニ關スル取扱規則ヲ定メリ。曰ク、解難事之節ハ、酒問屋へ報告ノ上、三菱會社ニ於テ散亂荷物取集方嚴重ニ取締、明細取調之上、酒問屋へ引渡スヘキ事。但シ難場出張、散亂貨物取拾ヒ等、都テ酒問屋へ引渡迄費用ハ、悉皆三菱會社ニ於テ辨償之事。曰ク、取集荷物酒問屋へ請取、大痛大透水入等、都テ捨リ荷物ニ相立テ、些少之上透又ハ濡等ニシテ、全體保存ノ分ハ、無難荷物之部へ加算之事。曰ク、全ク捨リ荷物ノ員數取調濟、印譯ヲ以テ、各荷主へ報告之事。曰ク、捨リ荷物其時ノ相場上下平均額ヨリ七分額ヲ以テ元直段ト定ムル事。曰ク、元直段取定ル上ハ、補助金額ハ積合無事荷總駄數ニ割合、十駄ニ付何程ノ掛リ金ト定ムル事。曰ク、大痛大透或ハ潮入等、捨リ荷物へ差加へ候分ハ、入札拂ヲ以テ金額明瞭ニ計算之事。曰ク、酒問屋雜費ハ荷主ニ於テ罹災之際ニ付百事注意



不得已費用ノ外節儉スヘキ事。但シ該費用ハ補助金額ノ内ヨリ引去リ、割合スヘキ事ト。因リテ艀難事貨物取扱明細書ノ式ヲ問屋ニ報シ、爾後難破アル毎ニ、據リテ以テ之ヲ處置セリ。其ノ後五郷ノ組合瓦解スルニ及ヒ、東中西三郷ニ於テ、別ニ艀難事取扱順序九條ヲ議定セリ。然レトモ其ノ大體ハ之ト同一ニシテ、其ノ異ナル所ハ之ヲ汽船帆走船ニ及ホセルノミ。未タ幾ハクナラスシテ帝國海上保險株式會社起ル。然レトモ獨所謂瀨取船ニ對スル保險ヲ諾セス。是ニ於テ概ネ皆渡海瀨取ヲ合セ、所謂東京積回漕船ト俱ニ保險ヲ約シ、以テ今ニ至レリ。或ハ云フ、是ヨリ先酒問屋ニ於テモ瀨取若クハ藏詰中往々人力ヲ以テ防クヘカラサルノ災害アルヲ憂ヒ、輸入酒類十駄毎ニ金三錢ヲ各荷主ヨリ徵シ、之ヲ利殖シ、事アルニ臨ミ其ノ金ヲ以テ荷主ノ損害ヲ補助セント謀レリト。或ハ云フ、帝國海上保險株式會社ト特約ヲ結ヒ、單ニ橫濱港及品川灣ヨリ新川大川端間ニ於ケル艀船ニ對シ保險ヲ約セント圖ルモノアリシト。然レトモ並ニ其ノ事情詳ナラス。或ハ云フ、東京灣ニ於ケル艀船ノ保險ヲ業トセルモノハ東京運漕株式會社ニシテ、今猶現存セリ。但其ノ保險料ノ高價ナルヲ以テ、酒家ニ於テ約ヲ結

ヘルモノ未タ多カラスト。

河港道路變更届出

八年○明治○紀元二五三五年一月十二日、河港道路變更ノ際ハ、其箇所限リ整頓毎ニ届出ツル所有ラシム。○法令類纂

河港道路變更届出事蹟

河港道路變更届出 法令類纂ニ、

乙第四號

河港道路變更ノ分、其ヶ所限整頓ハニ付テハ、自今官費自費ノ無差別、落成ノ上、實際入費ノ全額、官民費内譯取調、事業創竣ノ年月記載、可届出<sub>レ</sub>。此旨相達<sub>レ</sub>事。

但、明治六年來落成ノ分、本文ニ準ジ、可届出事。

明治八年一月十二日

内務卿 大久保利通代理  
内務大丞 林友幸

羽根田燈臺設置事蹟

三月十五日○明治八年○紀元二五三五年。武藏國羽根田○荏原郡ニ燈臺ヲ設ク。○法令類纂

第四號

武藏國羽根田ニ於テ、別紙第二號不動綠色ノ燈明ヲ設ケ、來ル三月十五日ノ夜ヨリ點燈<sub>レ</sub>。此旨布達<sub>レ</sub>事。

帝都時代ノ港灣